全学共通科目言語B連続企画

世界を知ろう!

2023年度 講演会筆録

（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語）

立教大学　全学共通カリキュラム運営センター

全学共通科目言語B連続企画

世界を知ろう!

2023年度 講演会筆録

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！ 2023 年度 講演会筆録

目　次

◉ドイツ語講演会

僕らは銃の代わりに言葉を手にする 4

日　時：2024 年 1 月 15 日（月）17 時 15 分～ 19 時 00 分
講　師：鈴木 克己 氏（東京慈恵会医科大学医学部医学科初修外国語研究室教授、中央大学兼任講師）
司　会：坂本 真一、ラング ハイコ

◉フランス語講演会

食から覗くフランス文化 20

日　時：2023 年 11 月 13 日（月）17 時 15 分～ 18 時 30 分
講　師：河合 恵美 氏（東京日仏学院・駒沢女子大学）
クロストーク：アレクサンドル・マンジャン
司　会：黒木 秀房

◉スペイン語講演会

知られざるスペイン：ガリシア州の言語と文化 34

日　時：2023 年 7 月 7 日（金）17 時 30 分～ 19 時 00 分
講　師：アンドレス・ペレス・リオボ 氏（同志社大学グローバル地域文化学部助教）
司　会：小川 佳章

◉中国語講演会

台湾総統選挙と中台関係の情勢 48

日　時：2023 年 7 月 11 日（火）17 時 10 分～ 18 時 50 分
講　師：門間 理良 氏（拓植大学海外事情研究所教授）
司　会：森平 崇文

◉朝鮮語講演会

朝鮮語を“続けて”“活かす”～韓国語のお仕事の最前線～ 62

日　時：2024 年 1 月 22 日（月）17 時 20 分～ 18 時 50 分
講　師：山崎 玲美奈 氏（早稲田大学非常勤講師、上智大学非常勤講師、NHK E テレ『ハングルッ！ナビ』講師）
司　会：金 恩愛

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～ドイツ語講演会～

僕らは銃の代わりに言葉を手にする

日時：2024 年 1 月 15 日（月）17 時 15 分～ 19 時 00 分
場所：池袋キャンパス 14 号館 D501 教室

講師：**鈴木 克己**氏（東京慈恵会医科大学医学部医学科初修外国語研究室教授、中央大学兼任講師）
略歴：1996 年中央大学大学院博士後期課程退学。
専門：現代ドイツ文学
主な論文：『記憶の残像、あるいはわれらの鏡像―シェルコ・ファタハ『白い大地』について―』『Father land / Mother tongue ドイツ語作家シェルコ・ファタハにおける祖国と言語』『イリヤ・トロヤノフ『世界収集家』に見る越境の諸相』

司会：坂本 真一（ドイツ語教育研究室／外国語教育研究センター准教授）
ラング ハイコ（外国語教育研究センター教育講師）

坂本（司会） 本日はお忙しい中、全学共通科目言語 B 連続企画「世界を知ろう！」ドイツ語講演会にお越しくださり誠にありがとうございます。ドイツ語教育研究室の坂本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は鈴木克己先生にお越しいただき、「僕らは銃の代わりに言葉を手にする」という題目のもと、ご講演をお願いしております。鈴木先生は東京慈恵会医科大学初修外国語研究室の教授を務めていらっしゃる方です。簡単にご紹介いたしますと、中央大学のご出身で、専門分野は現代ドイツ文学です。実は私自身、18 歳の時に中央大学に通っていたのですけれども、1 年次の最初に ABC（アーベーツェー）から習ったのが鈴木先生でした。20 年来のお付き合いをさせていただいております。その鈴木先生を本学にお招きすることができて大変うれしく思います。では鈴木先生、よろしくお願いいたします。

僕らは銃の代わりに言葉を手にする

鈴木 克己氏

鈴木 皆さん、こんばんは。鈴木克己と申します。もうすぐ学期末のお忙しい中、学生の皆さんも先生方もお越しいただきありがとうございます。11 月末に転んで右手の骨を折ってしまい、原稿を打つのが大変なので、すっきりとしたお話にはならないと思いますけれども、我慢して聞いてください。

それでは「僕らは銃の代わりに言葉を手にする」のタイトルのもとお話ししたいと思います。今日私はマスクを外してお話しますけれども、東京慈恵会医科大学では、隣に病院があるものですから、まだキャ

ンパス内ではマスクをするようにと言われています。ただ、一般の大学では学生の多くがマスクなしで授業を受けていると思います。

2020 年に新型コロナウイルス感染症が蔓延し、４月７日に７都府県で緊急事態宣言が発令されました。先生方は大変な思いをして授業を進めたことでしょうし、学生の皆さんも高校受験あるいは大学受験で不自由な生活をし、学生生活にもさまざまな制限がかかって大変だったでしょう。ようやく４年経とうとしている今、ポストコロナ時代になりつつあります。コロナ禍になり２年目に「学内の教員たちの前で、パンデミックと文化について話してほしい」と言われ、パンデミックにおいてわれわれに何ができるのかということについてお話ししました。その最後にカミュの『ペスト』を引用しました。

『ペスト』に登場する医師リウーは下記のように言います。

> 感染症（ペスト）と戦う唯一の方法は、誠実さということ。…
> 僕の場合には、つまり職務をはたすこと…
>
> ――カミュ『ペスト』249 ページ

東京慈恵会医科大学には臨床医師が多いのですけれども、その人たちに向かって「まずわれわれは今ある職務を果たさなければいけない」という話をして終わりにしました。実はこの頃、自分のことに集中するあまり、周りを見渡す視線や外への関心が非常に薄れていたということが、後になって分かりました。

2022 年にロシアがウクライナに侵攻します。そして 2023 年 10 月７日にハマスが越境攻撃をし、それに対してイスラエルの報復攻撃が始まり、未だに終わりません。こうした武力衝突は突然起こるものですが、それを戦争の「実相」だとすると、その前の歴史が「実態」であろうと思います。例えばウクライナに関しては、2014 年のロシアによるクリミア半島併合がありました。また、併合以前からすでに東部ではロシアとウクライナの問題が存在していました。併合後もいろいろな問題がありました。戦争は急に起こったのではなく、前々から準備されていたということです。今回のハマスに関しても、ハマスが急に攻撃したというより、17 年間にもわたるイスラエルによるガザ地区の占領[1]という問題がありました。さらにいえばイスラエル建国まで、あるいはオスマン帝国までさかのぼる話かもしれません。

戦闘は武器によって始まり、武器を置くことによって終わるかもしれません。ですが、それで平和が訪れるかというと、そうではない。平和というものは最終的には言葉によって構築されるものだと、私は思います。戦闘あるいは武力衝突が起こる前に、言葉を使い戦争が起こらないようにすることが大変重要だと思います。戦争を終わりにするのはどうしたらいいのだろうと、みんなが考えても、いったん戦争が起こってしまうとなかなか終わらないのが実情ではないでしょうか。

1　2007 年、イスラエルはガザ地区を完全に封鎖する。これにより人・物資の出入りが極めて難しくなる。

多様性を担保する複言語主義

ここで自己紹介をさせていただきます。

1984 年に中央大学の文学部に入学しました。実は、文学部を受けたのは中央大学だけで、他の大学は全て政治学科を受けました。浪人中に政治に興味が湧き、政治学を勉強しようと考えたのです。それなのになぜ文学部を受けたのかというと、小塩節先生という方が中央大学文学部独文科にいました。私が高校生だった頃、小塩先生はクラシック音楽番組などに解説者として登場され、また NHK のドイツ語講座でも講師を務めていらっしゃいました。当時、私はまだドイツ語を知りませんでしたが、テレビのチャンネルを回すとたまたまドイツ語講座を放送していました。楽しそうにお話しされる小塩先生がとても魅力的だったので、中央大学文学部を受験することにしました。そして受験した中で中央大学だけが「おいで」ということで、つまり合格したわけですが、通うことになりました。

最初に受けたドイツ語の授業の担当が小塩先生でした。70 人ほど入る教室にぎっしりと学生が待っていて、やがて小塩先生が入ってこられました。そして「こんにちは。これから 1 年間、ドイツ語をみんなで一緒に勉強しましょう」。ところが「これほど多くの学生が一緒に勉強するのは難しいですよね」とおっしゃるのです。どうやら、想定よりも入学辞退者が少なかったために、 1 クラスが 70 人以上になってしまったようです。そこで「このクラスを二つに分けます」とおっしゃいました。奇数は「い組」、偶数は「ろ組」という江戸の町火消しのような名前が付けられ、小塩先生が「い組は私が、ろ組はこちらの先生が……」と言うと、教室に若い先生が入ってこられました。私はろ組で、1 年間は小塩先生に習うことができませんでした。最初だけは小塩先生も含め、みんなで ABC（アーベーツェー）を勉強しましたが、その後は若い先生にドイツ語を習いました。

それでも 2 年次になれば別の授業で小塩先生に教えてもらえるだろうと考えていたのですが、小塩先生はドイツのケルン日本文化会館に館長として赴任されてしまい、帰国されたのは私が 4 年生の冬でした。というわけで学部時代は小塩先生とずっとすれ違いで、大学院に入りようやく小塩先生に習うことができました。

1989 年、大学院に入学しました。実は、同年 5 月に朝日新聞の雑誌『AERA（アエラ）』に「ドイツ語退潮 学生は敬遠、医学の世界も英語優先（リポート・語学）」という記事が出ました。その記事によると前年の東大独文科への進学者が 0 名だったのです。また、大学においてドイツ語履修者が減少しているということも報じられました。それほどドイツは人気がなかったのです。ところが 1989 年 11 月にベルリンの壁が崩壊、そして 1990 年の東西ドイツ統一によって、一気にドイツに注目が集まり、ドイツ語を履修する人が急増しました。

さて、外国語を学ぶ動機はさまざまだと思います。私の場合は文化が好きだったり、音楽が好きだったり、そして何よりも小塩先生に魅せられてドイツ語を学び始めましたけれども、皆さんの中には「その国に旅行してみたい」、あるいは「その国の人と話をしてみたい」、中には「モテたい」という人もいるかもしれません。「○○くん、ドイツ語ができるなんてかっこいい」と言われたい。ドイツ語ができることがかっこいいかどうかは分かりませんが、そういう動機で始める人もいるかもしれません。もしくは、先輩から「その外国語なら簡単に単位が取れる」という情報を得て、履修する人もいるか

もしれません。旅行したい、話してみたい、モテたいという動機の背後には“好奇心”があります。単位が取れるという動機の背後には“効率”があります。

「ドイツ」という世界を例に挙げると、その中には言語、文化、社会、いろいろなものがあります。もちろんそこには人もいます。それらが好奇心の対象ですね。モテたいからという理由でドイツ語を始めた人は、誰か別の人物に好意を抱いていて、その人物が「ドイツ語ができてかっこいい」と言っているわけですが、その人物はドイツという世界のものや人に関心があるから、ドイツ語ができることに対して「かっこいい」と言うのですよね。ですから、モテたいという動機の人も、第三者を通して、ドイツの世界のさまざまなものに好奇心が向かっていくかもしれません。

今、この場にはドイツ語を学んできた学生の方もいると思います。最初のハードルは意外と低かったのではないでしょうか。つまり、発音はそれほど難しくない。おそらくドイツ語の先生は、発音にはあまり時間を割いていないと思います。「ローマ字式で読めば何とかなるよ」と、どんどん進んでいくことが多いです。その割に、次の課に入ったところで人称変化や格変化といった変化表が出てくる。分からなくなってしまう人は、多くの場合、どちらの変化をやっているのか分からず混乱して、迷子になってしまいます。人称変化や格変化だけかと思ったら、変化しないものにも落とし穴があって、例えば前置詞の格支配がある。前置詞の意味を覚えるだけでなく、何格の名詞が来るかまで考えなくてはいけない。さらに３・４格支配の前置詞は、あるときは３格、あるときは４格、なぜそのような変身をするのだと思うようなものが登場してパニックになる……そういうドイツ語を修めた学生の方がこの場に来てくださっているのですね。

『ノルウェイの森』という作品を読まれたことはありますか？『ノルウェイの森』には、「ドイツ語の授業」や「ドイツ語の試験」についてのシーンが出てきます。

> ドイツ語の文法表を片端から暗記していると、なんだかふと不思議な気持ちになった。
>
> ———村上春樹『ノルウェイの森』（下巻 55 ページ）

この「文法表」とは、ドイツ語の不規則変化動詞です。教科書の後ろに出てくるようなもの。おそらくそれを暗記していたのでしょう。主人公であるワタナベくんがなぜ一生懸命ドイツ語を勉強しているのか、ハッキリとは書かれていませんが、こんなシーンがありました。

> 「ねワタナベ君、英語の仮定法現在と仮定法過去の違いをきちんと説明できる？」と突然僕に質問した。
>
> 「できると思うよ」と僕は言った。
>
> 「ちょっと訊きたいんだけれど、そういうのが日常生活の中で何かの役に立ってる？」
>
> 「日常生活の中で何かの役に立つというのはあまりないね」と僕は言った。「でも、具体的に何かの役に立つというよりは、そういうのは物事をより系統的に捉えるための訓練になるんだと僕は思ってるけど」
>
> ———村上春樹『ノルウェイの森』（上巻 245-246 ページ）

“物事を系統的に捉えるための訓練”だと。おそらくワタナベくんは、そういう意図のもと、ドイツ語を一生懸命に勉強しているわけですね。

ロンブ・カトーというハンガリーの通訳者がいます。同時通訳を初めて行った人で、10 数カ国語を操ることができるといわれました。ロンブ・カトーはこう書いています。

> 文法とは、体系です。全身全霊を打ち込んである言語の文法を身につけた者、文法事項の暗記という難行を通過した者は、体系化され得る知識のあらゆる分野において、体系化する能力を身につけたことになります。
> ———ロンブ・カトー『私の外国語学習法』米原万里訳、18 ページ（ちくま学芸文庫、2015 年（第 21 刷）（初版は 2000 年））

私は、大学 1 年次の最初に行われるオリエンテーションで、第 2 外国語を履修する学生に、いつもこの話をします。というのも、彼ら医学部の学生は、 2 年次や 3 年次になると、人体などさまざまなことを、自分の頭の中で組み立てて、体系化しなくてはいけない。一つの目安として、外国語を学ぶとそういうことが頭の中に入ってくるということを、 1 年次の時に話しています。「体系化され得る知識のあらゆる分野において、体系化する能力を身につけた」というのは、医学だけではなく、あらゆる分野において言えることだと思います。

もう一つ、ウンベルト・エーコの小説『薔薇の名前』はご存じですか。中世の修道院で殺人事件が起こり、ある使命で当地を訪れていたウィリアム修道士がこの事件の調査にあたります。この作品は映画化され、ウィリアム修道士をショーン・コネリーが演じました。殺人事件は連続殺人事件となり、ウィリアム修道士が修道院を探っていく。鍵となるのがアリストテレスの『詩学』第二部です。もちろんわれわれは第二部を知りませんが、その第一部は悲劇について書かれています。そして第二部は喜劇について書いてある、という設定になっています。ウィリアム修道士は第二部を書庫（図書館）で探します。そのとき若い助手が「マスター、これですか？」とウィリアム修道士に本を渡すのですが、ウィリアム修道士はこう言います。

> 「ちがう、これはアラビア語だ。愚か者め！ベーコンはいみじくも言ったぞ。学問の始まりは言語の習得にあると！」
> ———ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』（河島英昭訳、下巻 172 ページ）

大学で第 2 外国語を勉強するというのは、まさに学問の始まりでもあります。残念ながら最近は、それが大学でおろそかになっていると言いましょうか。特に私立の医科大学においては、医学の専門分野がどんどん 1 年次の方に降りてきて、外国語を学ばなくなっています。私が所属する東京慈恵会医科大学では、なんとか 1 年間、週に 2 回の外国語の授業を実施していますが、それもいつまで続くか分かりません。このままで学問は大丈夫なのか、という気がします。

さて話を戻します。修道院の書庫のシーンです。書庫には、全ての本が一つの言語に翻訳されているのではなく、さまざまな言語の本が収蔵されています。社会を、あるいは多様性を、担保しているのが言語なのです。

近年、「多様性を大切にしましょう」とよく言われます。なぜ多様性が大切なのか？その理由として、考えの異なる他者を尊重するということが、一つの態度だと思います。

他者と出会うと、第一印象を抱きますね。さて、その第一印象はどこから来たのでしょうか？子どもの場合、第一印象はあまりなく、自然と子ども同士で遊び出すと考えられます。しかし大人は見た目や肌の色など、いろいろなことから第一印象を抱いて、距離をとります。今、目の前にいる人について何も知らないにもかかわらず、さまざまなイメージを持って見てしまう。しかし言葉を使って話してみれば、それが変わるかもしれません。もちろん、分かり合えることも、分かり合えないこともあります。でも逆転の発想で、相手もそう思っているのではないか。立場を入れ替えてみると、相手も私のことは分からない、だから話してみようという、そうした姿勢が非常に重要ではないかと思います。もしあなたが、その場で死んでいなければ……初めて出会ってすぐに撃たれてしまったら、もう対話も何もできないわけですけれども、死んでいないならば、それが何を意味するのか。他者を尊重することは、自己を守ることである。自分も丸腰でいて、相手を撃つわけじゃない。他者を認めるということは、自己の存在を認めてもらうということです。だから多様性というのは重要なのだと思います。

多様性を担保するために、ヨーロッパでは「複言語主義」が採用されています。EU の 27 ある加盟国ではそれぞれ異なる言語が使われますが、どれが 1 番でどれが 2 番かなどという序列をつけません。それが複言語主義の考え方です。EU の言語政策にはヨーロッパ参照基準（言語共通参照枠）というものがあり、その中で複言語主義が謳われています。「言語学習は一生のものである」と言われます。つまり、言語は多数あり、一つの言語を習得して終わりではなくて、さまざまな言語を勉強し、吸収して、相互作用で学んでいきましょうという認識が、複言語主義の中にはあります。

こうした複言語主義を背景とした「複文化」という考え方もあります。文化が単なる並列ではなく、比較・対比、活発な作用、そして統合を目指すというもの。それが現在のヨーロッパです。なぜ複言語主義が重要なのかというと、それが平和をもたらすからです。平和をもたらすのは言語なのだということです。言葉によって平和をもたらす、そういった思想が複言語主義に含まれています。

多言語主義と複言語主義の違いを簡単に紹介します。多言語主義は一つか二つの言語を学習し、それらを相互に無関係のままにして、究極目標として「理想的母語話者」を考えます。例えば「ドイツ人みたいになればいい」といった考え方です。これには限界があります。母語と外国語との関係が非対称であることから次のことが生じます。「理想的母語話者」を目指した学習で仮に第 2 の外国語が加わった場合、必然的に第 1 の外国語との関係性を引き下げることでしか第 2 の外国語学習が成立しないのです。それに対して複言語主義は、全ての言語能力が何らかの役割を果たすことができるような言語空間を作り出します。なかなかイメージすることが難しいのですけれども、少なくとも母語と諸外国語とは対称性の関係にあるのです。未知の言語に相対したとき、既知の言語に関する知識を動員して内容を理解しようとする。こうした言語活動を支持しているのが複言語主義です。

言葉を学ぶということは、その言葉を話す人や社会、文化、歴史などを知ろうとすることであり、

言葉を話す人や世界を尊重する姿勢の表れだと、私は思います。相手を尊重するということは、逆に自分を守るということですし、先ほど言ったように、言葉による平和への貢献もあります。また、新たな言語と出会うことで自分自身を、あるいは変化していく自分自身を知ることにもつながります。ゲーテの有名な言葉に、次のようなものがあります。

> Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.
> ———Johan Wolfgang Goethe: Maximen und Reflexionen. In: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausgabe, Bd.17, 1991, München, S. 737.

外国語を知らない人は、自分の言葉についても何も知らないのだ、という内容です。われわれには、意識せずに自分のものにした言語がありますけれども、改めて別な視点で見たときに大きな発見があるのではないでしょうか。他のものと響き合うことで生まれる複文化だと私は思っています。

ドイツ社会の変化：多様なる人間の生を保障する反ファシズム社会

さて、また自己紹介に戻ります。

1990 年の東西ドイツ統一には、民主主義の勝利のようなニュアンスがあり、多幸感が漂っていました。ところが実は、新たに加わった新連邦州ではネオナチによる外国人排斥事件も起こっていました。

1992 年 8 月 22 日から 24 日にかけて、ロストック・リヒテンハーゲンで外国人排斥暴動が起こりました。ネオナチは「外国人は出ていけ、ドイツはドイツ人のものだ」というスローガンのもと、難民申請をしていた人々が住むアパートに石や火炎瓶を投げ、最終的には彼らが避難するためにそこから出ていくという、まさにネオナチが望んだ通りになってしまいました。こうしたことは旧連邦州でも起こり、外国人をターゲットとした犯罪が増えました。1992 年 11 月 23 日、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州メルンで、トルコ人一家が放火され 3 人が亡くなりました。1993 年 5 月 29 日にはノルトライン＝ヴェストファーレン州ゾーリンゲンでも放火事件が起こり、5 人のトルコ人が亡くなりました。

そうした中、私は 1993 年 9 月にドイツのヴュルツブルク大学に留学しました。ゾーリンゲンの放火事件があったことから少し心配していたのですけれども、ヴュルツブルクにはそういった雰囲気はなくのんびりと過ごせました。その頃は大学院でロマン派の勉強をしていました。

留学では、外国人として生活するという経験をしました。また、難民申請をしている女性と仲良くなり、さまざまな事情を聞きました。結局、彼女の難民申請は却下され、彼女はアメリカに行きました。寮の隣室に住んでいたトルコ人からは「ネオナチに襲われそうになったら、こうすると良い」という秘訣を聞きました。それを具体的には申し上げませんが、それをすれば相手にされないというわけです[2]。こうした経験を通して、私は移民と呼ばれる人々への関心や共感を抱くようになり、その

2　講演ではここと は違う表現をしました。そのときの表現で不快な思いをされましたら、お詫び申し上げます。

分野を勉強するようになりました。

第二次世界大戦後の 1950 年代から 1960 年代、ドイツは奇跡的な経済復興を果たしました。当時は戦争で男性が少なくなっており、労働者が不足していました。どこかから労働力を持ってこなくてはいけないということで、はじめはイタリア、スペイン、ポルトガルあたりから外国人労働者が集められました。1961 年、西ドイツとトルコで労働力募集協定が結ばれ、トルコから労働者が大挙してドイツにやってきました。マックス・フリッシュという作家は「労働力を呼んだのだが、やってきたのは人間だった」と言っています。日本も同じようなことをやっていますけれども、やってくるのは労働力ではなく人間なのです。その人には家族もいます。それを考えずに、人手が足りないから呼んで、足りたら「もう十分だから帰ってください」と言うのです。だから外国人労働者は、ゲストの意味を含む Gastarbeiter（ガストアルバイター）という名が付けられています。しかし、帰れと言われても、すでにここで家族が生活し、子どもたちは学校に通っている。どうやって帰るんだという話になりますよね。

やがて、はじめは母語で、それから習ったドイツ語で、自分の気持ちを綴る人々も登場します。1970 年代の終わりから 1980 年代にかけて、そうした人々の作家同盟や芸術家同盟が設立されました。設立の中心になったのはガストアルバイターとしてドイツに来た人々ではなく、実際はドイツに留学してそのままドイツに残り仕事をしていたインテリが多かったのですけれども、外国人労働者によるドイツ文学という形で旗揚げされます。これがドイツ文学の番外地なのかという点が、1990 年代における私の関心事でした。彼らは表現活動を通して、ドイツ語で、自分の生に関わる戦いをしていたのです。

第一世代の詩人アラス・エーレンは「自分の詩がトルコとドイツの文学に架ける橋になるだろうと思っていたけれども、橋の両端が岸と繋がっていないということに気付いた。しかも橋が短くなったわけではなく、橋はますます長くなっていく。二つの岸の間がどんどん広がっている、しかも以前よりも早いスピードで両岸が広がっている」[3]と言っています。こうした言葉に第一世代の思いが表れています。

また、幼い頃、両親に連れられてイスタンブールからドイツにやってきたツェラ・ツィラクという女性詩人は次のような短い詩を書いてます。

橋にも終わりがあるとわかっているから
急いでわたらなくてもいい

でも橋の上は一番寒い

———ツェラ・ツィラク「走って暖かくなる」（詩集『象の背に乗る鳥』1991 年）[4]

ドイツとトルコという両岸の間にかかっている橋の上に、今、自分はいる。その橋の上は寒いんだ

3 Aras Ören: Privatexil. Rotbuch Verlag, Berlin, 1977, S. 70.
4 Zehra Çirak: Sich warm laufen. In: Vogel auf dem Rücken eines Elefanten. Köln, 1991, S. 93.

と。辛い状況が思い浮かびます。

ツェラ・ツィラクと同世代の作家ザファ・シェノジャックも、小さい頃にドイツに渡ってきた人ですが、もう少しポジティブに力強いことを言っております。

> 両足は二つの岸を同時に歩むことを学んでいる。第二世代は深い谷間に橋をかけることができる。彼らは二つの文化から取り出した要素を新たな蕾（つぼみ）へと結ぶことで、二つの文化から自分独自のものを探さなければならない。
>
> ———ザファ・シェノジャック[5]

３人の「橋」についての言葉を紹介しました。「橋」というメタファーはこうした作家たちそれぞれのアイデンティティを明確に表しています。私は外国人としてドイツで暮らす中で、彼らへの関心や共感を持つようになったことはすでにお話ししました。一方で私が彼らと大きく異なることも気づきました。それは私には帰る所があるのに対して、彼らにはないということです。そうした人たちに向かって、どうして「出てきたところへ帰れ」という残酷な言葉をぶつけるのでしょうか。

戦後ドイツの文化的活力低下の原因について、戦後 34 年経った 1979 年、評論家のハンス・マイヤーが「ユダヤ人がいなくなってしまった」[6]ことを原因に挙げています。ドイツの文化的な風景が平板となり、対立軸が失われたと考えられます。その６年後、シャミッソー賞が創設されました。シャミッソーとは、フランス革命でフランスから逃げてドイツにやってきた作家です。岩波文庫から『影をなくした男』という作品が出ています。彼の名を冠したシャミッソー賞が、1985 年、ミュンヘンの芸術アカデミーとロベルト・ボッシュ財団によって創設され、2017 年まで 33 回の賞が与えられました。シャミッソー賞は 37 名、奨励賞は 44 名、受賞者は 78 名。足し算をすると合わないのは、奨励賞の受賞後にシャミッソー賞を獲得した作家が複数名いるからです。出身国は 20 カ国以上になります。

シャミッソー賞がなぜ 2017 年に終了したかというと、2000 年代になってからシャミッソー賞の授与基準が大きく変わり、最終的にはドイツで生まれた人でも移民の背景を持っているだけで受賞の対象になったのです。つまり、ドイツで生まれ、ドイツの学校に通った、いわゆるドイツ人でも、両親がドイツ以外の国から来ていれば移民の背景を持つと捉えて受賞の対象者になりました。そうした人たちがどんどん増えてきています。そのため「初期の意図は達成できた」ということで、2017 年に終了したものと思われます。これはドイツ社会の変化に伴ったことだと考えていいでしょう。

外国人の数は、1961 年時点では——東ドイツにも契約労働者という形で共産国から何人もやってきていましたけれども——西ドイツには 70 万人の外国人がいて、全人口の 1.2% だったといわれて

---

5 Zafer Şenocak : Plädoyer für eine Brückenliteratur. In: Eine nicht nur deutsche Literatur. Zur Standortbestimmung der "Ausländerliteratur". Hrsg. von Irmgard Ackermann und Harald Weinrich. München 1986, S. 69.

6 Hans Mayer: Zweifache Heimkehr. In: Nach dreissig Jahre. Die Bundesrepublik Deutschland Vergangenheit-Gegenwart-Zukunft. Stuttgart, 1979, S. 262.

います。1974 年時点は、ドイツに入ってきたトルコ人を帰す政策が始まった頃で、外国人の数は 400 万に膨れ上がっていました。それでも全人口の 6.5%。これが 2022 年には、外国人 1160 万人、全人口の 14% を占めるまでになりました。それ以外にも移民の背景を持つドイツ人（ドイツ国籍を持っている人）が 1220 万人、全人口の 14.7% いるので、ドイツの人口の 3 割近くは外国人あるいは移民の背景を持つドイツ人ということになります。私がドイツに住んでいた 1990 年代と比べても、特に大都市では外国人の数が非常に多くなった印象があります[7]。

そういう意味では、ドイツは多様なる人間の生を保障する社会になりつつあるといえます。反ファシズム社会ということです。人間社会は多様です。それを束ねて一つのまとまりにして多様性の芽を摘むのが全体主義（ファシズム）です。ドイツはそうではない社会を目指そうと努力しています。もちろん、うまくいっていない部分もたくさんありますけれども、そういう社会を目指そうという理想は持っているのではないかと思います。

多様な人間、さまざまな文化的背景を持った人々が共生する社会。そこでは社会的な統合も必要となるでしょう。特に、言葉が分からないと分かり合うこともできません。そのため、そうした人たちに対してドイツ語を教えるという政策もあります。ただ、それになじまない人たちもいます。問題の一つが「並行社会」です。ドイツの社会とは別な社会がドイツの国内に生まれている。それをどう解消するかというと、やはり対話しかないと思います。人口の 3 割にもなった外国人あるいは移民を背景に持つ人たちを、暴力で追い出すのか。暴力は新たな暴力を生みます。暴力の連鎖をどう止めるのか、これがわれわれの課題です。写真①は、小学校の中庭の壁に描かれた絵で、いろんな国の子どもたちが手をつないでいます。

写真①小学校の中庭の壁画
Mauerbemalung im Schulhof einer Grundschule
https://de.wikipedia.org/wiki/Multikulturelle_Gesellschaft#/media/Datei:Schulhof_-_Mauerbemalung.jpg

だから私たちは、暴力に訴えるのではなく、言葉を選ぶのです。平和は言葉でしか構築できないと私は思います。外国語を学ぶことが非常に重要だということは、私の所属している大学でも常に言い続けています。外国語を学んでいる学生の皆さんは平和の戦士です。教えている先生方は、平和の戦士をますます増やし、世の中を平和にしましょう。ご清聴ありがとうございました。

ラング（司会） 鈴木先生、とても面白く、包括的で、重要な講演をありがとうございました。

7 連邦統計庁のサイトによる。http://www.bpb.de/61646

それでは質疑応答に入ります。

質疑応答

質問者①　今日はありがとうございました。「平和は言葉でしか構築できない」とおっしゃっていました。ドイツについてあまり詳しくないのですが、メルケル前首相や要職に就いている方などが国民に語りかける場面が、ニュースで取り上げられることがあります。日本ではなかなかそういう場面にはお目にかかれません。その理由として国民性などの違いもあると思うのですが、先生としては日本とドイツにどういった違いがあると思われますか？

鈴木　おそらくドイツでは「分かり合えないことがある」という考えを前提としていると思います。どこまで分かり合えるかは、言葉でしか表現できない。一方、日本は「みんな分かってるよね」という同調圧力のような雰囲気があり、実は分かり合えていないのに、それを言えないことが問題ではないかと思います。日本はいわゆる「単一民族」というような刷り込みがありますが、ドイツでは文化的背景が異なるさまざまな人たちが活躍していくためには、やはり言葉でしか分かり合えないので、政治家が言葉を非常に大切にするのではないのかと思います。日本の政治家は言葉を大切にはしてないでしょうね。聞いていて悲しくなってきます。

質問者①　では、日本はどうしたらいいのでしょうか。ドイツのように、とはいかないかもしれませんが。

鈴木　授業で「分かり合えない」ということを強調するしかないのでは、と思います。「あなたはどう思っているのか」とか、そういうところからしか始まらないのではないでしょうか。例えば、私の大学は上下関係が厳しいのですよ。そうした環境がよくないと思っても「ミスだ」と言えない雰囲気があります。そういった環境をなくすには、本当に一歩一歩の戦いです。ですから、まずは１年次の段階で「みんなが自分の思っていることを言える場にしましょう」と、われわれがそういう環境を作っていくしかないのかなと。本当に一歩一歩進むしかないと思います。

質問者②　本日は貴重なお話をありがとうございました。言葉に携わる者として、非常に勇気をいただけるような内容でした。立教大学でフランス語を教えております、外国語教育研究センターの関と申します。私は最近、フランス語圏であるケベックの移民作家について研究しています。本日の講演で先生が紹介されていた３人の移民作家のうち、３人目の方はとてもポジティブだとおっしゃっていました。ケベック文学ですと、移民作家は当初、ルサンチマンにあふれたような、移民の生きづらさを作品に残していたけれども、今は新しいケベック社会を作り出す担い手として、非常にポジティブで前向きな内容に変わってきているという分析があります。ドイツはいかがでしょうか？

鈴木　ドイツでも初期の外国人労働者たちの作品は同じような感じでした。そのため、文学の対象と

いうよりも社会学の対象とされてきました。最近の作品は、先生がおっしゃるように、初期とは違った……そういう意味ではドイツ人なのです。ただ、背景が多様なので、普通のドイツ人という表現は変ですけれども、そういうドイツ人には手が届かないことを表現できる。ドイツ文学の中で新たな地平を拓いていく形です。

質問者②　番外地ではなく、文学の中で確固たる地位を築いているということでしょうか？

鈴木　はい、そうですね。

質問者③　立教大学でスペイン語を教えております、外国語教育研究センターの松本と申します。非常に心に響く講演をありがとうございました。タイトルがセンセーショナルでしたので、ドキドキしながら拝聴しました。私も言語を教える者として、英語以外の言語を学ぶ意義は何かということについて、最終的には世界平和だと思っていたのですけれども、自分の考えの中に少し乖離があって、先生の講演を伺うことで溝が埋まったような気がします。他者を理解することが自分を守ることにつながるというお話が心に響きました。

日本もドイツのように、これからどんどん移民を受け入れていかなくてはならない社会になってくると思います。しかし、そういう現実を受け入れる心の準備が全くできていない人が多い。すでに外国からいらっしゃった方がたくさんいるけれども、見ないふり、見えないふりをしているような状況だと考えていますし、将来はもっと増えていくと思います。学生も含めて、多くの人が日本をベースに生活していくわけですが、それほど遠くない将来、どのような形で、日本にある異なる文化に接し

ていくべきか、示唆をいただければと思います。

鈴木　確かにすごく大きな問題だと私も思います。例えば在日コリアンに関しても、われわれは彼らと共生できている状態とは言えないのではないか。ヘイトクライムもまだあります。その上、また新たに外国人がやってきて……となると、本当にわれわれは考えなくてはいけない問題だと思います。ただ重要なのは、ネガティブな情報が大きく広がって、しかもその情報の真偽は定かでないのに、信じたい人がどんどん増える。そういうおかしな情報に対して、「それは違う」とわれわれは言い続けなくてはいけないと思います。そのくらいでしか抵抗できないのではないかと。先ほども言いましたように、若い人は偏見を持っておらずその方がうまくいくこともあると思うので、そういった若い人たちをどんどん支援してあげる、あるいはそういう人たちをどんどん育てるというのがわれわれの使命だと思います。

質問者④　お話をありがとうございました。私は被追放民に関心があります。トルコからの移民と違い、被追放民は主に東欧に住んでおり、言語や血統という面でいわゆるドイツ人と部分的につながりがある人たちで、トルコ系とはまた違う移民ではないかと捉えています。彼らの文学作品の特徴などについて、ご存じであれば教えてほしいです。

鈴木　すみません、分からないです。ドイツは現在、出生地主義に移ったと思いますが、1990 年代はまだ血統主義でした。なので、ユーゴスラビアなどの内戦から逃れるために、両親がもともとドイツ人だったということで、ドイツ語を喋れないけれどもドイツにやってくる人たちが増えていましたね。そういう人々の作品を私は読んだことがないので、どんなことを書いているのかは分からないのです。ただ、もっと前の時代になると、それこそ本日お越しの立教大学文学部の古矢先生が研究されているような作家が出てきます。同じ文化圏と言っていいのかどうか分からないですけれども、そういう扱われ方があったのではないかと思います。ただ、彼らがドイツ語でどう表現しているかは、読んだことがないので調べてみたいと思います。古矢先生、何かご存じですか？

古矢　すみません、その質問に答えられるわけではないのですが、関連する質問でお許しいただければと思います。本日の講演でトルコ系の作家をご紹介いただきました。これらの作家はドイツ語だけで書いているのでしょうか？それともトルコ語や、２言語で書いているのでしょうか？

鈴木　最初に紹介したアラス・エーレンはトルコ語で書き、ドイツ語に翻訳したものがメインです。それ以外の２人の作家はドイツ語で書いています。

古矢　では、アラス・エーレンはトルコ語で書いたと。活動しているのはドイツですか？

鈴木　はい。

古矢　それに関連して、例えば多和田葉子のように日本語とドイツ語で書いている作家もいます。多和田葉子は労働者としてドイツに行ったわけではありませんが、移民文学の定義、つまり何をもって移民文学というのか教えていただけるとありがたいです。

鈴木　おそらく、移民というよりも、外国を背景に持っているということが、現在の大きなくくりになると思います。

古矢　では、多和田葉子も移民文学のカテゴリーに入るということですね。

鈴木　そういうことです。彼女はシャミッソー賞も受賞しています。

古矢　分かりました。私も外国語を教え、勉強する人間として、改めていろいろなことを考えるきっかけとなる講演でした。ありがとうございました。

質問者⑤　本日は貴重なお話ありがとうございました。私は全学共通科目の「多文化共生社会と日本」という授業を受けています。ちょうど先週、「日本が多文化共生社会を実現するためにはどうすればいいのか、政策を考えなさい」という難しいテーマについて発表したところで、ドイツの移民政策についても深く勉強したので、今日のお話とつながって、さらに学びを深めることができました。

私は、日本が多文化共生社会を成功させるためには、人間の内面や意識に訴えかける教育と、移民たちの権利を保障する制度という、両面からの政策が必要だと思っています。ただ、それを実現するにはどうしたらいいのだろうというところで、今、自分の中で止まっています。私たち一般市民は政府を直接動かせるわけではないので、せっかくこうして学んでも、一般市民としてできることはあるのか、学んだことをどうやって広めていけばいいのか、理想論しか見えません。現実的にはどのように動けばいいのか、ご意見がありましたら教えていただきたいです。

鈴木　確かに制度は重要ですよね。制度が社会を生むともいえます。ホロコーストで 600 万人ものユダヤ人が殺されましたが、その彼らが、今、２万人を超えるガザの人々の命を奪っています。これは制度が問題ではないかと私は思います。もちろん、人間の心にも問題があるかもしれないけれども、それを作り出すのは制度だと。新書で『イスラエル軍元兵士が語る非戦論』という作品があります。著者はイスラエル軍の元兵士で、現在は日本に住み、日本語で書かれています。著者はかつて学校で、イスラエル人としてどういう愛国心を持つのか、という教育を受けました。イスラエルは「周りは全て敵だ」と思っているわけです。だから自分が兵士として国家を守らなくてはいけない。制度をもとに、そういった行動が生まれていると考えていいと思います。ではわれわれが制度をどうやって作っていくか、あるいは変えていくかというと、外国の人たちがどういう問題を抱えているかを知ることも重要ですが、何よりも選挙です。選挙で変えていくしかないのです。今は投票率がそれほど高くないですよね。若い人たちが「選挙で動かそう」となれば、日本は変わっていくでしょう。以前、日本でも民主党政権が生まれた時は、そういった雰囲気がありました。選挙をすることができるのはわれわれの権利です。できない国もあるわけですから。選挙で変えていくしかない。投票するためにはわれわれに知識がなくてはいけません。おそらく、それしか方法はないだろうと思います。

質問者⑤　ありがとうございます。

鈴木　私から質問したいのですが、本日ご参加いただいている、いろいろな言語を教えられている先生方は、どのような動機でその言語を選んだのでしょうか？

教員　外国語教育研究センタードイツ語教育講師の馬場と申します。本日はご講演ありがとうございました。私の場合、受験して唯一受かったのがドイツ文学科で、ドイツ語を始めてみたら、良い先生方や留学の機会に恵まれ、結果的に長くドイツ語を勉強してきています。なので、最初から言語そのものに勉強の目的やモチベーションがあったわけではなく、始めてみたら面白かったという偶発的な要素になります。それでも続けてきて非常に良かったと思っています。

教員　フランス語を教えている、外国語教育研究センターの河野と申します。ご講演ありがとうございました。中学校でフランス語の授業があったのが、フランス語との最初の出会いです。その頃からすごくできたわけではなく、中高の先生方に「今、大学でフランス語を教えている」と言ったら非常に驚かれるだろうというくらい、底辺にいました。でも、外国語を学ぶといえば英語という状況下で、

初めてフランス語という別の言語を学ぶことが大変面白いという感覚が私の中にあり、そこから離れられずにいました。勉強を進めるにつれて、フランス語の面白みや難しさの深みにはまっていきました。自分の中で「もっと知りたい」ということが増え、現在はベトナム語や先住民の言葉も勉強しています。言語を学ぶということは世界が広がる第一歩だと、私は考えています。なので、学生の皆さんには恐れずにぜひ第一歩を踏み出してほしいなと思います。

教員　学生の方にもぜひお聞きしたいです。

学生（文学部史学科２年）　ご講演ありがとうございました。ドイツ語を選んだ理由は、高校の倫理の先生が授業にドイツ語を取り入れていて、ドイツ語が面白そうだという第一印象があったからです。実際に大学でドイツ語を学ぶうちに、同じゲルマン系の言語である英語との比較が楽しくなりました。似ている言葉でもスペルが違ったり、逆に同じところもあったり。そういう小さな気付きや発見が面白くて学習を続けています。

教員　外国語教育研究センタードイツ語教育講師の林です。ドイツ語を学び始めたきっかけは、小学生の頃、父親の仕事の都合で家族とともにドイツへ行ったことです。否応なしにドイツ語を学ばざるを得ませんでした。ですから、少し移民のような感じもありますね。才能やモチベーションというよりも、腐れ縁的な感じなので、他の人が「ドイツ語を勉強します」とまっすぐに言えるのはうらやましくもあります。逆に、ドイツ語をやっていなければ全く別の仕事に就いていたのではないかという気もするので、恵まれていたと思うようにしています。学生さんたちには、いつ運命が変わるか分からない。いきなりドイツに行くかもしれないし、アジアのどこかの国に行くかもしれないし、将来どうなるか分からないので、何事もやってみるのがいいという話をしています。

ラング（司会）　私が日本語を勉強し始めたのは 15 歳でした。学校でフランス語と英語を学び、それなりに面白かったのですが、もう少しチャレンジしたいという気持ちがあり、一般の方が夜間に学べる市民大学で日本語の勉強を始めました。もう一つのきっかけはビデオゲームです。ビデオゲームをオリジナルでプレイしたかったのですが限界に気付き、大学で日本学を副専攻として学びました。そこで、日本語というよりも、日本の政治や歴史などいろいろなテーマに出会いました。その頃にはゲームはどうでもよくなっていました。つまり日本語をツールとして使ったのです。そういうきっかけでした。

ラング（司会）　それでは時間となりましたので、お開きにしたいと思います。皆さま、本講演会にご参加いただき、ありがとうございました。最後に、とても面白く、そして重要な講演をいただいた鈴木先生に感謝を表して大きな拍手をお願いします。

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～フランス語講演会～

食から覗くフランス文化

日時：2023 年 11 月 13 日（月）17 時 15 分～ 18 時 30 分
開催方法：ハイブリッド型開催（対面・オンライン）

講師：**河合 恵美** 氏（東京日仏学院・駒沢女子大学）
略歴：一般社団法人 西洋アンティーク鑑定検定試験協会代表理事。駒沢女子大学非常勤講師。フランス在住 20 年の後、フランス政府公認機関・東京日仏学院をはじめ、カルチャースクール等にてアンティークや西洋文化に関する講座を開講。
主な訳書に『美しいフランステーブルウェアの教科書』（パイインターナショナル、2018 年）、監修協力書に『西洋骨董鑑定の教科書』(パイインターナショナル、2018 年)。

クロストーク：アレクサンドル・マンジャン（外国語教育研究センター教育講師）
司会：黒木 秀房（外国語教育研究センター教育講師）

黒木（司会） 本日は講演会「食から覗くフランス文化」にお集まりくださり、誠にありがとうございます。司会を務めさせていただきます立教大学外国語教育研究センター教育講師の黒木と申します。本講演会は全学共通科目言語 B 連続企画「世界を知ろう！」というシリーズの一環として、立教大学全学共通カリキュラム運営センターフランス語教育研究室の主催で、フランス語学習の継続を願い、企画したものです。本日のタイムスケジュールは、まず河合先生にご講演いただき、その後河合先生とマンジャン先生とのクロストーク、それから皆さんからの質疑応答を、それぞれ 20分ずつ予定しております。

それでは早速、講演会に移りたいと思います。まずは立教大学外国語教育研究センター教育講師のマンジャン先生に本講演会の趣旨について簡単にご説明いただくとともに、本日の講師である河合恵美先生をご紹介いただきます。

マンジャン 皆さん、こんばんは。フランス語教育研究室のマンジャンです。講演会「世界を知ろう！」は、英語以外の 5 つの言語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、朝鮮語、中国語の継続学習を目指す学生やその言語や文化に興味のある学生を対象に、連続企画として開催されています。昨年度の講演会や今年度の他言語の講演会に参加したことのある人もいるかもしれませんね。

さて、今回の言語はフランス語で、テーマは「食から覗くフランス文化」です。東京日仏学院／アンスティチュ・フランセ東京教員で、駒沢女子大学講師の河合恵美先生をお招きし、食から覗くフランス文化、フランス料理の世界を中心にご講演いただきます。

河合先生はパリ日本文化会館などで勤務された後、東京日仏学院をはじめ各カルチャースクールにて、ガストロノミーについて、地方の食文化、マルシェ文化、チーズ入門といったフランスの食文化

をテーマとした講座をご担当されています。また、西洋アンティーク鑑定検定試験協会代表理事をお務めになるなど、フランスの芸術文化に幅広い知見をお持ちです。フランスの文化を知ること、言語を学ぶことで広がる世界の面白さを感じていただけたらうれしいです。それでは河合先生、よろしくお願いいたします。

河合 恵美氏

宮廷で生まれ、発展したフランス料理の歴史

河合　ただいまご紹介にあずかりました河合です。「世界を知ろう！“食から覗くフランス文化”」講演を始めさせていただきます。まず、フランス料理のイメージなのですが、この講演は大学１年次生を対象としていると伺いました。18 歳、19 歳くらいの学生がフランス料理にどういうイメージをお持ちかというと、何となく「高級料理で値段が高そう」とか「マナーやドレスコードがあって堅苦しそう」「一品ずつ出てくる」「大きなお皿に小さい料理が出てくる」「結婚式やパーティーなど特別な時の料理」というイメージがあるのではないかと思います。どうしてフランス料理は一品ずつ食べるのか、あるいはどうして高級なのか、昔からそうだったのか、というようなことをお話ししたいと思います。

中世～ルネサンス、17 ～ 18 世紀の宮廷の食卓

フランス料理の歴史は、宮廷で生まれました。この画像は、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」という有名な壁画です。「最後の晩餐」の絵を見ると、食事の風景としてはかなり変ですよね。たくさんの人がいるのに１列に並んでご飯を食べる。今でしたら、十数人でご飯を食べる時は、向かい合って話ができるような形で食べますよね。実は中世の頃、宮廷の人々はみんな、このように１列に並んでご飯を食べていました。なぜならパフォーマンスが行われていたからです。ここに中世の絵がありますが、音楽を奏でたり、踊ったり、詩吟を吟じたり、そのようなパフォーマンスとともに食事が行われていました。この時代は料理そのものよりも、宴やパフォーマンスが食卓に登場していたのですね。

ここからルネサンスの時代に入っていきます。それまでの中世の時代は、テーブルの上を見ていただくと分かるように、カトラリーはありませんでした。フォークが出ていませんよね。料理は手づかみで食べていたのです。ルネサンスの時代にようやくフォークが伝わります。どこからやってきたかというと、ルネサンス発祥の地であるイタリアからフランスに伝わってきました。イタリアはフィレンツェのカトリーヌ・ド・メディシスというお姫様が、後のフランス国王となる人の元に嫁入りしました。当時、フランスは非常に野蛮な国だとイタリアから思われていました。「野蛮な国に行くのだから、自分の国にあるものは全部持っていこう」と、このお姫様はフランスにさまざまな人や物を持ち込んだのです。料理人や菓子職人、パティシエ、リキュール、もちろんフォークも、それからシャーベット、フィナンシエ、マカロンなどのスイーツもです。それ以外にも、ありとあらゆる洗練されたものを持ち込みました。ここからフランスの文化はめきめきと発展を遂げました。

やがて、テーブルが洗練されていきます。テーブルを美しく飾るという文化が出来上がり、いよいよヴェルサイユ宮殿はルイ 14 世、ルイ 15 世、ルイ 16 世という黄金時代を迎えます。この時代には、食事と同時のパフォーマンスはなくなり、食卓が非常に豪華な劇場のようになっていきます。画像の通り、会食者が到着する前からテーブルがありとあらゆる料理で埋められました。こうした方式を「フランス式サービス」と呼び、この時代に大きく発展しました。フランス式サービスでは、ゲストが来る前からすでに料理が完成して盛り付けられ、テーブルの上に置かれています。今でもフランス式サービスは残っています。例えば、みんなで食べるバイキング、あるいはこの画像のように、大勢で食事をする時に最初から料理が出ていることがあります。

フランス革命後

しかし、フランス革命が 1789 年に起こり、貴族文化が消滅してしまいます。この時、大変困ったのが、貴族に雇われていた料理人でした。貴族はみんな外国に亡命するかギロチンで殺されてしまったために、料理人は失業してしまったのです。もちろん、外国に亡命する貴族が料理人を一緒に連れて行くこともあり、それによってフランス料理が外国に広がっていくきっかけにもなるのですが、一方で仕えていた主人がギロチンで殺されてしまった料理人も多くいました。そうなったら無職です。仕方がないので街へ出て、レストランを開きました。実は、レストランはこの時代に初めて登場します。それより前は、酒場やカフェはあったのですが、食事をするためのレストランはありませんでした。貴族にはみんなお抱えの料理人がいましたし、庶民はそんなところに行く余裕はなかったからです。ですから、レストランが誕生したきっかけはフランス革命にあった、ということになります。

その後、「ロシア式サービス」と呼ばれるものが出てきました。実は、これが現在のフランス料理のサービスです。ロシア式サービスでは、料理が一品ずつ出てきます。発端はパリにいたクーラキンというロシア人外交官が、人を招いておもてなしをしたことでした。その際に料理を一品ずつ出しました。その理由は諸説ありますが、ロシアは寒いので、最初から料理を出しておくと冷めてしまう。そこで作りたての料理を一品ずつ出すというやり方をしていたと考えられています。このロシア式サービスならば、料理が一人ずつサービスされて、しかも温かいうちに食べられるということで、だんだんこの方式が普及していきました。

ロシア式サービスでは、自分だけが食べていい個人のお皿（領域）があります。これがフランス革命の精神にぴったり合致しました。そもそもフランス革命は、宮廷が贅沢をしすぎて庶民がパンを食べられなくなり起こった革命です。ですので、無駄で豪奢な料理の盛り付けは必要ない、という革命の精神に合います。それに、最初から全部の料理が出ているフランス式サービスでは、座る位置によって食べられない料理もあります。たいてい席次が決まっていて国王や王妃が真ん中に座り、端に座った人は中央に置かれた料理には手が届かず食べられないという不平等さがありました。でもロシア式なら、どの位置に座っても自分の分の料理がきちんとサービスされるので平等です。フランス革命のスローガンである「自由、平等、博愛」の「平等」に合うということで、ロシア式サービスがフランスで受け継がれていきました。

フランス式サービスからロシア式サービスへは、すぐに移行されたわけではなく、半世紀ほどかけて、およそ 1880 年頃に定着しました。今から 140 年ほど前です。その頃になってやっと一品ずつ

食べる現在のフランス料理の形式が生まれたと考えていただければいいのではないかと思います。
一品ずつ出てくるので、そのたびに食器を換えます。ですからたくさんのカトラリーと、たくさんのお皿と、たくさんのグラスがある、そういったテーブルセッティングになるわけです。

国賓をもてなすフランス料理

さて、国賓をもてなすフランス料理についてお話しします。この画像は、上皇陛下が天皇であられた時代に、オバマ大統領をお招きした時の宮中晩さん会の様子です。メニューはフランス料理です。こちらの画像は今上天皇とトランプ大統領です。トランプ大統領はハンバーガーがお好きだそうですが、もちろんハンバーガーではなく、フランス料理でもてなしています。デザートには必ず富士山型のアイスクリームを出すというのが宮中晩さん会の特徴です。さて、日本にはお寿司や天ぷらなど国を代表するおいしい高級料理があるのに、なぜ宮中晩さん会にフランス料理を出すのでしょうか。
フランスは「饗宴外交」の国といわれます。饗宴外交とは、食事でもてなすことで外交を有利に進めていくことです。日本では、首相が他国の首相を招いて食事をすると、メディアが「庶民が苦しんでいるのに高級料理を食べて……」と批難しますが、国のトップが相手国のトップを招く食事を政治として行う、というやり方を最初に実行したのはフランスでした。いつからかというと、歴史で聞いたことがあると思うのですが、ウィーン会議の時です。ナポレオンがヨーロッパの国々に戦争をしかけて、その結果、ヨーロッパの領土がぐちゃぐちゃになってしまいました。ナポレオンは失脚しましたが、その後フランス政府やヨーロッパのさまざまな人々が集まって、さあどうしようかという会議をした、それがウィーン会議でした。フランスはいわゆる敗戦国のようなもので、この会議では、賠償金を払わなくてはいけないような不利な立場でした。そこに、当時の外交官であるタレーランが、なんと外交官ではなく料理人を連れていく、それでうまくやってみせると言いました。そしてアントナン・カレームという料理人を連れていったのです。カレームは貧しい生まれで、小さな頃から自力で生きろと放り出されて、料理人としてはい上がった人です。やがてタレーランの料理人となり、ウィーン会議で大成功して、あちこちの宮廷に仕えることになり、最後はロスチャイルド家の料理長を務めました。カレームが何をしたのかというと、料理をとにかく美しく、おいしそうに作ることを提唱したのです。他にも、ソースを分類したり、「ピエス・モンテ」といって料理を立体的な彫刻や建築のように盛ったり、そういったものを確立しました。
それから、ブリア＝サヴァラン。この人は法律家であり政治家であり、美食家でした。『美味礼讃』という本を刊行し、その中で「食事は政治の手段となる」と言っています。サヴァランという名前はお菓子やチーズの名前にもなっています。

饗宴外交はフランスのお得意術

そういう歴史もあって、饗宴外交はフランスのお得意術なのです。2010 年、フランスの美食文化がユネスコの人類の無形文化遺産に選ばれました。実は選ばれたのは料理（キュイジーヌ）ではなく「ガストロノミー」です。ガストロノミーとは、単においしい料理だけを指すのではありません。世界には他にもおいしい料理がたくさんありますが、フランスのガストロノミーは、例えばテーブルのデコレーションや、料理とワインの組み合わせ、食事中にワインの香りを嗅ぐというような仕草やマナー、

さらに前菜とメインのソース選びなどフルコースの知識、そういったこと全てを含めたもの。フランスのガストロノミーには精神的な部分が多分に含まれるのです。

日本の和食も無形文化遺産に登録されていますが、理由が異なります。和食の場合は、新鮮な食材や健康的な食生活といったものが選ばれた理由です。ユネスコに登録された料理にもいろいろあり、アジアでは日本と韓国の料理、アメリカ大陸ではメキシコ料理、後はほとんどが地中海近辺の料理です。その中でも、フランスは「ガストロノミー」が選ばれた理由なのです。

フランスのガストロノミーは、レストランの登場により第２の黄金期を迎えます。有名なレストランに行くことがステータスとなり、レストランは出会いの場になっていきます。これもフランス料理が発展した大きな理由の一つです。

それからホテル。19 世紀の後半以降、万博により観光産業が一般化して、多くのホテルができました。その中で格式のあるレストランが開業し、有名シェフたちはホテルのレストランで研鑽を積むようになります。

さて、日本の宮中晩さん会の話に戻りますが、フランス料理が提供されていましたよね。それはなぜか。日本の皇室は、明治初期、イギリス王室を規範としたのですが、イギリス王室がそもそもフランス料理を出していました。明治天皇も西洋料理が好きでした。大正天皇の時代には秋山徳蔵という料理人をフランスで修行させ、その後天皇の料理長として迎えました。

こうしてみると、フランスのガストロノミーはメイド・イン・フランスではありません。もともとはイタリアから入ってきた文化でした。サービスはロシアから仕入れたもの。そして、貴族のまね事、つまり宮廷文化が庶民の間で広がることで発展していきました。しかしながら、中世の頃にパフォーマンスとともに料理を味わっていた「饗宴」の要素、やはりこれがフランス料理だと思います。私の講演はここまでとさせていただきます。ありがとうございました。

黒木（司会）　河合先生、充実した内容を、たくさんのイメージとともに詳しくお伝えくださりありがとうございます。それでは、河合先生とマンジャン先生とのクロストークに移りたいと思います。

クロストーク

マンジャン　河合先生、大変興味深いお話をありがとうございました。河合先生がフランスに興味を持たれたきっかけを伺いたいと思います。大学ではフランス語やフランス文化をご専攻されていたの

でしょうか？

河合　はい、大学で初めてフランス文学の勉強を始めました。

マンジャン　フランス文学でしたか。当時は、フランス語は難しいとよく言われましたが、フランス語の学習についてはいかがでしたか？

河合　そうですね。大学時代、私はフランス文学科にいました。大学１・２年次はフランス語の授業がほぼ毎日あったのですが、フランス人の先生に、とにかく暗記をたくさんさせられました。受験勉強がやっと終わったのにまた暗記かと思って、その頃はフランス語が全く好きになれませんでした。でも、フランスに行って分かったのですが、フランスの小学生も全部暗記するのですよ。

マンジャン　そうですね。フランスでは詩も暗記します。

河合　結局、暗記したことが最終的には身になったような気はします。でも勉強している時は大嫌いでしたね、暗記は。

マンジャン　よく分かります。さて、今回の講演ではあまり触れられなかった、フランス人の普通の食事についてお話ししていきたいと思います。私自身よく質問を受けるのですが、フランス料理はコース料理のイメージが強いせいか、日常の食事も複雑なレシピで作られた料理をおしゃれに食べていると思われています。実際のところ、普通の食事はどんなものですか？

河合　まず朝食に関しては、本当に適当です。お茶かコーヒーなどの飲み物と、前日に買っておいたパンをタルティーヌにして食べたり、ヨーグルトや果物だったり、時間をかけないものです。フランス人は、人をもてなす時には、まるで貴族のように、おしゃれにいろいろと作ってくださいます。ところが普段の料理は冷凍ピザをオーブンに入れるだけだったり、お肉を簡単に焼いてスーパーで売っている袋入りのサラダを合わせるだけだったり、その差が激しいなと思います。人を招く時や、クリスマスや家族の誕生日などイベントがある時はすごく張り切って、１週間も前から用意をして、計画的に買い物をして。普段の食事との差にいつも驚きます。

マンジャン　イベントの食事には真剣ですよね。

河合　「宴」というものが、フランスの食文化にとって大事なのかなと思います。

マンジャン　次に、よくある質問ですが、フランス人は１日３食ですか？

河合　１日に３食、食べていると思います。朝食を抜かした人も、たいていどこかでつまみ食いしま

すから。朝食は軽いもの、そして昼食と夕食で３食食べていると思います。フランスはまさに階級社会なので、労働者階級の人は朝しっかり食べないと動けないこともあると思います。朝が遅くてブランチからスタートする人もいると思います。歴史的には、労働者階級と貴族階級で、食事の時間が全く違いました。貴族はそもそもお昼ぐらいに起きて、デジュネ（昼食）が午後４時や５時ということもありました。昔は階級によって違ったのですが、現在はおおむね３食召し上がっていると思います。

マンジャン　私自身は、朝ご飯を食べます。でも、食べない人やコーヒーだけ飲む人もいます。先生がおっしゃった通り、フランス人は自由に憧れています。やはり社会階級の国ですよ。

河合　本当にそれは感じます。

マンジャン　もう一つ質問です。フランス料理といえばパンを思い浮かべますが、フランス人は毎食、パンを食べるのでしょうか？

河合　この質問は、「日本人は毎日ご飯を食べますか」という質問と似ていると思います。フランス革命はパンが食べられないから起こりました。そういう意味では、パンはまさに国民食。でも、パンの消費量は統計的にどんどん減っています。1900 年頃、フランス人は１日にパンを約１kg 食べていました。バゲット１本が 250g ですから、毎日４本食べていた。バゲットが主食だったということです。それがどんどん減っていて、私の友人にもパンをほとんど食べない人が割といます。特に夜は食卓に出てきても食べないということが多いです。ただ、日本も白米を食べる量が減っていますよね。昔おかずは少しで、白米でお腹を満たしていたけれども、世の中においしいものがいろいろと登場したので、そこまで白米を食べなくなりました。それに似ていると思いませんか。フランスもパン以外の良質な食べ物が食べられるようになったので、パンをそこまで食べなくてもよくなったのではないでしょうか。ただ、レストランに行ってパンは頼みません。日本の水と同じで、頼まなくても絶対に、しかも無料で出てくるものです。そういう点では、フランスはやはりパンの国だと感じます。

マンジャン　水は出てこなくて頼むことがありますが、パンは必ず出てきますね。同じような質問ですが、フランス人は毎日毎食ワインを飲むのでしょうか？

河合　フランスといえばワインの国だと思っている人が多いですよね。でも今、フランスではワインの消費量も減っています。かつては世界でワインの消費量が一番多いのがフランスだったと聞いていますが、今はまだおそらくベスト５には入っているとはいえ、ワインの消費量は減っています。最近、私が驚いたのは、フランス人が一番飲んでいるワインがロゼだということです。私の印象では、ロゼは南フランスで夏の暑い時に冷やして飲むようなもので、味わって飲む高級なワインとは思っていませんでした。でもそれが１位だということは、フランスにおいて、うんちくを傾けながらワインを飲む文化が変わってきているのだと思います。特に Z 世代と呼ばれる若者たちの何割かはアルコールを飲まないと聞いています。それから、ワインではなくビールを飲みますね。カフェに行ってもワイ

ンよりビールを頼む人の方が圧倒的に多いと感じます。マンジャン先生はどうですか？

マンジャン　やはり世代によって違います。祖父の世代は昼も夜もワインを飲んでいましたが、私の両親はそれほど飲みません。イベントの際に飲む程度です。

河合　世代の差は感じますよね。年配の方ほどワインにうんちくを傾ける印象がありますし、お昼からカフェでワインを飲んでいるのはたいてい高齢者の方ですね。

マンジャン　そうですね。私の世代、つまりＸ世代はワインを飲みますが、おっしゃる通り、次の世代は飲みません。ところで最近、フランスで地ビールが流行っていますね。

河合　「フランスはワインの国だったんじゃないの？」と不思議になるほど地ビールがはやっています。レストランではなくて、ブラッスリーなどでは地方のビールを売りにして料理を作っているところもありますので、フランス料理とワインという一般のイメージからすると、ずいぶん変わってきたなと感じます。

マンジャン　私の出身地であるオーヴェルニュ・ローヌ・アルプにはぶどう畑が多いのですが、地ビー

ルの工場もとても多いです。水と関係がありますね。

河合　水代わりにガブガブ飲んだりしていますよね。また最近、自動車の酒気帯び運転も厳しくなりましたね。日本は１滴でもだめですが、フランスの場合は飲んでも運転していましたよね。

マンジャン　私の親世代まではそういった危ない行動がありました。私の世代はとても気をつけています。

河合　どんどん厳しくなって、現在は「ワイン２杯まで」と言われています。とはいえ、２杯までなら飲んで運転していいというところが日本と違うなと思います。そうしたことも、若者たちがワインを飲まなくなったことと関係あるのかもしれません。

マンジャン　パンの話に戻りますが、パンといえばチーズ。チーズについてお話しいただけますか。

河合　私はチーズが大好きです。なぜかというと、私は肉を食べないのです。ですからタンパク源としてチーズを食べます。フランスにいた時はいつもチーズを食べていました。日本でもカマンベールなどのチーズがスーパーで売られていますが、臭いがしない。日本のチーズは冷蔵庫に入れておいても臭くない。フランスのチーズは、冷蔵庫を開けた瞬間に臭ってきますよね。

マンジャン　それに、冷たくして食べるチーズも、常温に戻して食べるチーズも、少し温めて食べるチーズもありますよね。

河合　かつてド・ゴール将軍が「数百種類ものチーズがある国をどうやって治めろというのか？」と言ったほどで、フランスのチーズの種類は本当に豊富です。

マンジャン　答えを知っていますけれども、あえて質問します。チーズは全て臭いのですか？

河合　いえ、そんなことはありません。例えば、モッツァレラやフロマージュ・ブランなど、フレッシュチーズには臭くないのもあります。ただ、臭いチーズが有名になりすぎたせいで、エポワスや青カビチーズなど臭いのあるチーズのほうが“チーズらしい”というイメージがあります。ハードタイプのコンテやエメンタールなどのチーズは日本人にも食べやすいのではないでしょうか。

マンジャン　チーズには難易度がありますね、初心者向けとか玄人向けとか。

河合　本当にそう思います。私も、初めてフランスでシェーブルを食べた時は無理だと思ったのですが、不思議なことに、フランスに住むうちに食べられるようになって、やがて大好きになりました。おそらく納豆も同じではないでしょうか。はじめは苦手だったものが、食べられるようになって、大

好きになったりしませんか？

マンジャン　納豆ははじめは嫌いでしたが、2 回目はまあまあで、3 回目から好きになりました。

河合　まさに同じですよ。

マンジャン　一番大きな妨げは偏見ですね。

河合　思い込みですよね。若い時に異文化に触れれば、偏見が外れるのも早い。でも、ある程度考えが固まってしまってから新しい文化に触れても、無理なものは無理となってしまうので、やはり大学生の若いうちに異文化を体験しておいた方が面白いと思います。

マンジャン　マイペースで、少しずつチーズの世界を発見したらいいですよね。あと、フランス料理の多様性についてお話しいただきたいです。フランス料理は、どこでも同じものですか？

河合　私はずっとパリに住んでいたので、パリの料理がフランス料理だと勝手に思い込んでいたのですが、地方に行くと、また違いますね。日本では、その土地で育ったものをおいしく食べることを「地産地消」といいますが、フランスはそれを実践する国だと思います。地方に行くと、その土地でしか食べられない地方食があります。ブルゴーニュ地方はエスカルゴ、ブルターニュ地方はガレット、南仏ではラタトゥイユと、地方ごとの名物料理があるのです。そうした名物料理は、その地域で暮らしている庶民たちが食文化として培ってきたものです。一方、ヴェルサイユの宮廷から降りてきた食文化は、どちらかというと均一的に広がったのではないかと思います。宮廷から降りていったフランス料理と、地方で独自に育った食文化の 2 種類があると思います。地方ではオリジナルの食文化がクローズアップされていて、豊かだなと感じます。

マンジャン　先ほど、先生はお肉についてお話しされていました。最近、食べるお肉の量を減らす人が増えていますね。ビーガンもいます。フランスのベジタリアン料理をどう思いますか。

河合　私が「肉を食べない」というとよく「ベジタリアンですか？」と聞かれるのですが、「ペスカタリアンです」と答えます。お魚は食べるんです。乳製品も食べます。

マンジャン　偶然にも、私も全く同じです。

河合　そうでしたか。今度、お魚を食べに行きましょう。フランス人の中には、ベジタリアンでなくても赤い肉は食べない人がいたり、白いお肉は食べる人もいます。非常にバラエティーに富んでいます。そうはいっても、フランスは基本的にお肉の国です。そこで私がなぜ暮らしていけたのかというと、レストランで「この食材を除いてほしい」と頼むと、どんな安食堂であってもたいてい OK なのです。

例えば「オムレツにベーコンを入れないで」と言うと、抜いてくれます。それは、注文してから料理を作るからですね。日本で同じことを頼むと、「すみません、もうできているので」ということがよくあります。フランスはそういうところが自由ですし、料理人の権限というか差配があります。なので、お肉を食べない私でも、フランスでは外食も含めた食生活をとても楽しめました。

マンジャン　ありがとうございます。それでは参加者の皆さんからの質疑応答に移りたいと思います。

質疑応答

質問者①　ベジタリアンやビーガンがフランスで増えてきて、フランスでは対応ができるけれど、日本では難しいという話がありました。最近フランスからお客さまがいらっしゃると、ほとんどビーガンの方で、日本でどんなお店にお連れしていいのか、本当に困ります。特にパリからいらっしゃる方はほとんど肉を召し上がりません。そういう方々を日本でどんなお店にお連れすればいいのかなどについて、お話しいただけるとありがたいです。

河合　一人一人にカスタマイズした食生活がこれから必要になってくる中で、日本は追いついていないというようなことがよく言われます。ただ、食文化はピンからキリまであります。たいてい高級なところほどカスタマイズに対応してくれます。それは世界中同じ。私は先ほど「フランスでは対応してもらえる」と言いましたが、もちろん対応できないところもあります。星のついたレストランなら基本的に対応してくれますが、学食でそんなことを言っても無理です。ですから、どうしても経済格差のようなものがあると思うのですが、ただ日本の場合、このピンキリの差が少ないと思います。高級店でもそうでない店でも、例えば吉野家などの大衆店でもサービス対応が大変いいです。そういう部分で平均化しているので、カスタマイズ対応までは難しいのかなという気もします。マンジャン先生どうでしょうか。

マンジャン　二つの提案があります。京都に行くと、ベジタリアン料理のレストランが多いです。おそらく肉を口にしない僧侶が食べていた料理です。もう一つはビュッフェレストランに行くこと。そこまで高くなく、好きな料理を食べられます。

河合　ビュッフェはフランス式サービスですしね。好きな料理を選べて、いいアイディアだと思います。

マンジャン　最近、トレーサビリティを導入した和食レストランが増えています。例えば、立教大学の近くにある「はーベすと」もそうですし、郷土料理のビュッフェを作るレストランもあります。

河合　今、インバウンドが増えてきているので、飲食店としても外国人の多様性に対応しようと、少しずつ動きが出てきているのかなと思います。これまでは、アレルギーがある人や食べられないもの

がある人はマイノリティで、レストランに迷惑をかけないようにというふうに、あまり外食ができませんでした。外国人旅行者が大勢来ることによって、そういう人たちも救われていくかもしれません。フランスはもともと観光客を多く受け入れる国ですし、多文化を受け入れてきた歴史があります。だからこそ、さまざまな食文化への対応がフランスで進んできたのかなと思います。

マンジャン　特に都市部では顕著です。

河合　そうですね。都会はそういった対応が早くから進んでいたように思います。

質問者①　ありがとうございました。

質問者②　コーラの浸透度はどれくらいですか。コーラとペプシはどちらが飲まれていますか？

河合　コーラは英語だと「コーク」と言いますが、フランス語では「コカ」と言います。フランスでは、コカはかなり浸透しています。

マンジャン　本家のコカ・コーラがあるし、アンダーブランドもありますね。

河合　例えば、パン屋のセットメニューで選べるドリンクには、必ずコカが入っています。その程度には飲まれています。ペプシと比べると、圧倒的にコカ・コーラだと思います。

マンジャン　そうですね。フランスも少しアメリカ化しているのでしょう。

河合　アメリカ人が 1920 年代あたりからどんどんパリに住み始めたことと関係あるのか、関係ないのかどうか。

マンジャン　あるかもしれませんね。あとはマーケティングの力でしょう。

河合　確かにコカ・コーラのマーケティングは大きいでしょうね。

質問者③　私はドイツ語教師をしています。フランスで地ビールがよく飲まれるようになってきたということでしたが、地ビール以外にも、ヨーロッパからさまざまなビールの流通があると思います。ドイツビールもはやっているのでしょうか？

マンジャン　大企業のビールは人気がありますね。ハイネケンやヒューガルデンなど、ドイツ、オランダ、ベルギーのものがよく知られています。フランスのビールでは、アルザス地方の「メテオール」という地ビールがあり、小さい工場があちこちにあります。それが今フランス国内で一番消費されて

いるビールではないかと思います。小さな会社の地ビールなので、海外ではあまり知られていません。フランスには大きいビール工場がないといわれるのですが、小さいビール工場がたくさんあります。

質問者④　私は大学１年次生で、第２外国語としてフランス語を学んでいます。フランスの食文化や料理をあまり食べたことがないので興味があります。日本で手軽に本格的なフランス料理を食べられるお店はありますか。

マンジャン　私のおすすめは二つあります。飯田橋にあるクレープ屋がその一つで、「ル・ブルターニュ」です。同じく飯田橋に、私の町であるリヨン料理を提供する「ルグドゥノム ブション リヨネ」というレストランがあります。100％リヨン料理ですが、量だけ違います。私からみると４歳の子どもの量です。フランス人の食事がしたかったら３人分を注文すればいいでしょう。でも、質はフランス料理そのものです。おすすめです。

河合　“フランス料理そのもの”は、初めてフランス料理を食べる日本人の口に合うと思いますか？

マンジャン　日本人はフランスのソースの重さに慣れていないと思います。

河合　そうなんですよね。

マンジャン　野菜の味が隠れている気がします。油っぽさについては、おそらくステレオタイプ通りですね。南部フランスの地中海料理を食べてみたら、より食べやすいと思います。ブッフ・ブルギニョンより、サラド・ニソワーズ（ニース風サラダ）とかブイヤベースとか。輸入品店も東京にはいくつかあります。インターネットで探せば出てきます。

河合　そうですね。今、日本のフランス料理のレベルはすごく高いと思います。シェフがフランスで修行して戻ってきて日本でレストランを開く場合、本場の味を知っているけれども、ソースの味が日本人には重いとか、この量は日本人には消化できないと分かっているので、日本人向けにアレンジした料理を出すお店がほとんどです。先ほどおっしゃられたリヨン料理店のように、味を変えずに出すところは貴重だと思います。初めて食べるとおいしいとは思えないかもしれませんが、料理はおいしいかおいしくないかではなくて、自分の食文化の歴史がそれにまだ合っていないというだけです。例えばフランスのお菓子、私は以前は甘すぎて食べられませんでした。日本の甘さが控えめなお菓子に慣れていたので、フランスのしっかり甘い文化を受け入れられなかったのですが、今ではパリブレストなど、いかにもなフランスのスイーツが恋しいと思うことがあります。

マンジャン　甘さは、余裕のある家庭の消費と関係があります。もともとは砂糖がなく、フランス人は蜂蜜でケーキを作っていました。砂糖が手に入るようになってからは砂糖をたくさん使うことがステータスになりました。でも最近、ルーツにさかのぼり元の料理に戻ったり、よりヘルシーな食べ物を好むようになってきましたね。

河合　20 世紀にポール・ボキューズという人が「ヌーヴェル・キュイジーヌ」（新しいフランス料理）の中心になりました。ソースやバターなどから脱却し、いかに軽く、健康的にするか、そういう方向へ進もうとしています。

　また、フランスでミシュランの星の付いているようなレストランで、しょうゆを使わない店はないと思います。何が言いたいかというと、外国の調味料などをフランス料理に上手に融合させることを、どこのフランス料理店でもやっています。これはフランス料理におけるここ何十年間かの変化だと思います。悪い意味ではなく、健康だったり、マンジャン先生がおっしゃったような「自然や昔に帰ろう」だったり、そういった流れになっているのでしょうね。東京にはフランス料理店がたくさんありますので、ぜひ行ってみていただければと思います。

黒木（司会）　河合先生にフランス料理の奥深さについて分かりやすくお伝えいただいたとともに、マンジャン先生とのクロストークでさらに掘り下げていただきました。ありがとうございました。お時間となりましたので閉会とさせていただきます。本日は「世界を知ろう！」講演会にご参加いただきまして、ありがとうございました。

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～スペイン語講演会～

知られざるスペイン：ガリシア州の言語と文化

日時：2023 年 7 月 7 日（金）17 時 30 分～ 19 時 00 分
開催方法：ハイブリッド型開催（対面・オンライン）

講師：**アンドレス・ペレス・リオボ**氏（同志社大学グローバル地域文化学部助教）
略歴：スペイン・ガリシア州出身。文学博士（立命館大学）。スペイン語、ヨーロッパ地域研究などの科目を担当する傍ら、日本近世史について研究している。

司会：小川 佳章（外国語教育研究センター教育講師）

小川（司会）　本日の司会を務めます、立教大学外国語教育研究センターの小川と申します。本日の講師の先生をご紹介いたします。アンドレス・ペレス・リオボ先生は、本日の講演テーマでもあるスペイン・ガリシア州にお生まれになり、バルセロナ大学で歴史学を修め、また早稲田大学等で研鑽され、立命館大学で文学博士の学位を取得されました。ヨーロッパ研究を出発点としながらも、新しい外国語と出会うことによって世界を広げてこられた先生は、まさに学生と私たち教職員にとって最高のロールモデルであると考え、このたび講演をお願いしたところ、ご快諾いただきました。それでは、よろしくお願いいたします。

ペレス・リオボ　皆さん、こんにちは。ユーラシア大陸の西の端のガリシアの地から、東洋の一番東の端の日本に来たアンドレス・ペレス・リオボと申します。今日、講演できるのは非常にうれしいことです。うれしい理由は二つあります。一つは、小川先生に講演会のテーマを確認したときに「地元の話をすればいい」と言われたので、「地元の自慢話でも構わないでしょうか」と聞いたら、それで構わないとのことでうれしいです。もう一つは、私が今から 20 年前に抱いていた夢を実現できているからです。というのも、私が日本語を学び始めた大学生の頃、将来は日本語を使ってスペインと日本をつなぐことに貢献したいという漠然とした夢を抱いていました。今日、地元ガリシアを日本人の皆さんに紹介する機会が与えられたので、その夢がかなった気持ちです。

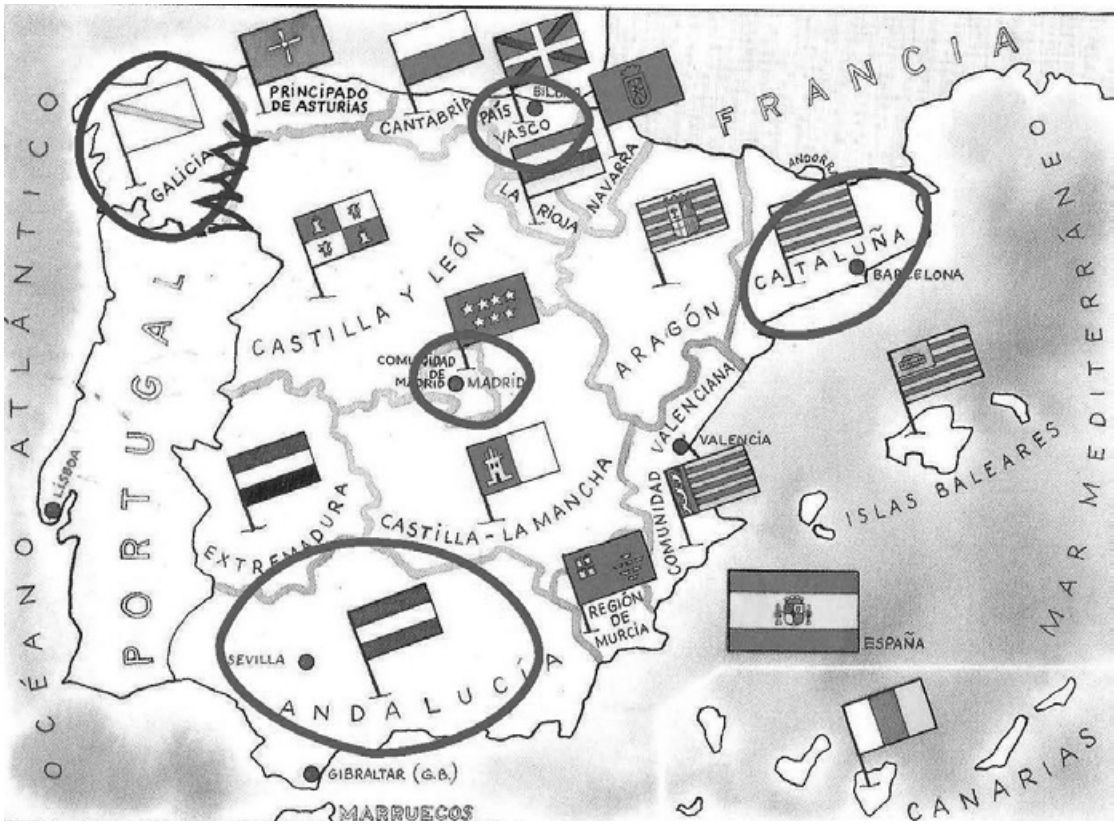
アンドレス・ペレス・リオボ氏

今日は「ガリシアの紹介」「ガリシアという言語」「自分のキャリアについて」の三つのテーマでお

話しします。学生の皆さんが、将来、第２外国語をどのような形で活用するか、私の経験がお役に立てばと思います。

ガリシアの紹介

図①はスペインの地図です。スペインの政治制度は地方分権であり、17 の自治州があります。連邦国ではありませんが、自治制度があるのでほぼ連邦国だといわれます。ここに各自治州の旗が描かれています。よく知られているのはマドリードですね。マドリードはスペインの首都ですが、マドリード州という自治州もあります。そしておそらく日本人に最も好まれている地域はカタルーニャではないかと思います。ガウディのサグラダ・ファミリアがあるので、30 年前から多くの日本人がカタルーニャを訪れています。一方かつてカタルーニャ以上に日本で人気になったのが南の地域のアンダルシアです。日本で初めてスペインブームが起こった 1970 年代、アンダルシア地域の踊りが人気となりました。フラメンコです。日本でフラメンコが人気になるとともに、アンダルシア地域の文化や風景も有名になりました。スペイン国内でもフラメンコは有名ですが、もともとはアンダルシア地域の民族舞踊なので、スペイン全国でフラメンコが踊られたり歌われたりするわけではありません。スペインより日本の方がフラメンコ教室の数が多いくらいです。また、最近人気になったのが北のバスク



図①スペインの 17 自治州

地域です。主に美食のために多くの日本人が訪れています。

そして、私の郷土であるガリシア。ガリシアは、アンダルシア、カタルーニャ、マドリードと比べたらそれほど人気がなく、知っている人も多くないと思います。地図でガリシアの位置を見ると、イベリア半島の角にあります。ガリシアの南側にポルトガルがあり、なぜポルトガルが北の端までいかないのかという感じですが、ガリシアは西に出っ張っている形になっています。

ご覧の通り、ガリシアはスペインの辺境にあります。マドリードから離れていて、しかも山に囲まれていて、最近までマドリードからガリシアに行くには交通の便が非常に悪く、冒険のようなものでした。しかし国の外れにある特別な地理的状況のおかげで、ガリシアでは独自の文化や習慣が生まれました。

ガリシアについての基本データを紹介します。ガリシア自治州の人口は 270 万人、面積はほぼ 3 万㎢で、四国よりは大きく九州より小さいです。公用言語はガリシア語とスペイン語です。首都はサンティアゴ・デ・コンポステラ。サンティアゴ・デ・コンポステラは、ある程度有名になってきていると思います。

先ほど、ガリシアはスペインの辺境であると言いましたが、スペインだけではなくヨーロッパにおいても辺境でもあり、さらにユーラシア大陸の辺境でもあります。古代からそう考えられてきました。図②を見てください。これは古代ローマ帝国時代の地中海を中心とする世界地図で、一番西側がイベリア半島です。最西端に Finisterre（フィニステレ）と書いてあります。ローマ人はこの地域を「Finisterre ＝地球の果て」と呼んでいました。なぜなら、ローマ人が帝国を拡大してガリシアに着くと、それ以上進むところがなかった。その先に大西洋しかなかったのです。その大西洋のことをローマ人は「暗黒の海」と呼んでいました。ローマ人はそこに太陽が沈むのを見て、非常に恐ろしいことだと考えました。海が太陽を食べていると考え、決して海に入りませんでした。その頃から、ガリシアは辺境で固有の文化を育んできました。現在も「フィニステレ」と呼ばれる岬はあります。

図②2世紀の世界地図（ローマ帝政期）

写真①ガリシアの世界遺産　サンティアゴ・デ・コンポステラ旧市街

先ほど、ガリシアの首都はサンティアゴ・デ・コンポステラだとお伝えしました。私はサンティアゴ・デ・コンポステラ大学の歴史学部で５年ほど勉強しました。写真①はガリシアの四つの世界遺産の一つで、ガ

写真②ルーゴのローマ城壁

写真③ヘラクレスの塔

リシアで初めて世界遺産に登録されたサンティアゴ・デ・コンポステラ旧市街です。写真②と写真③は、ルーゴのローマ城壁とヘラクレスの塔で、ローマ帝国時代と関係があります。ルーゴのローマ城壁は2km以上続いていて、街を取り囲んでいます。ローマ時代の城壁で、唯一現存するもので、しかも形がそのまま残っています。とても高く、分厚い壁です。ヘラクレスの塔は、現在も機能している世界で最も古い灯台で、約2千年間、使われ続けてきました。

世界遺産の最後は、サンティアゴ巡礼の道。サンティアゴ・デ・コンポステラに行く道です。この道はフランス国境から、さらにはもっと遠くドイツ・イタリアから始まる道で、1000km以上もあります。目的地はサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂ですが、なぜこの街が聖地となったかというと、この近くで9世紀にイエスの使徒の一人であるヤコブの遺体が見つかったからです。大聖堂の中にヤコブの墓があります。そしてすぐにスペインのカスティーリャ王とローマ教皇によって聖地として認められ、イェルサレム、ローマと並んでキリスト教会の三つの大聖地の一つに数えられるようになりました。中世から多くの巡礼者がやってきて、スペイン国内だけでなく、フランス人も巡礼してきました。今も年間30万人以上の人が巡礼道を歩きます。日本人もたくさんいます。巡礼者のシンボルはホタテ貝です（写真④）。写真⑤は、長崎の日本二十六聖人記念館にある彫刻で、日本史において非常に有名なフランシスコ・ザビエルです。彫刻は巡礼者の衣服を着ており、胸にホタテ貝が

写真④ホタテ貝のレリーフ

写真⑤ザビエル神父像
（日本二十六聖人記念館）

ついています。フランシスコ・ザビエルはスペインのナバラ王国の人です。

実は、天皇陛下もまだ皇太子だった時にこの道の一部を歩いたことがあります。それは、彼がこの道に興味があったというだけではありません。世界遺産として登録されている巡礼道は二つしかなく、一つがサンティアゴ巡礼道で、もう一つが熊野古道なのです。和歌山県とガリシア州は巡礼道を通じてさまざまな交流をしています。両方の道を巡礼すると特別な証明書がもらえます。

私も学部生だった頃、サンティアゴ・デ・コンポステラにある巡礼博物館で数カ月間、インターンシップで働いていて、他の学生と一緒に世界巡礼の地図を作成したことがあります。そこで出会ったのが、池田宗弘という日本人芸術家が書いた『巡礼の道絵巻—ロマネスク彫刻紀行（スペイン・サンティアゴへの道）』です。この作品はもちろん芸術としても素晴らしいのですが、さらにいえば、池田宗弘がこれを書いた 1980 年代にはまだこの巡礼道は観光地化されておらず、この道を歩いていた人は 1 年に 1000 人ほどしかいませんでした。その中で池田宗弘は大変な勇気を出して、当時の日本にはサンティアゴ巡礼道の案内書が一つもなかったので、日本人のための案内書として、紀行の絵巻を書いたのです。原本は巡礼博物館に所蔵されていますが、ファクシミリ版が書籍として刊行されています。全て手書きで、大変面白い本です。

話は変わりますが、スペイン国内でガリシアはどのように認識されているでしょうか。まず、ガリシアは魚介類が豊富な地域です。ですから、家族が集まる時や誕生日、祭り、クリスマス、結婚式などには、必ずたくさんの魚介類が食卓に並びます。貝類も豊富で、日本人にとっては珍しいものも食べます。ムール貝やカメノテなど、いろいろあります。タコのガリシア風は有名で、日本でもスペインレストランに行けば必ずありますよね。木皿の上にゆでたタコとゆでたジャガイモを乗せて、その上にパプリカ、オリーブオイルと塩をかけます。白ワインがあれば最高の味です。祭りの時は屋台が出て、屋外でタコが食べられます。祭りが多い地域なので、ガリシアに行けばこのような風景に出合えるでしょう。

魚介類が豊富なのには理由があります。ガリシアの西海岸はギザギザした形のリアス海岸です。「リア」（ría）とは、ガリシア語で入り江という意味です。河口に海が入りこむ地形で、川の水と海水が混ざるところは栄養が豊富なので魚介類がよく取れます。日本でも岩手県などにリアス海岸がありますが、「リアス海岸」の語源はガリシア語なのです。

写真⑥ムール貝の養殖場

リアス海岸のおかげで魚介類が豊富で、景色もきれいです。写真⑥には船のようなものが見えますが、船ではなくムール貝の養殖場です。この地域のムール貝

の生産量は世界の 30% を占めます。また、リアス海岸があるため、ガリシアはスペインの中で最も海岸が長い州となっています。スペインでは夏になるとみんなビーチに行くのですが、ガリシアはそこまで暑くないのでとても快適で、白い砂浜のビーチをたっぷり楽しめます。

スペインでは、ガリシア出身と言うと田舎者と思われますが、あながち間違いではなく、産業化が遅れた農村地帯です。ただ、産業化が遅れたことによって他の地域よりも自然が残っているのは良いことでもあります。一方で、ガリシアには大きな企業もあります。最も知られているのは ZARA です。

ガリシアは雨で有名です。霧が多く、雨がよく降ります。スペインでは日差しが強いと思われがちですが、ガリシアではそうではありません。スペインの天気情報を見ると、スペインのほぼ全体が晴れていても、北の地域、特にガリシアだけは雨が降っていることが多いのです。晴れていてもすぐ雨に変わりやすく天気が不安定ですが、だからこそ緑が豊かです。この天候のおかげで、日本でよく見かける花がガリシアでも咲きます。例えばツバキはガリシアを象徴する花で、品評会もあります。夏にはアジサイも大きく咲きます。

気候の違いから、建築様式もスペインの他の地域と異なっています。日本で知られているスペインの伝統的な建築物は白壁の家の集落だと思います。これは強い日差しから守る作りです。しかし、ガリシアでは日差しがそれほど強くなく、逆に雨が多いので、建築様式が全く違います。主に花崗岩が使われており、雨が降ると輝いて美しいです。ガリシアでしか見ることができない建築物が、「オレオ」（hórreo）という高床式倉庫です。これも花崗岩で作られていて、壁は通気のため隙間が開いています。ガリシアは湿度が高いので、作物を湿気から守るために地面から床を離す必要があります。

また、ガリシアは神秘的な地域と見なされています。魔女、邪視、亡者の行列といった超自然的な現象が、ガリシア人の思想に溶け込んでいます。ガリシアでは、死者の世界と生者の世界が非常に近いと言われており、現在でもさまざまな祭りでその事が確認できます。例えば、ポンテベドラ県の小さな村で行われている棺桶祭りでは、人々は死を覚悟して神様に願い事をします。似たような祭りが他にもいろいろあります。こうした民間信仰が強く残っている理由は、ケルト文化と関連があります。古代、ケルト部族は広く中央ヨーロッパと西ヨーロッパに住んでいました。その後、ローマ人が来て、そしてゲルマン民族も来て、ケルト人がほぼいなくなり、ケルト文化もケルト語もほぼなくなったのですが、ヨーロッパの西海岸に少し生き残っているのです。現在、アイルランド、ウェールズ、スコットランド、イギリス南西地域のコンウォール、マン島、フランスのブルターニュ地方に、少しだけケルト語が残っています。

ガリシアではケルト語はもう完全になくなりました。ただ、言語は残っていないものの、古代ケルト人の集落があったため、文化にはケルト人の特徴や要素が残っています。そうした特徴は大西洋海岸圏（ケルト世界）に共通しています。ガリシアやアイルランドなどの間には、海を通じて古代からさまざまな交流がありました。

写真⑦は古代ケルトの遺跡の一つで、祭壇で使われていた石です。ケルト人はらせんや渦のような模様がとても好

写真⑦古代ケルトの遺跡

きで、現在のガリシアの有名な陶磁器であるサルガデロスもその嗜好を受け継いでいます。音楽にも影響が残っています。ガリシアを代表する楽器はバグパイプです。バグパイプといえばスコットランドが頭に浮かびますが、スコットランドもケルトの国の一つですから、共通点があるのです。

私の地元のサッカーチームはセルタ・デ・ビーゴ（Celta de Vigo）と言います。「セルタ」はスペイン語で「ケルト」という意味で、つまり「ビーゴのケルト」というチーム名です。サッカー好きな人がいたらぜひ応援してください。

民族衣装や民族音楽は、もちろん地域によって違います。スペインにはフラメンコだけでなく、各地域に独自の音楽があるのです。

ガリシア語という言語

ここまで紹介してきたように、ガリシアには多様な特徴がありますが、やはりガリシア人の自己認識を高める最重要な要素は、固有の言語であるガリシア語の存在です。

スペイン全国でカスティーリャ語（いわゆるスペイン語）が話されていますが、地域によっては、さらにもう一つの言語が使われています。西の方はガリシア語、北東部のバスクとナバラで話されているバスク語、そして地中海の方はカタルーニャとバレンシア、バレアレス諸島で話されているカタルーニャ語です。これらの言語はそれぞれの地域における公用語でもあります。

イベリア半島の諸言語を比較してみると、スペイン語、カタルーニャ語、ガリシア語、ポルトガル語はいずれもローマ人が話していたラテン語から派生した言葉で、お互いによく似ており、読む分には問題ありません。発音は違うのですが、例えば「月」という言葉は、スペイン語は「luna」、カタルーニャ語は「lluna」、ガリシア語は「lúa」、ポルトガル語は「lua」。似ていますよね。ただ、バスク語は全く異なります。バスク語は「Ilargi」。私にも全く分かりません。バスク語はいわゆる「孤立した言語」の一つで、似ている言葉はありません。日本語に似ていると言われることもありますが、おそらく遠く離れた日本語とは関係がないでしょう。

古代ローマ帝国にはガラエキア (Galaecia) という属州がありました。ガラエキアにはガラエキ人、つまりケルト人が住んでいたので、ガラエキアという名前が付けられたのですが、このガラエキアがガリシアの由来です。ガラエキアで話されていたラテン語は、ローマ帝国の崩壊後、各地域で独自の言葉として発展していきました。10世紀頃のイベリア半島の言語の状況を見ると、西部ではガリシア・ポルトガル語が話されていました。当時はポルトガルという国がまだ存在してなかったので、ガリシア・ポルトガル語と呼ばれました。スペイン語（カスティーリャ語）もすでにありましたが、イベリア半島における一言語に過ぎませんでした。

それ以降、ガリシア語がどのように発展したかというと、12 世紀にポルトガル王国が建国され、ガリシア語とポルトガル語が分岐しました。現在ガリシア語に最も似ている言葉はポルトガル語です。ただ、ポルトガル語はポルトガル帝国の言葉となり、アメリカ、ブラジル、さらにはアフリカ、モザンビーク、アンゴラ、そしてアジアまで広がったのに対して、ガリシアはカスティーリャ王国の一部だったり、レオン王国の一部だったりと、独立した国家として存在した期間が非常に短いため、ガリ

シア語は地方言語として発展し、広がりをみせませんでした。ポルトガル語やスペイン語は世界言語の一つとなりましたが、ガリシア語はイベリア半島の限られた範囲だけで話されています。そしてスペイン語からさまざまな形で圧力を受け、少しずつガリシア語の利用が少なくなっていくのです。

まず、官僚や軍、大学、教会、文学の世界でガリシア語の使用がなくなっていきます。19 世紀になるとスペイン国民国家の形成に伴い、ガリシア語話者はさらに減少します。この傾向は 20 世紀にも続きました。フランシスコ・フランコという独裁者はファシズムによって強いスペインを作ろうとしました。彼が思い描いた「強いスペイン」には、地方言語の存在は必要ありませんでした。彼による独裁政権の間に、ガリシア語の母語話者は大きく減りました。ちなみに、フランシスコ・フランコはガリシア人です。ガリシアの生まれで、親もガリシア人です。ですがガリシア語には全く興味がなかったのですね。逆にガリシア語とガリシア民族運動を弾圧しました。その結果、19 世紀にはガリシア人の 90% 以上はガリシア語しか話さなかったのに対し、2018 年のデータでは「いつもガリシア語を使う」人は 30% しかいません。現在のガリシアでは、約半分の人が主にスペイン語を話し、残り半分は主にガリシア語を話します。特に田舎の方でガリシア語が話され、都会の方でスペイン語が話されています。

現在のスペインは、独裁は終わって民主主義国家なので、憲法で地方言語が保護されています。スペイン憲法第３条に、スペイン語は全国の公用語だけれども、それぞれの自治州内では自治憲章の規定により各地の諸言語も公用語となる、と書いてあります。ガリシア語、バスク語、カタルーニャ語は各地域で公用語となっています。

ガリシア自治州の現在の言語政策の目的の一つは、再びガリシア人がガリシア語を話せるようになることです。そのための教育に力を入れています。フランコ独裁政権時代は教育の場ではスペイン語しか使いませんでしたが、1980 年代からガリシア語を取り入れるようになりました。1980 年代、私は小学生でした。全科目がスペイン語で行われ、ガリシア語で授業を受ける機会がなく、ガリシア語という科目だけガリシア語で受けていました。でも現在は違います。特に 2000 年代に入ると、子どもたちがスペイン語とガリシア語両方の言語能力を獲得できるよう、小学校以降の全ての科目を二つの言語で半分ずつ教授するようになりました。私の甥が２年前（小学校６年生）に送ってくれた科目と使用言語のリストでは、数学（Matemáticas）はスペイン語、国語すなわちスペイン語（Lengua）はスペイン語、ガリシア語（Lingua）はガリシア語で受講しています。理科（Naturales）と社会（Sociales）はガリシア語、宗教（Religion）つまりカトリック教はスペイン語、あと英語があります。図工（Plastica）はガリシア語、体操と音楽はスペイン語。このように半分ずつ分けていて、教科書もスペイン語のものとガリシア語のものがあります。

ただ、ガリシア語はまだ完全に復活したわけではありません。大きな問題としては、若い世代を中心にスペイン語の使用が増加していること。皆さんも、スペイン語を勉強している理由は世界中で使われるという利点が大きいですよね。ガリシア語は地方言語ですから実用性があまりありません。もう一つの問題は、ガリシア語の世代間継承度が低下していることです。つまり、親世代は小さい頃にガリシア語を話していたけれども、その子ども世代がガリシア語の使用をやめてしまうのです。例えば、私の家族はみんなガリシア人で、祖父母はガリシア語を話していましたが、両親が育ったのはフ

ランコ独裁政権時代のため、ガリシア語を話すこと自体が田舎者とみられ軽蔑されていて、出世したければスペイン語を話さなければなりませんでした。両親は私の祖父母に対してはガリシア語を使い続けましたが、私や私の兄弟にはスペイン語で話していたので、私の第１言語はスペイン語です。私は、祖父母と話す時はガリシア語を使い、家庭内では毎日スペイン語を使っていました。このようなことが、私の家庭だけではなく多くの家庭で起き、ガリシア語が継承されないという問題につながっています。

私のキャリアについて

私が日本語を勉強し始めてから今まで何をしてきたかについて話をしたいと思います。

私は 20 歳頃に日本語の勉強を始めました。もともとアジアに漠然とした興味があり、中国や日本が面白いと思っていました。大学の歴史学部で、1 年次の科目に「古代オリエント」という科目があったので、そこで中国や日本のことを勉強しようと思ったのですが、シラバスをしっかり読まずに受講したら、古代オリエントというのは古代エジプトやメソポタミアのことで、がっかりしました。そもそも、東アジアを扱う科目がなかったのです。20 年以上前、スペインからみると東アジアはとても遠く、中国も発展し始めたばかりでそれほど重要視されていませんでした。サンティアゴ・デ・コンポステラ大学でアジアについて勉強することは無理だと、諦めかけていました。

しかし、きっかけは自分で作りました。サンティアゴ・デ・コンポステラ大学では西洋史を学んでいましたが、物足りなさを感じて海外に行くと決め、20 歳の時にドイツにボランティアに行きました。古民家を建て直すというプロジェクトで、世界中から 30 人の学生や若者が集まっていました。ほとんどヨーロッパ人でしたが、そこに日本人も６人いたのです。これが私にとって初めての異文化衝突でした。それまでガリシアからほぼ出たことがなかったのに、いきなりドイツに行き、さらに西洋人ではない日本人と話をしたら全く文化が違って、とても面白いと思ったのです。やはり日本語を勉強しようと思いました。勉強し始めたら好きになって、もうやめることはできませんでした。海外に行くことが好きになり、学部生の時に２回長期留学をしました。１回はチェコ共和国で、もう１回は東京の早稲田大学です。とはいえ、私はお金持ちだったわけではありません。しかし EU 加盟国間には交換留学プログラムがあり、そこまでお金をかけずに留学ができるのです。しかもチェコ共和国は、20 年前の話ですが、元共産主義国で物価が安く、あまりお金を遣わずに済みました。日本に来た時もお金がありませんでしたが、東京でいろいろなバイトをしながら生活費を賄うことができました。

私が言いたいのは、どんな形でも、学生のうちに海外に行くことが非常に大事だということです。海外に行けば想像できないことや人に会い、人生の選択肢が広がるに違いありません。今は円安で、コロナ禍の後で航空券が大変高くなって、とてもお金がかかるので、海外に行けと簡単には言えないです。でも、留学ができなければ他の形もあります。私は休学してもいいと思います。ボランティアやワーキングホリデーもあるので利用して、学生のうちに海外に行った方がいいと思います。仕事に就いたらなかなか機会がないし、若いうちに行けば人生が変わるかもしれません。

私は早稲田大学への留学で少し日本語が話せるようになり、バルセロナ大学で修士課程を修了して

から再び日本に来ました。その時は文部科学省の奨学金を得て、立命館大学の大学院に進学したわけです。ゼミには日本人の他、韓国人、中国人、ロシア人もいて大いに刺激を受けました。私は研究の傍ら、日本とスペインを何らかの形で結びたいという夢をずっと抱いていたので、2020 年にスペインの大学生を対象とした『日本史入門』という本をマドリードの大学の先生と一緒に刊行しました。スペイン人の視点から日本史を紹介する本をスペイン語で執筆しました。振り返ってみると、20 歳の頃に深く考えず日本語を勉強し始めたのがここまで展開して、本当に良かったと思います。

皆さんの第 2 外国語が、これからどうやって発展、展開するかは分かりません。でも道を進めばさまざまなきっかけや出会いがあるので、スペイン語など第 2 外国語の勉強をぜひ進めてほしいです。今日の講演はここで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

小川（司会） アンドレス先生、大変面白い講演をありがとうございました。個人的にあらためて驚いたのは、ガリシアがほとんど独立した国になったことはないということです。今調べましたら、11 世紀にフェルナンド一世の息子のガルシアという人が王位に就いて、6 年間だけ「ガリシア王国」が存在したそうですね。

それでは、皆さんから質問を募りたいと思います。

質疑応答

質問者① 先生の故郷のいろいろな面白いことを紹介していただき、ありがとうございました。先生は、ガリシアの文化だけではなく、さまざまな文化を体験しましたよね。いろいろな文化を体験した後、自分の故郷の文化を振り返って、何か異なる感覚がありますか。あるいは自分の故郷に対して新しい考えはありますか。

ペレス・リオボ 私は毎年夏に帰省していますが、故郷を離れて 15 年以上経つので、故郷に対する考えが変わってきたところがあります。一時は故郷を忘れていた時代もあったのですが、最近は懐かしくなって、ガリシアに対する愛情が強くなっています。ただ、私はスペインにいる時はガリシア人ですが、海外にいる時はスペイン人。アイデンティティが少し変わります。スペインにいる時は、自分がスペイン人であるという認識はそれほど強くなかったのですが、海外にいるとスペイン人というアイデンティティが強くなります。ガリシアを忘れたわけではありませんが、そのような変化があります。

質問者② 「ガリシア語の文学作品が圧倒的に少ない」という話がありましたが、フランシスコ・フランコにより文学作品に触れることができなかったということは考えられますか？

ペレス・リオボ フランコ時代、ガリシア語で文学作品を書くことが禁止されていなかったはずですが、国の雰囲気として、ガリシア語で書く価値はない。それを出版することは非常に難しく、お金にもならない。国から推奨されていたのはスペイン語で書くことでした。ガリシア語で書くことが勧め

られてはいなかったし、実際その時代の文学作品は非常に少ないです。

質問者③　文学作品として口承文学がまとめられたりしていますか？　何かお奨めの作品はありますか？

ペレス・リオボ　日本語で読めるガリシア語の作品は非常に難しいと思います。何が翻訳されているか分かりませんが、ガリシア文学といえば、小説などではなくて、詩が有名ですね。特に 19 世紀の詩。ロサリア・デ・カストロという女性の詩が『ガリシアの歌』というタイトルで日本語にも翻訳されています。

小川（司会）　それから岩波文庫から出ている『スペイン民話集』では各地方の民話も読めますので探してみてください。

質問者④　ガリシアの魔女について教えてください。

ペレス・リオボ　ガリシアは魔女が多いところだとされています。ただ、ドイツやイギリスであったような魔女狩りはそれほど多くありませんでした。16 世紀で急に発生した現象ではなく、ガリシア人の伝統文化の一部であって、昔からそこにいた存在なのです。信じるわけではありませんが、信じないこともない、民衆宗教レベルで普通に存在する人物の一つです。個人的には信じていないのですが、魔女の話はたくさんあります。

質問者⑤（ガリシア語で）　地域によるガリシア語の使用の偏りが気になりました。ガリシア州の中では、どの地域でより使われ、どの地域で使われていないのでしょうか？

ペレス・リオボ　質問をガリシア語で書いていただき、素晴らしいと思います。日本でガリシア語を話せたり書けたりする人はとても少ないと思います。ガリシア語は特に田舎の方で話されていて、都会ではスペイン語が話されています。私はビーゴという、ガリシアの中で一番大きな町に生まれ育ちました。ビーゴではガリシア語を話す人は少ないです。県で分けることはできないのですが、都会ではそれほど話されず、田舎でよく話されるという分け方ができます。

質問者⑥　先生は日本語が大変お上手です。最初にドイツにボランティアでいらして、その後、日本やチェコに長期留学をなさったとのことですが、先生はいくつの言語を話されるのか、またそのレベル、そしてここまで日本語が上手になった背景を教えてください。

　というのも、先生にとってスペイン語が第 1 言語で、ガリシア語は第 2 言語ですよね。その他にドイツ語や英語も勉強されたかもしれないし、チェコ語も日本語もあって。多くの副言語を学習してきた背景が、どれくらい日本語学習の助けになったのか、また先生の言語観についても教えていただきたいです。

ペレス・リオボ　ヨーロッパ人はたくさんの言語を話せるというイメージがあるかもしれませんが、残念ながら、私はそうではないです。日本語も上手ではありません。一般的なスペイン人は、他のヨーロッパ人と違って、外国語をあまり話せません。スペインでは、バルセロナなら英語が通じますが、他の地域では簡単な英語も通じません。学生にとっては良いことですが、スペインに留学したらスペイン語を使わなければなりません。私はスペイン語とガリシア語の２言語に関してはネイティブですが、海外にいろいろ行っても、恥ずかしいことにあまり外国語を学べませんでした。チェコに１年間住んでいたのですが、チェコ語は非常に難しく、あまり使わないだろうとも思って途中でやめました。現地では英語で生活し、授業も英語で受けていたので、今ではあいさつしか覚えていないです。ドイツ語も全くです。ガリシア語に似ているポルトガル語は話せます。スペイン語に近いイタリア語も、イタリア人の友人がいたので話せるようになりました。読める言語でいえば、ロマンス語は何となく読めます。日本語は好きなので話せるようになりました。好きだったら勉強を続けてください。それが正しい選択だと思います。

質問者⑦　ガリシア語を耳にする機会はめったにないと思うので、よろしければ、簡単なスペイン語とそれに合わせたガリシア語を聞きたいです。

ペレス・リオボ　よく知られている表現で、スペイン語は「Me llamo Andrés」、ガリシア語では「Chámome Andrés」です。スペイン語では代名詞「メ」を動詞の前に置き、ガリシア語では動詞の後に「メ」を付けます。「私はスペイン出身です」だったらスペイン語で「Soy de España」、ガリシア語は「Son de España」。「ソイ」は「ション」となります。スペインには母音が五つしかないのですが、ガリシア語には母音が七つあり、鼻で発音する音もあります。例えば、スペイン語の「１」は「ウノ」「ウナ」ですが、ガリシア語では「ウア」となります。

小川（司会）「元気です。ありがとう」（Bien. Gracias.）はどう言いますか？

ペレス・リオボ　「Ben. Grazas.」。あまり変わらないですね。

質問者⑧　先生はいくつかの言語の勉強に挑戦したと伺いましたが、いろいろな言語を浅く勉強するべきなのか、それとも一つの言語を深く勉強するべきなのか、ご意見を聞きたいです。

ペレス・リオボ　確かに、浅く勉強したい学生もいるし、一つの言語だけを専門的に勉強したい学生もいるのですが、私が勤める大学では、多くの言語を浅く勉強することはできません。一つの第２外国語を選んだら、単位の問題があってそれしかできないです。ただ、言語の勉強はずっと続いていきます。学生の時だけやることではないのです。私の場合、ずっと何らかの言語を勉強しています。最近はラテン語の勉強を再開しました。浅かったとしても、いくつかの言語をみていると関連するところがあって、話せるまではいかなくても読めるようにはなりますね。研究のために読める程度にはなっています。要するに、自分が第２外国語を使って何をしたいかによって勉強のスタイルが変わると思

います。場合によって、どちらもいいと思います。

質問者⑨　今、第３外国語としてスペイン語を学んでいるのですが、短くてもスペイン語圏に研修や留学に行く場合、スペイン語や文化の勉強をどのようにしたらいいでしょうか。

ペレス・リオボ　できるだけ多く、スペイン語の単語を覚えることが大事です。短期であれば３～４週間しかないかもしれないので、１日目からスペイン語を利用できるレベルにしておけば、４週間分たっぷりスペイン語を使うことができます。スペイン語を使うために最初の１週間をかけてしまったら、もったいないです。ですから、出発までにできる限りたくさん勉強をしてください。そうすれば最初から毎日、たっぷりスペイン語を使えます。あとは日常的に使う表現を調べた方がいいと思います。留学先で必ず使うような、例えばスーパーでの買い物や、ホームステイ先の家庭内で話すような会話を事前に準備しておけば、現地に行った時に最初から使えるので役に立つと思います。

小川（司会）　それでは質問も出尽くしたようですので、本日の講演会を閉会したいと思います。もう一度素晴らしい講演をしてくださいましたアンドレス先生に大きな拍手をお願いいたします。どうも、ありがとうございました。

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～中国語講演会～

台湾総統選挙と中台関係の情勢

日時：2023 年 7 月 11 日（火）17 時 10 分～ 18 時 50 分
開催方法：ハイブリット型開催（対面・オンライン）

講師：**門間 理良**氏（拓植大学海外事情研究所教授）
略歴：立教大学文学部史学科卒業、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻単位取得退学、拓殖大学博士（安全保障）。
財団法人交流協会台北事務所専門調査員、外務省在中国日本国大使館専門調査員、文部科学省初等中等教育局教科書調査官（社会科）、防衛省防衛研究所地域研究部中国研究室長、同地域研究部長を経て、2023 年より現職。
主な論文：学術論文（単著）2021 年 4 月「『台湾アイデンティティ』を原動力にした蔡英文政権」『東亜』No.646
学術論文（単著）2021 年 7 月「現実味を増す中国の離島奪取作戦」CISTEC journal, No.194
学術論文（単著）2022 年 3 月「台湾による中国人民解放軍の対台湾統合作戦への評価と台湾の国防体制の整備」『安全保障戦略研究』2（2）

司会：森平 崇文（中国語教育研究室主任／外国語教育研究センター教授）

森平（司会） ただいまから、「世界を知ろう！～中国語講演会～」を開催します。全学共通科目中国語には「海外言語文化研修」という科目があり、8 月と 2 月に 3 週間、台北にある国立台湾師範大学で研修を行っています。来年 2024 年には台湾の総統選挙もあり、台湾有事を含む関連報道が日本でも増えていくことが予想されます。今回講師をお願いしました門間先生は、中台関係や中国、台湾の安全保障をご専門とされています。また門間先生は本学のご出身で、本日の多くの参加者の皆さんと同様に在学中に中国語を学ばれた先輩でもあります。門間先生のご講演を通じ台湾政治の現状につき、理解と関心を深めてください。

門間 理良氏

門間 ただいまご紹介にあずかりました門間でございます。私の立教時代は中国近現代史の戴國煇先生のゼミに所属し、中国語、専門科目は熱心に学んでいました。この本館で授業を受けた記憶もあります。また、立教大学の留学制度を利用して天津にある南開大学に 1 年間語学留学もしています。勉強以外では、探検部に所属して洞窟探検や激流下りなどの活動を熱心にやっていました。とても懐かしい思い出が詰まった母校の教壇に立って、皆さんにお話しできるのは大変光栄なことだと思っております。

さて、本日は「台湾総統選挙と中台関係の情勢」についてお話を進めてまいります。まず、台湾の蔡英文政権ですが、中国が唱える「一

国二制度」による統一を断固拒否し、両岸関係の現状維持を訴え続けております。また、台湾と対比して、中国を「現状改変」を志向する国家、「権威主義国家」であり、台湾を「民主主義体制の一員」と位置づけ、西側諸国との連帯を強調しています。中国はそのような蔡政権を快く思っておらず、同政権の成立後に台湾への旅行を停止させました。さらに、コロナが流行した 2020 年から、中国大陸との間の航空便も激減するに至りました。現在その状況は回復してきています。ただ残念ながら、中国と台湾との実務交流に関しては、事実上の停止状態に陥っています。

その他の状況を見ると、両岸フォーラムや上海市台湾事務弁公室副主任らの訪台、国民党の著名人である馬英九前総統や洪秀柱氏などの訪中が実現しました。しかし、両岸フォーラムは、あくまでも中国と国民党を中心とする人たちのフォーラムですし、上海市台湾事務弁公室の副主任も公的な立場の人であることは間違いありませんが、上海という地方都市の台湾事務弁公室です。ですから、中国当局者の訪台が活発化しているとは言えない状況にあります。

COVID-19 流行の台湾社会への影響

次に、COVID-19 流行の台湾社会への影響も見ておきたいと思います。台湾は、2020 年 1 月というごく初期の段階で、中国大陸の武漢での異常をいち早く察知し、すぐに WHO 事務局に通報したと主張しています。それとほぼ同時に、警戒体制を整えました。それが、後から言われる「台湾版ゼロコロナ」政策です。具体的には、外国人の台湾訪問を大幅に制限する、台湾人の帰国は認めるが帰国にあたって厳格な隔離措置を適用する、などです。日本と大きく違うのは、違反した人に高額な罰金を科しているところです。事情によって異なりますが、日本円で何十万円、100 万円という罰則規定を設けました。しかし、中国が上海などの大都市をはじめ、中小都市でも行っていたようなロックダウンは実施しませんでした。そのような点から「民主主義社会の中で、できる形で COVID-19 を防いだ」として、2020 年あたりに賞賛を受けたのです。現状は、2023 年 3 月 1 日から、海外からの入境や台湾内での行動制限は解除され、コロナ前と同じ状態に戻っています。コロナ対策本部も 5 月 1 日に解散しました。

台湾は各国でマスクの供給に滞りがみられた際に支援を行いました。ところが、2021 年に台湾で本格的に COVID-19 の流行が始まると、感染者や死者が増えるようになって、蔡英文政権も少なからず内部から批判を受けます。その時に、日本を含め、それまで台湾から恩を受けた各国から、ワクチンの支援などが開始されるようになります。日本からはアストラゼネカ製のワクチンが計 7 回・約 340 万回分送られています。台湾の人口が 2300 万人ですから、7% 強の人が 2 回受けられる数のワクチンを送ったことになります。

ちなみにこの時、野党の国民党や反民進党の人たち、そして中国から「日本で使い物にならないアストラゼネカ製のワクチンを送り込んだ。日本はひどい」といった話がでましたが、日本は台湾から非常に感謝されたのが事実です。日本政府は、当時備蓄していたアストラゼネカ製のワクチンを全て送ったため、「あるものを全て送ってくれた」と、とても喜ばれたのです。アストラゼネカ製ワクチンは、モデルナ製やファイザー製のワクチンに比べて輸送時の温度管理が楽だったこともあり、送り出すには適切だったといわれています。

そして、COVID-19 流行に関して台湾の好感度がアップしたことは、国際的認知度と地位向上に貢献しました。また、相対的なことですが、中国と欧州との関係が悪くなったこともあり、この時期に台湾と欧州との関係が強化されるという事情もみられました。

とは言え、実際のところ、台湾に対する中国の圧力は非常に強く、蔡英文政権が発足してから次々と台湾と断交する国が出ています。台湾との断交は、裏返すと中国と国交を結ぶことです。具体的に台湾と外交関係にあるのは、大洋州諸国、中南米・カリブ海諸国、それからヨーロッパのバチカン、アフリカのエスワティニ。現状、合計 13 カ国です（2023 年 7 月時点）。

2024 年台湾総統選挙の争点

やはり今注目しなければならないのは、2024 年 1 月に行われる台湾の総統選挙です。まず押さえておきたいのは、国政選挙である総統選挙の争点は、地方選挙のような内政や生活の問題とは完全に異なるということです。具体的には、「中台関係をどうするの？」「アメリカとの関係が大事だけど、どうしましょうか？」「対日関係は？」などで、中台関係および外交全般、それから台湾の安全をどうやって守るのかが選挙の争点になります。

では、現状の民進党はどうでしょうか。民進党は 2018 年と 2022 年の統一地方選挙で連続して大敗しました。そこから持ち直してきているという状況はみられます。頑張っていこうとしているのですが、気になるのは、有権者が直接選挙で総統を選ぶようになってから、2000 年に国民党から民進党に政権交代が起き、その後、2008 年、2016 年と 2 期 8 年ごとに政権交代が続いていることです。新人同士で戦うとライバル政党のほうに票が行くこともあるので、偶然といえば偶然かもしれません。一方で、台湾のたどってきた歴史とも大きく関係していると、私は思います。台湾においては、国民党による一党独裁政権が長く続いたという歴史・記憶があり、「一つの政党に長く政権を持たせておくのはよくないのではないか」という意識が有権者に働いているのではないかという考えです。

そして、多くの国に当てはまることですが、やはり中間層の取り込みが重要で、それに成功した候補が勝利し、総統になります。そのためには民意の見極めとともに、台湾中心主義・自分は台湾人だという気持ちの総称としての「台湾アイデンティティ」が高まっている現状を、どうやって自分たちの陣営の勢いに取り込んでいくかが重要になります。

三つ巴の戦い

今回の総統選挙では、台北市の市長を 2 期務め、2023 年 1 月初めにその任期を終えた柯文哲氏が、総統選挙への出馬を宣言しています。この人が登場したことによって、民進党の候補、国民党の候補、そして台湾民衆党の柯文哲氏と三つ巴の戦いになる可能性があるといわれています。ちなみに、1996 年から始まった総統民選においては、民進党か国民党のいずれかの候補が当選しています。その理由は、民進党や国民党は党の組織基盤がしっかりしていて、特に各地方においても党組織が機能していて、集票能力に長けているからです。一方、台湾民衆党の地方組織はほぼないような状況ですから、厳しい戦いになるのではないかとみられています。

三つ巴の戦いですが、民進党は頼清徳副総統が出馬すると決定しています。彼はもともと内科医で、

南の方にある台南市の市長を務め、当時は非常に人気が高い人でした。その後、中央政界では行政院長、日本でいうところの首相も務め、今は副総統です。この賴清徳氏は、蔡英文路線を継承すると宣言していますので、中台関係について現状維持でいくと言っているわけです。その理由・背景ですが、彼自身はもともと台湾独立の傾向が強い人物とみられているため、彼が総統になった後、台湾独立の方向に舵を切るのではないかと心配する人もいますし、心配を掻き立てて「彼には投票するな」と言う人たちもいます。そのような人たちを安心させ、また批判を封じる意味で、蔡英文路線と中台関係の現状維持を継承すると宣言したわけです。これにより、台湾海峡の現状維持が一番だと考えているアメリカや日本からも信頼を寄せられることになります。台湾の有権者は、自分たちの安全を誰が担保してくれるのかという点で、アメリカの力が圧倒的に強いと分かっていますから、アメリカに信用される候補かどうかは、投票にあたってとても重要なポイントになるのです。

国民党については、現在新北市長を務めている侯友宜氏が候補者になりました。新北市は台北市を取り囲むように形成されていて、地方の選挙区単位でいうと一番有権者が多いところです。そこで現在 2 期目の市長を務めていて、こちらも非常に人気が高いです。今のところ、総統選挙では「これは」という特徴がなかなか見えてきていません。台湾の人たちと話をしていても、侯友宜さんは両岸関係や対米関係をどうするのかが分からないという状況です。なぜかというと、彼は新北市という地方都市の市長であり、もともとは警察官僚でもあったので、両岸問題や外交問題などに触れるようなポジションにはいなかったためです。これからは、有権者に訴えかけるような、票が取れるような両岸政策、外交政策、安全保障政策などを打ち出す必要があるだろうと思います。

ただ彼自身は、その出自からして、そのような問題について深く考えたことはないと思います。そうした時に重要になってくるのが、国民党が彼にどのような両岸関係・外交関係の幕僚をつけるかです。それによってある程度方向性が分かってくるので、皆さんはここに注目していただければと思います。仮に馬英九政権時代の両岸関係の知恵袋であったような人がくれば、「また同じようなことをやるのかな」と思われる可能性があります。誰か新しい人が出てくればいいのですが、なかなかそういう状況にはならないと思っています。また、最近では「軍公教の年金を手厚くします」などと言っていました。これは「軍人・公務員・教員の OB・OG の年金を手厚くします」ということです。軍・公・教は、国民党の従来の支持母体です。先ほど申し上げたように、ご本人も警察出身ですが、こういった人たちに訴えかけることで、なんとか票を取りたいと考えているのだと思います。

そして、三つ巴の原因となった台湾民衆党の柯文哲氏です。彼は「台湾の民主主義と自由を守りつつ、中国と対話し、戦争を避けます」と当たり障りのないことを言っています。この程度のことだったら誰でも言えますし、そういう点では今ひとつパンチに欠けます。彼の有利な点は、民進党でも国民党でもないというところです。いわゆる二大政党に飽きてきた人たち、特に若者世代に「柯文哲さんだったら何とか変えてくれるんじゃないの？」という期待が高まっているところが見どころであり、今後の選挙戦の推移を測っていく上で重要だと思います。

ここで、総統選挙の予測をしているサイトの 6 月と 7 月の推移を見ておきたいと思います。投票率予測を見ると、6 月 20 日の段階では、賴清徳氏が 39% くらいを取るだろう、侯友宜氏は 31%、柯文哲氏は 30% という状況で、賴清徳氏がそれなりに優位な立場にいます。同じ選挙予測サイトの 7 月 8 日段階を見ると、賴清徳氏は 39.5%、侯友宜氏は 29.2%、そして柯文哲氏は 30% 超えの

31.3%。侯友宜氏を抜いて台湾民衆党の柯文哲氏が 2 位に浮上してきているのは面白く、柯文哲氏としてはこの勢いをできるだけ保ちたいところです。

台湾では「自分の票が死票になるのは嫌だ」と考える人が多いようです。寄らば大樹の陰といいましょうか、大きなスイカを取るということから「スイカ効果」という一種のメディア的な選挙用語もあります。柯文哲氏とすれば、「侯友宜さんに投票しようと思っていたけれど、勝ち目がなさそう。頼清徳にはしたくないから柯文哲さんに」という人たちが増えてくれれば、当選の目があるということです。ただ、頼清徳氏が 3 割台後半から 4 割近くを集めて第 1 位を維持し続けているのは大きいので、これが変化するのかが注目点です。

懸念される今後の中国の動き

中台関係も講演のテーマに入っていますので、今後の中国の動きも見ておかなければなりません。冒頭の森平先生のお話もありましたが、中国の動きと台湾有事の話で忘れてはいけないのが、中国は 1979 年以降、台湾に対して平和統一という看板を降ろしていないということです。「武力行使の可能性を放棄しない」とは言っていますが、「絶対、武力統一するんだ」などと声高に言ったことは一回もありません。ただ現状は、平和統一に関して大きな期待はしていないと見て取れます。今の中国は少なくとも「民進党政権の存続だけはご勘弁だね」というところで、民進党政権に対する圧力を継続させているわけです。

その一方で、中国は「戦わずして勝つ」ことを標榜しています。中国にしてみれば、仮に軍事力で戦うことになった場合、アメリカが参戦してきて台湾に肩入れしてしまうと、勝てたとしても本当にギリギリの勝利でしょうし、負ける可能性のほうが高いと思います。そんなことになったら元も子もないわけです。ですから中国は、「こちらにはものすごい実力があるんだよ。このままいっても台湾は吸収されちゃうでしょ。それだったら今のうちに統一のための交渉のテーブルにつきなさい」と、平和統一を強制するだろうと指摘する人もいます。東京大学の松田康博先生は、そのような強制的平和統一という可能性を主張されていて、私もその危険性はあるだろうとみています。ただ、「戦わずして勝つ」ためには、強い人民解放軍でなければいけません。ですから習近平氏は、「戦って勝てる軍隊にするんだ」と言って、中国人民解放軍の近代化に邁進しているという状況です。

中国による認知戦

また、総統選挙においては、軍事的圧力や外交的圧力もありますし、認知戦もあります。認知戦では、フェイクニュースをインターネットのサイト上に大量に投稿したりして、台湾有権者に民進党政権の存続に不安感を抱かせ、民進党籍の総統当選を阻止しようとする可能性が大きいと、私はにらんでいます。

そういった動きの中で注目されているのが「疑米論」です。疑米論とは「台湾にとって一番大切な時に、アメリカは台湾を見捨てるのではないのか」という論調です。例えば、台湾有事が起きたとしましょう。そうした時に「アメリカは台湾を守ってくれないんじゃないの？ 見捨てられるんじゃないの？ だったら早めに中国に高く売りつけた方がいいよね」というものです。これは昔からある議

論で、国民党やその支持者、政治家たちが折に触れて言っていることです。中国はその拡大を狙っているのだろうと思われます。

それから、2023年2月28日の日本経済新聞朝刊に「それでも中国が好きだ」という記事が掲載されました。興味があれば皆さんも読んでみてください。日本経済新聞台北支局の記者が台湾軍を退役した人に接触し、インタビューした記事です。その中で元軍人は、「自分は台湾軍を退役した後に中国でレストラン経営に乗り出した。その過程において、中国側に台湾軍の情報を渡していた」と記者に述べたのです。「台湾軍を退役した人の9割が中国側に情報を流している」とも発言し、それを日本経済新聞は取り上げたわけです。もちろん、情報漏洩をする元軍人や現役軍人がいないわけではありません。実際に何人も捕まってもいます。現役の陸軍少将が金と女を掴まされるという、よくあるパターンで最新の通信システムの内容を中国側に漏洩して逮捕され、そのために当時の台湾軍が通信システムの変更を迫られたこともあります。そのような事例があるものの、退役した人の9割が情報を中国に流すなんてあり得ません。記事には、軍人が退役すると持っている情報は古くなり、だんだん使い物にならなくなる。そうすると中国側も「もうこいつはいらない」となり、その人に嫌がらせが始まって、結局レストランを畳まざるを得なくなったとありました。「でも、自分は中国が好きなんだ」と言った、と。「あほか、そんなやついるか」と私は思いましたね。

私の想像では、本当にこの退役軍人がいるとして、50歳ぐらいで退役した中佐か大佐クラスだと思います。そういう人が第二の人生を歩むためにレストランを開業して、それが中国のために廃業してしまったなら、50代半ばで第二の人生の青写真が脆くも崩れるわけです。その状況で「それでも中国が好きだ」なんてことを言う人がいるのか、と。私も退役軍人を何人も知っていますが、そんな人は一人もいません。ですから私はこの記事を見た時に、もしかすると中国側のスパイが日本経済新聞の台北支局に近づいて、フェイク情報を流したのではないかとまで思いました。台湾の民衆は、日本の新聞に対して非常に信頼を置いています。中国はそれを利用して、台湾民衆の台湾軍への信頼度の低下や日台関係の悪化、日米の台湾に対する信用低下など、負の影響を起こすこともできます。実際にその当時、国防部長が「日本との交流を一時的に停止しろ」と指示したと伝えられていて、台湾に出張に行っていた人たちが、台湾側にアポを取っていたのに会えなくなったことが事実としてありました。このような負の影響もあり、日経新聞の記者が中国側に認知戦を仕掛けられ、それに嵌められたというのが、私の見立てです。もちろん断言まではできませんが、そのようなことも懸念されるわけです。

もう一つ中国の動きとして、台湾国防部が発表したプレスリリースでは、2022年8月にペロシ米下院議長（当時）が訪台して以降、中国軍用機が台湾海峡中間線を越え、防空識別圏の南西部に入ってくることが常態化したと伝えています。

台湾有事――中国による台湾侵攻

続いて台湾有事の話をしましょう。中国が台湾本島を攻撃することになれば、最初はミサイル攻撃、サイバー攻撃、電磁波による組み合わせで仕掛け、その後に着上陸作戦があると思います。ただ、こういったことは、ロシアによるウクライナ侵攻の結果を見ても、なかなか攻撃側の思い通りにはいか

ない可能性があります。台湾の防空能力はウクライナより高いですし、サイバーに関する防御もある程度の準備をしています。

大規模軍事作戦については、それ自体は察知可能であるとよく指摘されています。さまざまな大規模な準備をしなければならないことから、その動きは衛星画像、人からの情報（ヒューミント）、それからメディア等の報道（オシント）、電波情報（シギント）を総合すれば、必ず察知可能です。ただ、実際に全面的な侵攻作戦を行うとなると、2022 年 8 月にペロシ米下院議長（当時）が訪台した時に人民解放軍が演習区域として設定した、台湾本島周辺のかなり広い範囲を戦域として攻めることになると思います。その際、日本も戦域の一部となり、南西諸島は狙われる可能性が十分にあると考えられます。

このように、全面侵攻作戦は非常に大変なのですが、一方で東沙島のような非常に小さいサンゴ礁の島であれば、現在の人民解放軍の能力でも奪取することは可能です。ここを奪うことによって、中国は南シナ海のスプラトリー諸島でサンゴ礁の島々を軍事基地化したのと同じようなことをやるでしょう。南シナ海の北部、それから台湾海峡の南端、バシー海峡の西端をコントロールするとともに、海上民兵の活動の拠点にすると考えられます。

台湾の対抗処置

台湾としては、巨大な中国軍になんとか対抗するため、予備役動員システムの効率化と戦力向上を狙い、2022 年に全民防衛動員署を立ち上げました。さらに、兵役期間を 16 週間の軍事訓練から 1 年間に延長するとしています。これは中国からの軍事的圧力を台湾当局が実感しているということです。1 年間の兵役を実施することで現役兵士を増員する効果があり、「自分の手で自分の国を守る」という気概・精神力の向上も期待できます。それから、ウクライナからの学びといえると思いますが、自分の国は自分たちの力で守るという姿勢を対外的に示すことで、台湾に対する支援を呼び込む狙いもあります。ウクライナの人たちが大挙して逃げたり、すぐに降伏したりしたら、誰も今のように助けたりしなかっただろうということです。

その他の対応では、サイバー攻撃に対しては、情報・通信・電子戦指揮部を作ったり、国防部内にフェイクニュース対抗処理小組を創設したりしています。ミサイル攻撃に対しては、日本も導入しているペトリオット（PAC-3）や、台湾国産の天弓 3 型といった対空ミサイルを準備しています。さらに、駐機中の戦闘機などが狙われると非常に弱いため、それらをしまっておく地下の格納庫や、ミサイル攻撃からできるだけ戦闘機を守る掩体壕なども作っています。また、航空基地の滑走路は第一に狙われますので、一般道路や高速道路の直線部分を利用した軍用機の着陸離陸訓練なども行っています。加えて、台湾ではある程度の規模の建物を作る際には地下室を設け、それを防空壕・防空地下室にしています。台北では、昼間人口の 2 倍程度の余力のある防空壕が設置できるようになっていて、それらを地図アプリ上で表示できるようなソフトを地方政府が作成・配布しています。

海を越えた補給線の確保に苦労する中国

台湾有事の際は、海を越えた補給線の確保が重要になりますが、中国はそれに苦労するだろうという話を少ししたいと思います。現在のロシア・ウクライナ戦争においても、陸上で接した隣国への侵

攻に、陸軍大国であるロシアでも非常に苦労しました。特に 2022 年の侵攻当初は食料、燃料、弾薬などの不足で進軍は遅滞しました。翻って、中台間でみた場合、あるのは台湾海峡で、陸上国境ではないわけです。海を挟んでいるので、補給は海路・空路に頼らなければなりません。これは大きな負担がかかりますし、なおかつ、輸送機や輸送船に対して台湾軍や米軍が攻撃を仕掛けてくることが容易に想像できます。他方で、いわゆるウクライナにとってのポーランドのような陸続きの国がないわけですから、台湾も武器や弾薬などの補充に苦労する可能性は十分にあります。燃料についても、中国が中東へ働きかけたり、シーレーン封鎖をしたりすると遮断される危険性があるので要注意です。このように補給線の確保は、中国も大変ですが台湾も大変なのです。

難易度の高い斬首作戦と台湾の対応

そして、斬首作戦についてです。皆さんも聞いたことがあると思うのですが、ゼレンスキー大統領をロシアの特殊部隊が何度か狙い、全て失敗したという報道が流れました。それを中国が台湾に対してやろうとしても、かなり難しいのではないかと思われます。都市攻略戦を遂行するにしても、台北地域は都市化が進み、人口も密集しています。ウクライナでは国民の SNS などによって、一般民衆を虐殺しているような状況が世界に流れ、ロシアは大きな非難を受けました。人民解放軍としても、都市攻略戦はなかなかやりにくいといえるでしょう。

また台湾では、総統が亡くなったり、怪我をしたりして執務不能になると、すぐに副総統が後を継ぐことが憲法で決まっています。副総統が総統になってまた執務不能になると、次は行政院長が代行するというような序列・システムが出来上がっています。切るべき首が複数あると、斬首作戦成功の可能性は低くなります。

内部からの呼応に注意すべき台湾

台湾有事においてもう一つ注意しておきたいのは、内部からの呼応です。中国が台湾内部のエスニックグループを分断する可能性があります。これは、台湾内の新中国派勢力が中国に対して軍事介入を要請し、それを中国が受託して、台湾解放に向けて人民解放軍が行動を開始するというものです。このような状況はロシアとウクライナにもありました。また、台湾軍内部に内通者がいれば、中国の軍事侵攻が成功する可能性は上昇します。

さらに、全面的な侵攻ではなく、認知作戦にも注意が必要です。最近よく言われていることではありますが、認知作戦が台湾の離島の切り崩しに利用される可能性があるのではないかということを、強調しておきたいと思います。認知作戦は人が住んでいる金門や馬祖が対象になりますが、金門島などはすでに中国から海底パイプラインを通じて水の供給を受けています。また、金門や馬祖においてはガス・電力の供給や橋を架けるといった構想も出ています。仮に実現したら、これらの地域と中国大陸との関係は非常に強固となり、そのうち金門や馬祖のトップの人たちが「我々は祖国に帰ります」と宣言して、平和裏に台湾から切り離される可能性もあるのではないかと、私は懸念しています。

それから、2023 年 4 月の中国の軍事演習に関しても触れておきます。これはマッカーシー米下院議長（当時）と蔡英文総統がカリフォルニア州にあるロナルド・レーガン図書館で会見した後に行わ

れたものです。この時は、2022年8月のような台北上空を飛行するミサイル演習やサイバー攻撃はありませんでした。軍事演習を行ったと大々的に言ってはいるものの、「過去の画像や映像を使用したものも流されている」と指摘する台湾メディアの関係者もおり、実際の規模以上に演習を大きく見せようとしたと思っています。

最後になりますが、このような台湾有事が起きてしまうと、相手がいることですから片方だけで終わらせることはできません。それだけに「始めさせないこと」が一番重要だと思います。そのためにも、一つはロシアへの強力な制裁を継続することで、中国に「台湾有事の際に中国がどうなるのか」を考えさせ、台湾侵攻を決断できないような状況を作ることが重要です。そして、全面的な本島侵攻作戦に対しては、南西諸島の防衛をしっかりしておくことが台湾有事の抑止につながります。その意味からも、現在進行中のロシア・ウクライナ戦争において、ウクライナをしっかりと支えるとともに、日本が南西諸島を中心とした防衛体制を強化しておくことが、台湾有事抑止に大きく作用すると私はみています。

プーチン政権が打倒されれば習近平主席にも大きなプレッシャーになるでしょうが、そこまで大きな期待をするべきではありません。

私の話はここでいったん終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

森平（司会） 門間先生どうもありがとうございます。知らない情報も多く、特に軍事情報に関しては本当に詳しく紹介していただき、ご専門ということがよく分かりました。門間先生のご講演を受けまして、これから質疑応答に入りたいと思います。

質問者① 外国語教育研究センターの南雲です。先生のご専門を凝縮したホットな話題をまとめて教えていただいて、本当に勉強になりました。ありがとうございました。学生も私もそうですが、どうしても日本のメディアを通していろいろなニュースを得ることになります。中国語を勉強し、携わる者として、台湾側でも中国側でも、このサイト、このSNS、この言論の論客など、参考になるものがあれば一つ二つお教えいただきたいです。蔡英文総統のツイッターもそうですが、リベラル、タカ派関係なく、今後の選挙戦に絞ったものでも、両岸関係に絞ったものでも、「この人を見ておくと参考になるよ、面白いよ」というのがありましたら、ご教示いただければと思います。

門間 残念ながら、私自身はこれがおすすめというものはあまり思い浮かびません。というのは、例えば、蔡英文、賴清徳といった政界のトップの人たちや野党の人たちのFacebookを中心にSNSを見たりしているのですが、「この人の話を聞いているから大丈夫」というのはあまりないですね。

台湾には「名嘴（ミンツイ）」と呼ばれる人がいます。テレビの報道番組や討論番組などで勢いよく喋る司会者やコメンテーターです。その人たちの発言は無責任なものもあるので、一歩引いて考えないといけないところがあります。そのような点からいうと、特効薬的な「これだ」というのはなくて、浅くてもいいから幅広く網を張っておく作業が必要だと思います。あとは、人民解放軍の東部戦

区の Weibo や、米軍の第 7 艦隊のプレスリリースは確認しておくといいですね。

質問者②　台湾有事の際に、日本の自衛隊が介入することはあり得ますか？

門間　外国の戦争に日本が直接関わることは全く想定されていません。法律上、そのような事態は考えられていないので「ない」と断言できます。「では、どのように関わるのか」についてですが、米軍が台湾有事に介入することになれば、それに対しての後方支援活動、武器・弾薬、水・食料、燃料の補給などの活動は十分にあるだろうと考えておいた方がいいと思います。

それから、台湾有事になった場合、最後の部分で少し申し上げましたけれど、中国側としては、日本にいる在日米軍や自衛隊の基地に攻撃を仕掛けてくる可能性もあります。例えば、陽動として無人の尖閣諸島に攻撃を仕掛け、自衛隊の戦力を分散させようとするかもしれません。日本の領土が狙われれば日本有事ですから、日本の領土の付近で戦うのは当たり前の話になります。「中国が戦力分散を図って日本を攻撃してきた時には戦う」と言うことはできますが、台湾有事の際に、直接自衛隊が台湾に行って、台湾を助けることはありません。そのことはしっかり言っておきたいと思います。

森平（司会）　ありがとうございます。もう一つ、私の方からお伺いしたいことがあります。投票行動において中間層が鍵を握るというお話をされていらっしゃいました。台湾は、ひまわり学生運動のように学生の政治参加が活発というイメージがあります。2024 年の総統選挙で、若者の投票行動はどのくらい影響があると門間先生はお考えなのでしょうか？

門間　選挙分析、投票行動の専門家ではないので、どのくらいの割合かははっきり言えませんが、大きなうねりを作ろうとする場合、やはり若者の力は大きいですよね。民進党にせよ、国民党にせよ、台湾民衆党にせよ、何とかそれをつかみたいと思っているでしょう。今のところ、若者の心をつかむのが一番弱いのは国民党で間違いありません。逆に、それができそうなのは台湾民衆党と民進党ですが、彼らをどこまで動かせるかは、より若者にとって魅力的な将来の台湾像を提示できるかにかかっています。今のところそれができそうなのは、柯文哲氏です。ただ実際に、柯文哲氏がどこまでできるかは別問題なので、そこまでは私もはっきりとは分かりません。

森平（司会）　ありがとうございます。台湾の民主主義の歴史を見ますと、本当に早いですよね。直接投票選挙が始まり、政権交代が起こり、女性の総統が生まれた。だから次はもっと若い人が急に出てくるのかなと期待していましたが、今のお話を聞くとみんな 50 代後半から 60 代のおじさんしか候補者になっていません。そのあたりの動きとしては、これからもっと若い人が出てくる可能性もあるのでしょうか？

門間　少なくとも今回に関して言えば、中央選挙委員会に立候補登録するのは 11 月なので、誰が出てくるか、正確なところはまだ分かりません。ただし実際は、50 代・60 代の人たちが満を持して出てくるパターンになると思います。

今のところ「2032年の選挙で出てくるかな」と思われているのが、今の台北市長の蔣万安氏です。蔣介石のひ孫、蔣経国の孫にあたり、現在44歳です。

森平（司会） ありがとうございます。皆さん他にいかがでしょうか。

質問者③ 台湾有事を抑止することが大切だとおっしゃっておりましたけれど、割と身近な大問題だと思っております。ウクライナの状況にもよると思うのですが、門間先生が見たところ、向こう5年でのそういった可能性はどう分析されていますでしょうか？

門間 5年と区切って2028年となると、米インド太平洋軍の司令官をやった人や現役の人も含め、「2027年までが危ない」という発言があったことをご記憶だと思います。台湾有事と一口に言ってもさまざまあって、一番大変なのが台湾本島を直撃する有事です。それ以外のところでは、封鎖で済ませてじわじわ締め上げたり、離島を狙ったりすることがあるわけです。

ご質問にあったような5年以内という条件であれば、私は台湾本島を狙う有事は発生しないと思います。その理由は、5年以内に台湾本島を攻撃占領できるだけの武器や装備を人民解放軍は間に合わせることができないからです。台湾は2300万の人口があり、九州より少し狭いぐらいの面積で、中央山脈には3000m級の山があります。そのような台湾全土をしっかりと攻撃できるのか。中国としては、台湾政権の指導者を殺すなり、捕縛するなりして成功かというと、そうではありません。そこから先、新たな中華人民共和国台湾特別自治区のようなものを作り上げなければならないからです。それに成功しないと、チベット自治区や新疆ウイグル自治区などより危険な火薬庫を内部に抱え込むことになります。そういう点では、確実に侵攻作戦を成功させて、なおかつ台湾の社会・政治を改造することができる能力を身に付けてから本島をやるだろう、と。それには、人民解放軍自体の渡海能力などを含めて、5年ではまだまだ足りないだろうと思います。

米軍が出てくるかもしれないことを考えても、習近平氏はまだ決断はしないだろうと予想しています。ただ大事なのは、ロシア・ウクライナ戦争が始まった時、プーチンが本当にウクライナに侵攻すると考えていた人は、ロシア専門家でも少なかったわけです。小泉悠氏のように予想していた人もいらっしゃいましたけど、少なかった。そう考えると、予期せぬことが起こり得ると考え、準備しておくことは重要だろうと思っています。

質問者④ 台湾の若者の政治への関心は高いのですか。また、学校教育での政治・歴史教育の観点から、台湾の若者が政治への関心を高めている要因はあるのでしょうか？

門間 政治への関心は高いと言ってよいと思います。なぜ分かるのかというと、台湾総統選挙における全般的な投票率は、いつも70%から80%程度の投票率を維持しています。若者世代がごっそり無関心であれば、当然そのような投票率は確保できません。そういった点から、日本に比べれば、ずっと関心が高いと言っていいと思います。先ほど森平先生からもご紹介があったように、ひまわり学生運動も2014年に起きています。兵役が1年になるので、「嫌だな」というものも含めて、台湾では

政治や両岸関係の安全などに注目する人たちがまた増えてきているのかな、と考えています。

それから、学校での政治教育や歴史教育の観点からについては、それが投票行動に結び付くかは分かりませんけれども、先ほど私が挙げたような「台湾アイデンティティ」というものがあって、台湾第一主義といいますか、「台湾が大事」「自分たちは中国人ではなく台湾人なんだ」との意識の醸成に関しては、特に一党独裁から民主主義になったことで「自分たちこそが政治の主人公なんだ」との気持ちがすごく強くなりました。台湾の選挙分析の専門家でいらっしゃる東京外国語大学名誉教授の小笠原欣幸先生は「台湾の有権者は非常にディマンディングだ」と指摘しています。日本人が考える以上に、ものすごく「俺たちが主人公なんだ」ということで、政治家への要求が非常に強いということです。歴史教育とはやや違うかもしれませんが、自分たちがたどってきた歴史から、そのような状況になっているのだと思います。

学校教育に関して、蔣介石・蔣経国政権期から大きく変わっているのは、歴史教育にせよ、地理的な教育にせよ、政治にせよ、台湾中心主義が貫かれるようになりました。馬英九政権の時に学習指導要領の再変更がありましたが、民進党政権になって戻りました。そういう点からいうと、台湾アイデンティティをより積極的に育てていく教育が貫かれていると思います。

質問者⑤　米軍の第７艦隊は、中国の東部戦区全体を相手にするのに十分な力がありますか？

門間　回答から言うと、ないと思います。台湾有事が起きた場合、第７艦隊だけが相手になるわけではなく、当然、海兵隊や陸軍部隊も出てくるわけで、そういう意味ではアメリカ側も総力戦で戦わないと難しいということになります。仮に台湾にやって来る中国の補給部隊などを途中で潰そうとする場合、巡航ミサイルを１隻当たり 150 発くらい積んだ原子力潜水艦があるのですが、それを４隻とか使って攻撃したりすると思います。それは第７艦隊だけにとどまらない戦力ということになります。東部戦区は台湾有事の際の中心にはなりますが、東部戦区だけではなく南部戦区の一部や北部戦区の一部の部隊にも動員がかかると思います。そのような点から、中国の戦力はかなり巨大ですし、第７艦隊だけではとても太刀打ちできず、アメリカ側も総力戦で挑まなければならなくなる、というのが私の回答です。

森平（司会）　門間先生は本学の文学部に入学し、第二外国語で中国語を選択されたことから、現在の専門家のスタートを切られました。先ほども先生からお話がありましたけれども、在学中に天津の南開大学に１年間留学もされています。この「世界を知ろう！～中国語講演会～」は、中国語を勉強されている皆さんに向けて開催されているものですので、最後に門間先生から、本学で中国語を履修されている学生の皆さんに一言コメントをいただければと思います。

門間　私は立教大学に入学する時に、研究者になろうと思っていたのですけど、そういう気持ちを持つ自分を、立教大学はしっかり育ててくれたと感謝しております。特に、私が 1986 年に入学した時に、いまは既に退職されている谷野典之先生が北海道大学から立教大学の専任講師として赴任されてきました。谷野先生という 13 歳年上の兄貴分みたいな方に中国の面白さを交えながら熱心に中国語の指

導をしていただいたことは幸運でした。当時もそれなりに良い語学の教授システムはあったと思いますが、今は森平先生を中心にして、さらに優れたシステムを構築していることでしょう。そのような立教大学を皆さんのいろいろな夢を実現するツールとして使い倒してください。皆さん自身が積極的に動けば、立教も応えてくれると信じております。

「自分の限界は、自分が思っているよりも遠くにある」。これは立教大学探検部の先輩が教えてくれた言葉です。これを皆さんに贈りたいと思います。今日はありがとうございました。

森平（司会） 門間先生、今日はありがとうございました。以上をもちまして、「世界を知ろう～中国語講演会～」を終わりたいと思います。皆さん参加していただき、ありがとうございました。

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～朝鮮語講演会～

朝鮮語を“続けて”“活かす”～韓国語のお仕事の最前線～

日時：2024 年 1 月 22 日（月）17 時 20 分～ 18 時 50 分
場所：池袋キャンパス 本館 2 階 1203 教室

講　　師：**山崎 玲美奈**氏
（早稲田大学非常勤講師、上智大学非常勤講師、NHK E テレ『ハングルッ！ナビ』講師）

略　　歴：東京外国語大学外国語学部卒業。同博士前期課程修了。（株）アルク、（株）NHK 出版、（株）三修社などで校正・編集等を担当。早稲田大学、上智大学ほかで朝鮮語科目を担当。

主な著作：『キムチ 1 韓国語入門』（朝日出版社、2021 年）、『入門！読める話せる韓国語ドリル』（ナツメ社、2019 年）、『口が覚える韓国語 スピーキング体得トレーニング』（三修社、2018 年）、『キクタン韓国語会話 入門編』（アルク、2017 年）

司会：金 恩愛（キム ウネ）（朝鮮語教育研究室／外国語教育研究センター准教授）

金（司会）　本日は全学共通科目言語 B 連続企画「世界を知ろう！」の一環として、山崎玲美奈先生をお迎えして「朝鮮語を“続けて”“活かす”～韓国語のお仕事の最前線～」というタイトルでお話を伺いたいと思います。

入門初級段階から苦戦の連続

山崎 玲美奈氏

山崎　アンニョンハセヨ。初めまして、山崎玲美奈と申します。今日は授業が最終日だったということで、そんな中でお集まりいただきまして誠にありがとうございます。学生の皆さんはもう帰りたい気持ちかもしれませんが、１時間ほどお付き合いいただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

全学共通科目の「世界を知ろう！」朝鮮語講演会ということで、学生の皆さんが大学で朝鮮語を学び、その後どう生かしていけばいいのかについて、少しでも役立てばと思います。私は日本語が母語で、大学で韓国語の勉強を始め、今は仕事でも韓国語を使っていますので、このような例もあると思っていただければ幸いです。講演中は言語名を「韓国語」「ハングル」「朝鮮語」と混在するかもしれませんが、今回は特に気にせず話をしますので、お気になさらないでいただければと思います。

本日は、韓国語のお仕事にどんなものがあるのかという話と、私がどんなことをやってきたのか、

そして現在どんなことをやっているのかをお伝えしたいと思います。

最初のスライドに、翻訳、通訳、そして韓国語講師と書いてあります。

翻訳は、担当したことがあるもの全てをスライドに記載しましたので、専門でないものも含んでいます。メディア媒体や資料、文学作品、その他。対訳の有無などにより、翻訳にもいろいろあります。翻訳はかじった程度です。

そして通訳。通訳といっても、逐次通訳や同時通訳などさまざまですし、コーディネーターを務めるなど「韓国語が分かる人」という役割で通訳することもあります。

それから韓国語講師。現在はこの仕事が主になっています。大学あるいは企業、官公庁などから依頼をいただくこともありますし、語学スクールで仕事をすることもあります。今は大学の非常勤講師がメインですね。韓国語講師としての仕事内容は、授業をするだけでなく、韓国語教材の校正や編集、教材の作成、また語学番組の講座を担当したり、その裏方をしたりと多岐にわたります。

では、私がどのように勉強をしてきて、こうした仕事をするようになったのか、そして、どのような仕事をしてきたのかを、かいつまんでお話ししたいと思います。

私は新潟県の出身で、大学で韓国語を専攻しました。といっても、初めて韓国語を目にして耳にしたのが大学１年次の４月でした。もちろん大学入試の段階で韓国語を選ぶことを決めていたからこそ韓国語専攻となったのですが、当時は「やってみようかな」というような気持ちでした。大学で勉強すれば、辞書を引きながら新聞や本を読むくらいはできるようになるだろうという程度の考えで、まともに韓国語を聞いたこともなく、韓国に行ったこともなく、韓国人の友人も知り合いもいないという状態だったのです。1990 年代後半の当時は、韓国の映画や歌、文化などが日本に入ってくることはほとんどなく、韓国語を専攻することを周りの人に話すと、なぜか止められる時代でした。「なぜ？」「勉強してどうするの？」とみんなに言われ、「そこまで覚悟を決めて専攻しなくてはだめなのか」と不思議に思うほどでした。

私は韓国語について何も知らなかったので、大学に合格して韓国語を専攻することが決まったとき、初めて韓国語のニュースを見てみました。すると、バーッとハングルが書いてあり、ワーッと早口に聞こえる言葉が聞こえました。「しまった、やめておけばよかった」というのが最初の感想です。大学入学を前にして激しく後悔しました。しかし、合格してしまったし、入学金も払ってしまったし、他に行くところもない。もうやるしかありません。

入学後は、入門初級段階から苦戦の連続でした。苦戦はその後 10 年、20 年と続くことになります。今、韓国語の教員をしていますと、「韓国語が得意だったのですね」「勉強が好きなのですね」と言われることがありますが、そんなことはありません。この会場にいる、大学で初めて韓国語の勉強を始めた学生さんの中には同じ気持ちの方もいると思いますが、まず最初に文字が読めない、記号のように見えるという印象がありました。

当時、授業は週６コマありました。ネイティブの先生、文学の先生、言語学の先生の３人が２コマずつ担当していました。それぞれの授業で異なる教科書を使い、各々の進度で進むので、小テストが重なったりもして、大変慌ただしかったことを覚えています。最初の時間で母音や子音を習い、次の

授業でテストすると言われたのですが、そのテストに受からなかったのがクラスで私だけでした。私以外は全員、覚えてきたのに、私はどうしても覚えられなかったのです。大変なショックを受けました。

実家のトイレの壁にハングル一覧表を貼って覚えるなど努力をしたのですが、覚えられませんでした。家族から「やめて」と言われても「命がかかっているから！」と貼り続け、アルバイト先の皿洗い場の壁にも貼って、水が飛んで文字が消えたら貼り直すということを何度も繰り返したのですが、それでも覚えられず、とても苦戦しました。文字が覚えられず居残りになったこともあります。次の週までに覚えてきなさいと言われるのですが、次の週になるとまた別の子音が増え、母音が増え、パッチムが増え、発音変化が増え……全く覚えられないのに授業はどんどん進んでいってしまうのです。

ネイティブの先生に何度も発音を見ていただいたのですが、濃音が出ないというのが大きく引っかかった部分でした。日本語ではあまり使わない「ッタ」や「ッパ」という音が出せなかったのですね。ネイティブの先生の授業には 30 人ほどの学生がいたと思います。授業の最後、先生の前に全員 1 列に並び、先生から OK をもらった人から帰ってよく、アウトと言われた人は並び直して再び先生のチェック受けることになっていました。そこでも私だけ最後まで残ってしまうのです。授業時間をオーバーして次の授業が始まってしまう時間になると、先生が私に「研究室に来い」というジェスチャーをされ、研究室で二人になると、先生が突然「私の教え方が悪いのですか？」と片言の日本語で言うのです。その先生は、本当は日本語が分かるのですが、普段はそれを隠して日本語が話せないふりをしていました。私は気を遣わせてしまって大変申し訳ない気持ちで、「先生は悪くありません。私ができないのです」と言いました。先生は何度も教えてくれるのですが、やればやるほど頭が詰まっていくような感じで、どんどん分からなくなってしまいました。結局その時は、私が「頑張ります」と言い、先生も「ファイティン（頑張って）」という感じで終わりました。

また、日本語を母語とする先生の授業では、漢字音のルールのテストが毎週ありました。習った漢字が増えるにつれて問題数も多くなっていきます。確か 100 点を取るまで帰れませんでした。案の定、私は残ってしまうのですよね。休み時間になっても終わらないということが何度かあり、先生が腹を立てて「今日はあなたが終わるまで帰さないわよ」と。私も頑張ったのですけれども、外が暗くなっても、どうしてもできないのです。「なぜできないのか」と言われても、私のほうが教えてほしいくらいでした。あまりに私が解けないので、やがて先生が何枚も用意してくれていたテストの紙がなくなってしまい、結局「夏休みに大学に来なさい」ということになりました。夏休みにその先生の研究室で「あなたのせいで夏休みに学校に来なくてはいけない」と怒られ……先生も本気で怒ったわけではないのですが、「頼むわよ、どうしてできないの」と言われ、「私も知りたいです」と返してまた怒られたりして。

もう、苦戦の連続でした。うまくいったことなど一度もありません。韓国語の初級・中級ができるようになるまで、長い間苦労しました。逆に、なぜ他の人はすぐに覚えられるのだろう？と私は思っています。

今、私は教員として韓国語の初級入門の授業を受け持っています。授業では「次の週にテストするから、覚えてきてね」と言いますが、内心は「覚えられるのかな」「覚えられなくても大丈夫だよ」とつぶやいています。時折、覚えられないと相談に来る学生がいると、「分かるよ！大丈夫だよ！い

つまでも付き合うよ！」という気持ちになります。

私の場合は、やるしかなかったので、やりました。結果的に、私にとっては「回数をこなすしかない」ということが、地味ですが確実な方法でした。100 回やってだめなら 1000 回、1000 回やってもだめなら１万回、１万回やってもだめなら 10 万回やろうと考えました。例えば、外国語の曲の歌詞の意味を知らなくても、何回も聞いているうちに音だけで覚えられますよね。だから、できないことは絶対にないはずなのだと。何回も繰り返し聞いたり、書いたり、唱えたりすれば、きっと体に染みつくはずだと信じて、“100 本ノック”が基本の勉強法でした。人にはお勧めしませんけれども、私自身はそのやり方でした。

当時、教材の音源はカセットテープでした。１本 5000 円ほどと高価だったので、学生は AV 室などで別のカセットテープにダビングして、ボチッとボタンを押すタイプのプレーヤーで聞いていました。そのカセットテープを 100 回は聞いたでしょうか。何本かテープが切れたり絡まったりした覚えがあります。実家で、同じテープを何度も大音量で流すので、家族にはとても嫌がられました。兄には「今でも言えるよ」と言われることがありますが、私より先に覚えているじゃないかと。本当に思い出すと胃が痛くなるような、つらかった初級の頃の思い出です。

ですので、初級で苦戦する学生さんの気持ちはよく分かります。そしてすぐに上達する学生さんには、どんどん進んでほしいと思っています。

初めての韓国は、夏休みの語学研修

初めて韓国を訪れたのは夏休みの語学研修で、行き先はソウルにある韓国外国語大学でした。大学の専攻で用意されていた研修で、希望制でしたが、研修に参加してレポートを出せば２単位もらえました。費用の問題はあったのですけれども、私ほどの落ちこぼれでも現地に行けばさすがに上達するだろうと思いましたし、研修に参加する他の学生はさらに韓国語が上手になって帰ってくるだろうから、後期に置いていかれるのはつらいとも思ったので、行くことを決めました。

研修先が韓国外国語大学だったのは、おそらく先生か学校同士のつながりがあったのだと思います。ソウルの端ののどかな場所にある小規模でアットホームな学校で、とても好きでした。寮は使えず、下宿生活でした。先生が事前に下宿先の方に頼んでくださったのだと思いますが、２～５人のグループに分かれて現地の下宿に暮らしました。私は４人ほどで同じ下宿に泊まり、２～３人部屋に分かれたと記憶しています。下宿の主はチョルラド（全羅道）かどこか出身のおばあさんで、意思の疎通は全くできませんでした。

研修は約２週間でしたが、帰りの飛行機を延期してもかまわないし、お金さえ払えば下宿も延泊できるという話でしたので、自主的に期間を延長しました。理由は二つあります。現地に長くいたほうが韓国語を覚えられるだろうと思ったからと、飛行機代がもったいなかったからです。滞在期間が１週間でも１カ月でも、往復の飛行機代は同じです。貧乏性なので、せっかくなら１カ月滞在してみようと思い、同級生みんなが帰る中、私だけ２週間ほど延長して、言葉の通じないおばあちゃんとの生活になりました。延長した期間で何をしていたかというと、確か姉妹校の誰かと連絡をして……携帯電話がない時代にどうやって連絡したのか忘れてしまいましたが、待ち合わせの時間と場所を決めて

約束して会っていたような気がします。

そうして必死に１カ月を過ごして帰国したのですけれども、残念ながら、あまり語学力が伸びた実感はありませんでした。ただ、自分は頭で考えたり手を動かしたりしただけで上達する人間ではないということは、すでに理解していたので、１年次の冬休みにも少しでも韓国に触れたいと考えました。しかし韓国に行くには費用が足りない。そこで、大阪の鶴橋にコリアンタウンがあると聞き、行ってみようと思いました。鶴橋では意味もなく歩き回ってお店の人と話をしたり、在日の方もいるので「こんな文化があるんだ」と知ったり、少しでも韓国に触れたいという思いでウロウロしました。

１年次の春休みには短期の語学研修で韓国を訪れました。この時は韓国外国語大学の裏にある慶熙（キョンヒ）大学でした。なぜ行ったかというと、少しでも韓国語を身に付けたいという思いももちろんあったのですが、「２年次になったら留学に行きたい」と迷い始めた時期だったからです。でも、できるかどうか分からなくてとても不安でした。相談できる人もなく、現地に仲の良い人がいるわけでもなく、インターネットがやっと普及し始めた頃だったのでメールのやり取りができるわけでもなく、パソコンでハングルの入力もできないという状態でしたので、１年間の留学が怖いと感じていました。そこで、まず１カ月行ってみて、大丈夫であれば１年間行こうと考えたのです。韓国外国語大学は夏休みに行ったので避けよう、とはいえあまり遠く離れるのは怖い、日本人が多すぎる大学はやめようなど、いろいろ考慮して、韓国外国語大学の近くにある慶熙大学に行くことにしました。

慶熙大学には「トウミ」というチューター制度があるので、友人がいなくてもなんとかなるのではないかと思いました。語学研修では１カ月、またもや下宿暮らしをして、そこで日本人や韓国人の友人が少しずつ増えたり、同じ時期に留学するという子と知り合えたりしたことから、留学することを

決めました。

私のいた大学には交換留学制度がなかったため、１年間休学するしかありませんでした。同級生と卒業年度がずれてしまうけれども、思い切って２年次に留学することにしました。準備事項は「思ったより大変だった」という印象です。まず学校の選定に困りました。どこでもいいというのが逆に困りましたし、当時は今のように語学堂や外国語研修院が各大学にあるわけではなく、大学の情報を集めるのにも苦労しました。行ったことのある慶熙大学か韓国外国語大学のどちらかかな、と思いました。ビザの申請手続きも自分でしなくてはいけないのですが、手続きは韓国語で行います。韓国語を学びに行くのに、韓国語で申請とは……という感じでした。申請の仕方が私には全く分からず、周りにも分かる人がおらず、どのように乗り切ったのか覚えていません。おそらく先生に聞いたりしたのだと思うのですけれども、何度か書き直した記憶があります。

それから住居探し。交換留学生ではないため寮に入ることはできず、やはり下宿することにしました。下宿では１人部屋のことをトッパン、２人部屋のことをハッパンといいます。トッパンがいいのですが家賃が高いのがネックです。ハッパンは家賃がほぼ半額なので、私はハッパンを選びました。ハッパンはペアになる人が必要ですが、私の下宿先では、私一人だけでもハッパン希望で入れて、同居人は見つかれば来るシステムとのことでした。結局、韓国人の女性の学生が同じ部屋になったのですけれども、運良くインチョン（仁川）の人で、なまっていなくてホッとしました。相手からしてみれば、学校に近い下宿を選んだら外国人と相部屋で困惑しただろうと思うのですが、とてもいい方で、いろいろ教えてくれましたし、私の存在を気にせず暮らしてくれたので助かりました。

彼女は年上のお姉さん、オンニでした。友人同士でも普段使わないような、日常の韓国語を聞けたのはありがたかったですね。同じ部屋に住み、寝るときも、起きるときも、食事のときもずっと一緒にいるので、何気ない瞬間に何と言うのか、大変勉強になりました。当時、韓国人は電話がとても長かったのですよ。深夜の通話料が安いらしく、恋人ができると深夜０時から朝６時までずっと話していました。私は聞き取れる範囲で聞いていましたが、「そんなこと本当に言うんだ！」と驚くような、ドラマに出てきそうなセリフを本当に言っていました。韓国の恋愛ドラマによくあるむちゃぶりもしていて、突然オンニが「歌を歌って」と言い、相手が歌ったこともありました。その声が大きくて、私にもよく聞こえてきて「うまいじゃん」と思ったり、「ギターを弾いて」とのリクエストに応えて男性が弾き、夜に選ぶ曲ではないような曲が聞こえてきたり。また、部屋にゴキブリが出たことがありました。私は驚いた程度だったのですが、同室のオンニは「オモモモモモモ」と言って逃げたのです。驚いたときの韓国語が「オモ」「オモナ」ということは知っていましたが、伸ばすとどうなるのかは知りませんでした。「オーモモモ」かなと思っていたら、「モ」が増えるんだ！と、感動しました。それから、部屋のオンドル床暖房の床をガムテープでペタペタして掃除しているとき、オンニが「モリカラッ(髪の毛)、モリカラッ」と言っていて、そう言うんだなぁということを知ったりもしました。

こうした小さな事柄が大変面白く、いい経験になりました。住む所は当たり外れもありますよね。食事がおいしい、おいしくない。部屋が一緒になった人がうるさい、うるさくない。それに韓国ではトイレ・洗面所・シャワーが同じスペースにあるので、朝、誰かがトイレやシャワーを使っていたら、私はもう使えません。そういうときは歯ブラシを持って学校へ行き、学校で歯を磨いたこともありました。私の下宿先は男性も女性もいるところだったので、兵役に行く前と帰ってきた後の男性の変貌

も興味深かったです。兵役前は少しヒョロヒョロしているのですが、帰ってきた人は下宿でトラブルが起こっても動きが素早くて、頼りがいがありました。

留学や語学研修に行ったと話すと「実家が裕福なんだ」と言われることもあるのですが、全く違います。全てアルバイトで賄いました。情けない話ですが、私は学費もアルバイトで稼いでいました。ここまでの話を聞いて「なぜそれほど勉強熱心なのか」と思われるかもしれませんが、ポイントは“学費”なのです。専攻している韓国語の単位を落としたら卒業できません。しかし私は留年するわけにはいきません。学費が払えないからです。どうしても卒業しなくてはいけないから頑張ったのです。日本では大学の授業が８月に終わりますが、韓国では７月に終わります。その時期に合わせて韓国に行くために、大学で先生方に「韓国に留学したくてアルバイトをしていて時間がありません。試験をどうにかしてほしいです」と伝えて、早めに受けさせてもらったり、レポートに変更してもらったりしました。中には韓国に留学した成果で判断すると言ってくれた先生もいました。アルバイトは朝から晩までやっていたので、レジを打っているのか、お寿司を握っているのか、洗い物をしているのか、訳が分からない状態でした。おそらく、先生方は見逃してくださったのだと思います。そのおかげで何とかなりました。ご飯を食べることもままならなかったので、賄い目当てで飲食系のアルバイトが多かったですね。

そうして準備を進め、２年次の夏休みから１年間休学し、ソウルで生活をしました。実は留学中に学費が足りなくなり、１カ月だけ日本に戻ってアルバイトして、また韓国に戻りました。往復の飛行機代よりも多い金額を稼がなくてはいけないので、自分でも何をしているか覚えていないほどアルバイト漬けでした。

修士課程へ進学。韓国語に関わる仕事に携わり始める

留学を終え、帰国して復学し、学部を卒業した後に「もう少しやってみようかな」と思いました。韓国から戻ってきて、「後もう２年やろうか」というところで学部卒業になり、その先はどうしようと考えました。貧しい中でも就職しようと思わなかったのはなぜか、自分でもよく分かりません。お金のことよりも、全力で「これが限界」と思えるまで一生懸命、韓国語を勉強したら、どこまでできるようになるのだろうと思いました。ここは一つ試してみようと、大学院に進学することにしました。受け入れてくださった先生方には大変感謝していますが、動機は、全力投球したら韓国語はどこまで上達するのかチャレンジしてみたいという好奇心でした。

学部生時代のアルバイトはコンビニのレジなどで、韓国語を使う仕事はありませんでしたが、大学院に入ると韓国語に関わる仕事が少しずつ始まりました。

2002 年にサッカーワールドカップが日韓共同開催されました。このとき日本に韓国の文化が入ってきて、テレビで韓国が大きく取り扱われるようになり、韓国は身近な国だと言われるようになりました。私が学部を卒業するか、あるいは修士課程に入ったばかりの頃です。

そのような時代背景があって、2002 年に出版社のアルクから『韓国語ジャーナル』というムックが創刊されました。日韓の架け橋になりたいという志から作られた、年に４回発行される季刊のムッ

クでした。この『韓国語ジャーナル』３号で、CD の音声とスクリプトを一致させ、対訳のチェックを行うアルバイトを始めました。これが私にとって韓国語を使った最初の仕事です。「校正」という仕事でした。うれしいことに、奥付に編集協力という形で私の名前が載りました。自分の名前が初めて活字になったことがとてもうれしくて、何度も奥付を見直した覚えがあります。姓２文字、名３文字で長いので、名前の途中で改行が入ってしまったのは少し残念でしたけれども、それでもうれしかったのです。「玲美奈」という名前は、今では珍しくないと思いますが、当時は変わった名前と言われ、からかわれることも多く、昔は大嫌いでした。でも海外の友人ができると、私の名前が呼びやすいらしく、大学院の先生も先輩方も下の名前で呼んでくれて、この名前で良かったと思えるようになっていました。それが活字になり本に載っていることに感動しました。それが韓国語に関する仕事を続ける動機としてとても大きかったように思います。

『韓国語ジャーナル』とどうやって接点を持てたのか？これには偶然ながらも、きっかけがありました。きっかけになったのがこちらの記事です。出していいものか分からないので小さく表示しますね。おそらく辛ラーメンの広告記事だと思います。韓国からの留学生が辛ラーメンを使ってプデチゲを作り、友人と食べる様子を写真入りで紹介するレポート記事です。

ある日、大学院で、授業中に留学生のオンニからメモが回ってきました。オンニが「見て」というジェスチャーをするのでメモを見たら、「玲美奈の家で鍋をやっていい？」と書いてありました。またも貧乏話で申し訳ありませんが、私は交通費がかからないよう学校の目の前の古いアパートに住んでいたので、「学校から近いからそう言っているのだな」と解釈して「いいよ」と返事をしたら、「実は雑誌の取材なの」と言うのですよ。「先に言ってよ～」と思いましたが、もう承諾してしまったし、今日来るというので、慌てて部屋を片付けました。ですからこの記事に写っているのは、私が当時住んでいた部屋です。そして、実はここに写っている留学生のオンニこそ、こちらにいらっしゃる金恩愛（キム ウネ）先生です。

話が前後しますが、ウネ先生は大学院時代の先輩なのです。同じ研究室でした。大学院では言語を専攻する学生は一つの合同ゼミに所属していたので、日本語専攻出身のウネ先生と、韓国語専攻だった私は同じゼミに所属していました。ですから、ウネ先生には 20 年以上仲良くしてもらっています。

それで雑誌の取材ということで、私は田舎出身の学生でしたので、メディアの人に会えることにドキドキしていたら、なんと取材に来たのが『韓国語ジャーナル』の編集長でした。在日の裵（ペ）さんという方で、とても背が高い人でした。まさか編集長が来るとは思わず驚きました。後で知ったことですが、編集部には３人しかおらず、その日に取材を担当できるのが裵さんしかいなかったということのようです。私もここに写っていてキャプションに「山崎さん」と書いてあります。他にもサクラとして他のオンニたちも来てくれて、みんなで鍋を食べました。

『韓国語ジャーナル』と接点を持ったきっかけの記事

私は本が好きでしたし、仕事もないし、きっかけは大事にしたいと思い、とっさにその場で付箋にメールアドレスと携帯電話番号を書き、編集長に渡しました。

名刺さえなかったので、「もし何かあったらお声掛けください」と。すると後日、本当に連絡が来ました。当時の私は知り得ませんでしたが、編集部スタッフが３人しかいないから人手が足りなかったのでしょう。『韓国語ジャーナル』を創刊したばかりの頃、まだ韓国語と日本語のフォントを同時に扱うのが難しく、現場は大混乱でした。スタッフが足りないから日本語と韓国語の両方が分かる人が欲しい。しかも日本語が母語で韓国語が分かる人はほぼいませんでした。最初は「コピーするだけでもいいからちょっと来て」「韓国語が分かる人がいれば便利だから」というような軽いノリで誘われて、時給も分からないままに編集部に行き、お手伝いすることになりました。

『韓国語ジャーナル』は、日本語と韓国語が左右に並ぶ対訳になっています。私は校正として、訳文が一致しているかどうか、ずれや抜けがないか、また韓国語の綴りや分かち書きのチェックなどを行いました。はじめは「CD を聞いて文字と一致させて」と丸投げされたのですが、運がいいことに、私は専攻でしっかりと韓国語を習った人間でした。韓国語を耳で聞いて覚えただけではなく、先ほどお伝えしたように 100 本ノックで覚えてきました。メディアのことは何も分からなかったので赤字の入れ方を教えてもらい、分かち書きの間違いを正していきました。それまで、そうしたチェックができる人が編集部にはいなかったのだそうです。日韓の言葉を両方理解して、できれば日本語の母語話者で、韓国語の分かち書きや正書法が分かる人がいることを編集部の方は知らなかったようで、校正してほしいと言われました。確認してみたら、全然違うのですよ。CD の音声の文字起こしにも抜けがあったので、どんどん赤字を入れていったら、次も呼ばれました。そうして、いつの間にか校正者になりました。分からないことがあれば学校に行き、ウネ先生や他のオンニたち、先生方に聞きました。図書館に行けば辞書や資料も大量にありましたし。当時はメールでファイル添付ができたか、できなかったかという時代でしたので、永福町のオフィスに行って赤字を入れました。FAX の時代で、カラーではないので今にも目がつぶれそうな作業でしたが、訳文や内容の確認、音声がある場合は音声と文字が一致しているかどうか、どこまで文字に起こすのかなどを決めながら校正作業をしました。

韓国ドラマ『冬のソナタ』が日本で放送されたのが 2003 年です。この時、第１次韓流ブームが起こりました。“ヨン様”が流行した頃です。私は大学院に通いながら、企業研修や語学スクール等で講師の仕事を開始しました。大学院生の肩書があるからこそ、講師の仕事が来たようです。学部生には頼めないけれども、大学院生ならば OK という基準のようなものがあったようで、人づてに「人手が足りない」という話が来て、官公庁や企業で韓国語を使える人を養成するための研修などを担当しました。

少人数の社会人を相手に、超入門の初級からスタートして約２年間で通訳レベルまで成長させなくてはいけないという内容なので、２年目の受講生はハイレベルな勉強をします。延世大学校韓国語学堂の５級、６級の教科書をマスターするような内容でした。韓国語を教えるスキルに関しては、ここでの経験が大きな糧となりました。日本語が母語の講師は私だけで、他の講師は全員ネイティブだったのですが、ネイティブの講師に受講生が「これとこれはどう違うのですか」と尋ねても、「そういうものだから覚えて」と言われてしまうそうなのです。そうは言っても覚えられませんと受講生に言われるので、私は質問をメモして学校に行き、調べて分からなければウネ先生や先輩方に聞き、次の研修で受講生に解決方法を伝えて……というのを繰り返しました。この経験を通して、私も文法に強くなりました。日本語から韓国語に訳しやすいもの、訳しにくいもの、またその逆のものについても

大変勉強になりました。

続いて、『韓国語ジャーナル』６号で学習記事作成の仕事を開始しました。６号でハングル能力検定の対策特集を組むことになったのですが、記事を書く先生の一人が途中で連絡が取れなくなってしまいました。他の級はもうページができているのに、その級だけ原稿ができていないのです。そこで、イヤホンを付けて目の下にクマを作りながら意識もうろうとして赤字を入れている私に「山崎さん、書いて！」と依頼が来ました。「は !?」となりましたが、やるしかありません。周りも全員が大変な状況下で、できませんとは言えず、記事を書くことになりました。幸いなことに、検定を知っていればある程度の対策は分かりますし、私の通う大学はハングル能力検定の会場だったのでアルバイトとして冊子を配付したり、受験票を確認したりしたことがあり、何となく問題も分かりますし、しかもハングル能力検定協会で申込書を手入力するアルバイトもしていたので、分からないということはありませんでした。他の校正者や編集者もサポートに付いてくれて記事を書いたのが、学習記事作成の初めての仕事でした。名前が載ったかどうかは忘れましたが、記事が出てうれしかったです。

2004 年には映画祭やイベント、企業会議の通訳を始めました。日韓共同開催のサッカーワールドカップや『冬のソナタ』ブームがあり、映画祭など、韓国に関するイベントが増えた時期でした。私は通訳のトレーニングを受けたわけではなかったのですが、当時はとにかく人手不足で通訳できる人が少なかったので、「韓国語が分かればいいから来てほしい」と、専門ではない通訳をする機会が多くありました。

通訳の仕事では、トップの通訳の後ろに補佐が何人も付く場合があります。プロの通訳から「手が足りないから来て」と声をかけられ、補佐の一人として参加したこともありました。訳を入れるタイミングや、人数、メモの方法、マイクの有無、話し手との距離、どういう会場なのか、コーディネーター業務があれば、話し手との関係性の作り方などが、毎回違ったのでとても慌ただしかったです。ですが、通訳という仕事は、責任が大きい反面、普段行かないような場所に行けたり、普段会わないような人に会えたりでき、大変いい経験になりました。

あるとき、懇親会の通訳の補佐に入りました。その懇親会は映画『猟奇的な彼女』のクァク・ジェヨン監督が、3 作目の『僕の彼女を紹介します』を公開した際の懇親会で、監督ご夫婦が来ていました。「おいしいものが食べられるよ」と誘われたのですが、実際はずっと話しているから食べられませんでしたね。また、韓国でも日本のアニメーションが人気なので、『エヴァンゲリオン』などを制作したガイナックスの忘年会に通訳として呼んでいただいたこともあります。それがコスプレ忘年会だったのです。参加無料ですが、来る人はコスプレしなくてはいけない。「謎！」と思いながら行ったら、社長の一人は甲冑を身につけた鎧武者で、もう一人はトトロのネコバスでした。中野サンプラザで「すごいものを見てしまった」と思いました。面白い経験でしたが、毎回ヒヤヒヤでした。

当時、私は 20 代だったので、見た目が通訳に見えないという問題がありました。シャツくらいは持っていましたが、きちんとした格好をしていませんでしたし、少し童顔なのか通訳に見えなかったようで、現場に 20 分前に着いて座っているのに「通訳が来ていない！」と騒ぎになったこともあります。自分が通訳だとなかなか言い出せず、焦りました。そういうことがよくあったので、入場の時

に「通訳です！」と言いながら入ればいいのだろうかとも考えましたが、深刻な場だと浮いてしまうかもしれません。男性ならヒゲを生やしたり、スーツを着たりという方法がありますが、女性はそういう方法がないので、額に「肉」って書けばいいのかなと……意味はないんです、昭和のネタですみません。何か方法はないかと考えましたが、いい対策が思い浮かばず、それについては諦めました。

そして 2006 年、東海大学の非常勤講師。ここで初めて、大学の非常勤講師を務めました。大学での講師の仕事開始です。また、この年は、独学者向けの一般書の単行本を執筆する仕事を依頼され、『韓国語ジャーナル』で学習記事の連載が始まりました。おそらく、非常勤ではあるものの大学の先生という肩書があったから依頼が来たのだと思います。

非常勤講師を始めてから、本を書く仕事が始まりました。最初に出た本は『起きてから寝るまで韓国語表現ドリル』（アルク、2006 年）。『韓国語ジャーナル』と同じ出版社のアルクから出ました。血が出るほどの大変な作業でしたが、今見直しても、この本が最も渾身の一冊かもしれません。どうしてそこまで知識があったのだろうと驚くほどの情報量です。ただ、これは私が出さなくてはいけない本というわけではなかったと思います。

この『起きてから寝るまで』シリーズもそうなのですが、多言語の本が同時に動いていることがあるのです。中国語版や英語版の本が同時進行していて、韓国語版も同じタイミングで発行したいから、誰か韓国語の本を書ける人がいないか、というケースがよくあるのです。その場合、実は大学の偉い先生には話を持って行きづらいものです。断られるかもしれない、謝金も高額ではない、出版社側の要望を汲んでもらえないかもしれない……などの要因があり、出版社としては頼みづらい。ところが私のように、非常勤講師で、アルバイトをしていたので知っている人間だと頼みやすいのでしょう。謝金が低くてもやってくれる、無理をきいてくれる、話を持っていきやすいという出版社側との都合とも合致して、出させてもらえたのがこの本だったのだろうと思います。もちろん、「私が偉くないから依頼したのですか」とは、さすがに確認していませんが、そうだろうと思います。ありがたいことに、もう 1 冊、同じシリーズの単語帳『起きてから寝るまで 韓国語単語帳』（アルク、2007 年）が出ました。

2009 年、NHK『テレビでハングル講座』のテキストの編集担当の方が、私の 1 冊目の本を目にして「こういう記事が欲しい」と言ってくださり、『テレビでハングル講座』のテキスト巻末に掲載される学習記事の連載が始まりました。1 ～ 2 年間ほど担当したかと思います。2010 年、2012 年、2013 年、2014 年にも、手をかえ品をかえ、連載を持たせていただきました。

2010 年は日本で第 2 次韓流ブームが起こった時代です。語学書や教科書、文法辞典がたくさん発行され、一方で現場では人数が足りないという状態が続いていました。この後になると、韓国語ができる人が増えてくるのですけれども、その一歩前でした。私は語学書の校正や、教科書・文法辞典の編集の仕事もしていました。編集や出版というと華やかに聞こえるかもしれませんが、作業内容はとても地味です。まるでお米に写経するくらい地味な作業です。幸い、私は細かい作業が好きなので、できたのかもしれません。

例えば語学書の場合、出版にまつわる作業は、内容構成、対象者、執筆者、発売日等を検討して企

画することから始まります。外注する場合もありますが、出版社と執筆者とで打ち合わせをして、スケジュールを決め、仮データでデザインやレイアウトを検討します。台割という言葉は、そのとき初めて聞きました。ドラマでいう台本のような、どのような流れでどのような内容を入れるかを決めていきます。それから著者が執筆を始め、編集者が原稿を整理し、原稿を書き直して DTP に入稿すると、ゲラが出来上がります。それに赤字を入れて、また直していきます。校正を入れて 2 校を出し、音声があれば収録します。現在は音声がない本はほとんどないですね。それから 3 校を出して、その後、本になる、という流れです。この工程におよそ半年から 1 年ほどかかります。

この頃から、初級の学習書の執筆依頼が増えました。2011 年には『速読速聴・韓国語 読んで覚えて話せる単語』（Z 会、2011 年）。速読速聴には韓国語もあるのです。これは大学院のゼミの先輩が Z 会にいて頼まれたという経緯でした。検定関係の本も増えてきました。『はじめてのハングル能力検定試験 3 級』（アルク、2011 年）は執筆に苦戦し、完成までに 2 年かかりました。編集者の方にも申し訳なかったです。他にも、『起きてから寝るまで』シリーズが新しくなったり、他の出版社から声をかけていただくことがあったり、検定関係の本の改訂版を出したりという中、2013 年、学生の頃からお世話になっていた『韓国語ジャーナル』が休刊となりました。会社の都合だったようですが、外部の人間にはどうすることもできず、なくなると聞いてみんなで泣きました。その後、『手紙・メールの韓国語』（三修社、2016 年）が出ました。

2017 年に第 3 次韓流ブーム。この頃になると、すでに何冊も本を出していたからか、他の出版社からも依頼を受け、『超入門！書いて覚える韓国語ドリル』（ナツメ社、2017 年）や『キクタン韓国語会話【入門編】』（アルク、2017 年）、『改訂版 口が覚える韓国語 スピーキング体得トレーニング』（三修社、2018 年）、『入門！ 読める話せる韓国語ドリル』（ナツメ社、2019 年）など著書が増えました。2019 年には『韓国語ジャーナル』がアルク 50 周年記念として、年 1 回の発行ですが、復刻するこ

とになりました。編集者の方から連絡をもらい、涙を流して抱き合って「頑張ります！」と言ったのを覚えています。復刻後、現在までに３冊発行されています。

ラジオやテレビで語学番組の講師を担当

ちょうどその頃にNHKラジオから声をかけていただき、『まいにちハングル講座』の講師を担当することが決まりました。2018年に作業開始、2019年に放送スタート。ラジオのハングル講座があることは知っていましたが、音声はほとんど聞いたことはありませんでした。この講座は毎日15分間の放送が週５日、期間は６カ月、全120回です。120回分のテキストを作成し、120回分の音声を収録します。１回の収録で約５～８本録りです。収録場所に朝10時に行き、終わるのは夕方６時ごろでしたが、それでも早いほうだと言われました。だいたい12時間ぐらいかかるそうです。

私は素人なので、長時間話していると喉が潰れてしまうため、トレーニングを受けました。とにかく120回はボリュームが多いです。テキストを書いても書いても終わりません。それに、月刊誌なので五月雨式に進行するため、原稿を書いて送ったものが本になって出てきたと思ったら次の収録をしたり、その間に前の原稿が戻ってきたりと、私は今何をしているのだろう？という状態でした。感覚としては三面卓球で、来たものをひたすら打ち返していました。正直にやりすぎましたね。もう少しやりようがあった気がします。

ラジオのハングル講座が放送されたのが2019年で、次の年に新型コロナウイルス感染症が蔓延します。本来であれば翌年の後半に再放送があるのですが、１年ほどずれたような記憶があります。これはホームページのキャプチャです。講師は私で、他にネイティブの女性と男性が付いてくれました。女性はNHK国際放送局のアナウンサーのイム・チュヒさん。男性は通訳をされているイ・ホスンさんで、先ほどお話した、私が通訳の仕事で大変だった時期にご一緒していた方です。一緒に東京ドームや大阪ドームに行き、１日３時間も寝られずに大変だった時期を共に乗り越えた間柄でした。イム・チュヒさんも『韓国語ジャーナル』でずっとナレーションを担当してくださっていて、学生時代から知っている方でした。実はイム・チュヒさんには最初は断られたのですが、プロデューサーさんが「講師は山崎玲美奈先生です」と伝えたら引き受けてくださったのです。それまでラジオには出たことなかったそうで、本当に運が良かったです。この写真を見た人に「誰が講師か分からない」と言われてショックでした。中央に立っているからなんとか講師に見えてほしいですね。やはり額に「肉」と書くべきだったのでしょうか。だめですよね。

収録前の作業としては、全120回分の構成作成、検討、決定。デザイン作成用のダミー原稿を数パターン作成。デザイン、フォント等の確定。テキストの原稿作成、検討、決定。収録台本の作成などがあります。収録作業は、１日分（１回15分）を録るのに１～２時間ほどかかります。打ち合わせやマイクテスト後、収録です。紙を動かす音などに注意を払う必要があります。また、ホームページ用の写真は「季節感のない服で来てほしい」と言われました。モコモコの冬服だと放送の季節が変わったときに困るからです。私はワンピースにしましたが、写真を撮るのは１月なので寒くて困った記憶があります。スタジオの端で撮影しました。収録後もテキストのチェックなどがあるので、想像以上に作業量が多かったですね。

その次に出した著書が『起きてから寝るまで韓国語表現 1000』（アルク、2020 年）。この本はウネ先生と一緒に執筆させていただき、大変うれしかったです。当時、ウネ先生は九州にいらっしゃったので、仕事でご一緒しない限りは会ったり連絡したりという機会がなかなかありませんでした。ですから一緒に本を作れることがうれしくて、キャーキャーワーワー言いながら作った思い出の本です。ウネ先生がフレーズを書き、私が解説を書いて、すごく満足度の高いものになりました。

それまでは一般書ばかりでしたが、その頃初めて大学の教科書を執筆しました。非常勤講師の私が大学の教科書を出してもあまり意味がないため、お声もかからなければ書く機会もなかったのですが、なぜか「誰でも使える韓国語の教科書を作りたい」とご依頼をいただきました。誰でも使いやすい難易度の低い教科書が作りたい、できれば今までなかったような本が欲しい、とのことでした。出版社の方も話しやすい方だったので、面白そうだしやってみようと思いました。その本が『キムチ 1　韓国語入門』（朝日出版社、2021 年）です。タイトルが“キムチ”なんておかしいと批判的な声もあったのですが、紆余曲折あって“キムチ”になりました。

韓国語の本のタイトルは『〇〇韓国語』や『韓国語〇〇』が多いです。もはや区別がつかないので、一発で覚えられるタイトルにしたいと考えました。また、長い間読まれ続けている本には、略称があるか、『〇〇の〇〇』と“の”が入っているか、あるいは言語名が入っていないというような、いくつか共通点があったので、「チャレンジしてみよう」の一言で、韓国関係の本だと分かるけれど“韓国語”とは書いてないタイトルにしようといろいろ考えて、最終的に『キムチ』になりました。表紙にはハクサイやトウガラシのキャラクターや、キムチを漬ける桶が描かれています。本当はピンク色のゴム手袋のイラストも入れたかったのですが、さすがに止められました。

この本には続刊の『キムチ 2　韓国語初中級』（朝日出版社、2023 年）もあり、レベルが進むにつれてキャラクターの野菜たちがどんどん漬かっていきます。ある意味目が離せなくなるような余白がある本にしたいと思っていたら、とてもかわいいイラストが出来上がってきて驚きました。しかも LINE スタンプまでできました。本より先に LINE スタンプが出たのですよ。原稿はまだ執筆中なのに、出版社の方から「イラストがかわいいから LINE スタンプを出します。案を出してください」と言われ、70 案ほど出したうちの約 30 案が採用されましたが、私にはペイはありません。でも、かわいいからいいです。LINE スタンプで「キムチフレンズ」と検索するとヒットします。

『キムチ 2』の表紙では、キャラクターたちが桶から出てカメに漬かろうとしています。もうキムチになる一歩手前ですね。ダイコンとニンニクのキャラクターも増えました。小さく「김치（キムチ）!!」とあるのは、昔は写真を撮るときのかけ声として「キムチ！」と言っていたので入れたいという編集者さんの（上司の方の）こだわりです。カメの中が赤いので、おそらくコチュジャンなどが入っているのでしょう。漬かったらこの野菜たちはもうサヨウナラ……。『キムチ 3』が出る予定はないのですが、発行されたらこの野菜たちはどうなってしまうのでしょうか。実はこのダイコン、ひらめくと頭が割れて外れる

のですよ。見たときは驚きました。教科書の本文にありますので、よかったら読んでみてください。

なんとその後、一般書も出ました。『キムチ 韓国語超入門』（朝日出版社、2022 年）です。こちらも中国語版と韓国語版が同時に動いたそうです。『キムチ１』をもっと簡単にしてルビを付けてほしいということで、本文はそのまま漫画になり、キャラクターもさらにかわいらしくなりました。価格は 1760 円です。私自身、アルバイトモンスターで、高い本が買えなかったので、どうしてもテキスト価格を下げてほしいという思いがありました。大学の教科書は 2500 円とか 2700 円とかしますよね。それを何科目分も買うことが私にはできませんでした。ですから、どうしても高い本にはしたくないとお願いして、『キムチ１』『キムチ２』の価格を最大限に下げてもらいました。その分、印税はカットしてもらっています。でもそんなことよりも、買える本でなければ意味がないと思っています。高くていい本もありますが、みんなが手に取れる本があったらいいなと考え、こうなりました。

2022 年、NHK E テレ『ハングルッ！ナビ』の講師になり、テレビの語学講座に関わる仕事がスタートしました。2021 年から作業開始。１年間で全 48 回の放送があるので、そのテキスト作成と収録を行いました。事前準備として始めたことがいくつかあります。まず、滑舌や発声のトレーニングです。私はあまり滑舌がよくなく、新潟出身のため標準語のアクセントも完璧ではなく、早口です。ラジオ講座を担当した時も滑舌や発声のトレーニングを受けたのですけれども２年ぶりでしたので、舞台役者の方にマンツーマンでトレーニングしてもらいました。映像で顔が映るということは、まばたきや身振りなどの体の動きにも制約がかかるので、そういったところを直す目的もありました。これがまるで血の涙を流すような、大変厳しい指導でした。それから体力作りのため、マンツーマンの加圧トレーニングや筋力トレーニングを始め、今でも続けています。１年間を走りきれるかは体力勝負ですし、講師が不在だと困るという責任もありますよね。また私は猫背なので、立ち姿や姿勢のトレーニングも専門の方にマンツーマンでお願いしました。そして体調管理も重要なので、食事制限もしました。

１年目は歌手の K さんがナビゲーター役、JO1 の河野純喜さんが生徒役、私が講師でした。この写真も「K さんが先生に見える」と言われましたね。ちなみに写真の背景は CG で、ブルーバックで撮影しました。後ろの壁が青一色で、青色部分に背景を加工するのですが、衣装が青いと衣服に背景が透けてしまうので、青い服は着られません。紺色やジーンズも NG です。ですから初回の撮影はみんなの服の色がかぶりますね。大変いい経験になりました。

収録前の作業は、少し違いもありますが、ラジオ講座とほぼ同じです。出演するだけでなく、台本や字幕の確認も行います。全スタッフが韓国語を理解しているわけではないので、チェック担当者と私の二人で確認しました。ミスがあったら大変なのですけれども、１回か２回ありましたね。母音が間違っていたのだったか、テキストは問題なかったのですが…。

韓国語の講座は講師が２年で交代することが多く、運良く２年目までやらせていただけて、今も放送されています。今、私が着ているものと同じ服を来月の放送で着ています。衣装は自前です。ですから私の家にはあまり着る機会のない、青以外のワンピースが約 20 着もあります。「メルカリに出せば？」と言われますが、出品方法や送料の設定が分からず困っています。普段はこんな格好はしないのですよ。『ハングルッ！ナビ』は３月末まで放送されるので、無事にゴールして次の先生にバト

ンをお渡しできればいいなと思っています。2023 年度の講座のナビゲーター役は K さん、生徒役は俳優の高橋文哉さん、私が講師です。ホームページでは、私は眼鏡をかけています。なぜならカンペが見えないからです。台本を覚えきれないのでカメラの近くにカンペが出るのですが、目が悪いのでカンペを見るための眼鏡です。

このように、翻訳、通訳、韓国語講師などいろいろな仕事をやってきたというお話でした。以上です。ありがとうございました。

金（司会） 山崎先生、ありがとうございました。玲美奈先生は学生の時から本当に話が面白く、先生の後に話すのは大きなプレッシャーです。先ほど玲美奈先生からプデチゲのお話がありました。私は学生の皆さんに「メディアでは話が誇張されていたりバイアスがかかっていたりするので、必ず自分の目で確かめなさい」と伝えていますが、プデチゲの取材時も、私は全く料理ができないのに料理が得意な留学生を演じ、玲美奈先生の部屋で鍋をしたのでした。

私は 2023 年に立教大学に赴任したのですが、2011 年から 2022 年までは九州の福岡にいました。玲美奈先生が NHK のハングル講座やラジオ講座でご活躍されている姿を、遠くから、自分のことのようにうれしく見ていました。学生時代の玲美奈先生はいつもアルバイトしていましたが、いつも一生懸命でした。お話からも分かる通り、大丈夫かなと思うようなことにもチャレンジしていくのです。はじめは大変な思いをしても、それを乗り越えて、次へ次へと成長していく。そういう姿を見ると、親でもないのに私が感極まって、すごいと思っていました。

どんな質問でも先生は快く答えてくださると思いますので、家に帰った後に後悔しないよう、ぜひ質問にチャレンジしてください。

質疑応答

質問者① 今日は中身の濃いお話をありがとうございました。先生のことは NHK の講座などで拝見していました。私は学生ではないのですけれども、質問させていただきます。質問は三つあります。まず、大学時代、韓国語を学ぶ人は少なかったとのことですが、学生は何人くらいだったのでしょうか？

山崎 韓国語を専攻していたのは 30 人でした。ロシア語、中国語、韓国語を合わせて 100 人の学生がいる学科で、年によって人気の言語が変わるのですが、中国語が圧倒的に人気があり、韓国語は 30 人でした。

質問者① 大学に入る時、韓国語を専攻しようと思ったきっかけは？

山崎 よく聞かれるのですが、実はあまりはっきりした理由がありません。いつも用意している答えは「なんとなく」なのですが、始めたことよりも、続けられたことに大きな意味があった、というのが私の感想です。勉強に苦戦していたので、常に明日やめよう、来月やめよう、来年やめようと思っ

ていたのですが、そういうタイミングになると、なぜか突然、ウネ先生をはじめ、親身になってくれる人が現れて助けてくれるのです。それで命をつないで頑張り続けることができました。そういうご恩があるから頑張ろうと思えて、ここまで来ました。

韓国語に興味を持ったのは、日本史が好きだったのですが、その先生が満州から引き揚げてきた方だったり、出身地の新潟県では北朝鮮との間に万景峰号が行き来していたりと、地元には韓国の言葉や文化が身近なものとしてありました。拉致問題に関しても家族会の方がビラを毎週配っていたので、日韓関係で何かあるたびに情報が耳に入るのですよね。忘れた頃にまた次の問題が起こったりして、定期的に耳に入ってくるのです。でも、言っていることがお互いに食い違っていて、韓国の人はどう思っているのだろう、流れてくる情報が全てではないようだ、と。そのとき、自分で聞いてみたいなと思いました。韓国の人の考えていることを自分の耳で聞いて、私が思っていることを伝えてみたい。韓国語を勉強すれば、韓国語で書かれたものを辞書を引いて読めるくらいにはなるかなと思いました。

質問者①　最初は韓国語の勉強に苦戦されたということでしたが、聞き取りはどのように克服されたのでしょうか。

山崎　聞き取りはとても苦手な分野でした。学部生時代にスピーチコンテストに出たことがあります。普段から、先生方に多大なご迷惑をおかけしながらコミュニケーションをとっていたので、「出場者がいないから出て」と言われて出場することにしました。自分で作成した文章を韓国語に訳し、先生に読み上げてもらって録音したものを繰り返し聞きました。その際、イントネーションまで完全に真似できるように、スロースピードとハイスピードで何回も聞きました。そこで覚えたものを崩していき、どんどん会話ができるようになりました。

ただ、会話はできても聞き取りはまだ苦手でした。韓国に留学して半年ほど経った頃にようやく聞き取れるようになったのですけれども、最初に聞き取れた瞬間は、聞き取れたことが自分で理解できませんでした。あまりにも自然に意味が分かったので。下宿でみんなと話していて、ふとした拍子に全部聞き取れていて、また次のときも「あれ、私、全部分かっている！」と思いました。一度自転車に乗れるようになったらもう転ばないのと同じように、一度聞き取れるようになった言葉は聞き取れなくならないのかもしれません。発音も一度できるようになれば、もうできなくなることはあまりないのではないでしょうか。

金（司会）　学生の皆さんが質問を考えている間に、玲美奈先生が学生時代からアルバイトをしていたアルクの編集者の方がいらしているので、ぜひコメントをお願いします。

山崎　来てくださるなんて思っていませんでした！

アルク編集者　こんにちは、アルクの美野です。実は昨日、英検が立教大学で行われていて、中学２年生の娘を送ってきたときに「山崎玲美奈」と書かれたチラシを見かけ、きっと金先生や佐々木先生もいらっしゃるのではないかと思い、来てみました。驚かせてすみません。今日はアルクの話をたく

さんしてくださり、ありがとうございます。私はずっと『韓国語ジャーナル』を担当しています。玲美奈先生は６号で初めて記事を書かれたとのことでしたが、私は６号の制作がギリギリ終わるような時期にアルクにアルバイトで入りました。その時、編集長の裵さんにいきなり「これから阿部美穂子さんのインタビューをして」と言われました。私、韓国語はそれなりにできたのですが、編集者としては素人でした。にもかかわらず、入社２日目の仕事がタレントにインタビューをしてハングル能力検定試験３級の合格体験記を書けというのです。そういったむちゃぶりは玲美奈先生もされていて、むちゃぶり仲間です。励まし合ってここまでやってきました。

先生がご紹介くださった本の中にも、私が担当させていただいたものがあります。『はじめてのハングル能力検定試験３級』や『起きてから寝るまで』シリーズでもご一緒させていただきました。いつも思うのは、先生は執筆だけでなく、教えたり、通訳したりとさまざまな経験をされていて、そういったご経験を本の中にきちんと落とし込まれているということです。その上で、文法をしっかり学び、それを良い形で学習者に伝えようという意欲があり、知識をさらに深めることにも力を注いでいらっしゃいます。私たちと一緒に、それを本という形にする作業をしていただけることがとてもありがたいです。私も韓国語を使って働いてすでに 20 数年経ちますが、これからも先生にはご活躍いただき、私ももう少し頑張れたらと思います。

金（司会）　ありがとうございました。それでは学生の皆さんからはいかがでしょうか。10 秒ほど時間をとりますので、一緒に来ている友人と相談してみてください。どのような質問でも大丈夫です。

質問者②　質問させていただきます。基礎から中級、上級へと上がっていく中で、もし過去に戻るとしたら、勉強しておいたほうがいいところや、押さえておくべきポイントがあれば教えてください。

山崎　それは最初からうまくできる人の話でしょうか？　できない人の話でしょうか？

質問者②　私も特別できるわけではなく、大学１年次で第２外国語として韓国語の学習を始め、３年次になった今でも続けています。

山崎　できる・できないにかかわらずかもしれませんし、モチベーションや目標の有無によっても違うかもしれませんが、根本の部分が変わらないのであれば、思い返してみて後悔しているというか、こうしておけばよかったと思うのは、もっと自分の成果を褒めてあげればよかったということです。私のもともとの気性だと思うのですが、できていないところが目について、「あれもできない、これもできない」「あんなに勉強したのにこれもできていない」と自分を評価しがちでした。今思えば、できたところもあったはずです。もう少し自分を褒めてあげればよかったと思います。もっと自分の韓国語に自信を持てばよかったなと。せっかく、いい先生方に学び、いい方々と知り合い、韓国語を続けられたのだから、そのことにもっと誇りを持てばよかったです。当時は謙虚なつもりで卑屈になっていたように思います。自分に対する評価の低さが、先生方の評価にもつながっていたのではないかと思うと少し悔しいです。もっと堂々としていればよかったです。ただ、「戻れるならいつがいい？」

と聞かれても、大学時代はアルバイトモンスター状態でしたので、一秒たりとも戻りたくありません。同じことはもう絶対にできません。

質問者③　お話ありがとうございました。私は立教大学の近くにある目白大学からまいりました、韓国語学科で韓国語を教えている朱炫姝（ジュ ヒョンジュ）と申します。先生のお話はとても面白く、ぜひ目白大学で私が教えている学生にも伝えたいです。私がメモしたキーワードは三つあり、「努力」「挑戦」「勇気」のある方だなと。ご自宅のトイレやアルバイト先にハングル一覧表を貼ったり、テープが擦り切れるほど繰り返し聞いていらっしゃったことは大変な努力だったと思います。

　著書のお話で、『キムチ』シリーズを出されており、『キムチ３』の予定はないということでしたが、キムチは漬けてから食卓にあがります。その後も、キムチチゲにすることもありますし、チヂミも作れます。熟成しすぎたものは一度洗い、豚肉と炒めてテジチムにもできますので、ぜひ続刊を期待しています。

山崎　表紙がすごいことになりそうですね。

質問者③　先生にお聞きしたいことは２点です。留学や仕事をする中で、挫折してしまったり、ホームシックになったりしたご経験もあるのではないかと思いますが、そのときどうされましたか？　もう一つは、大学院ではどのような研究をされたのでしょうか？

山崎　挫折については、ほぼ全部挫折でした。スランプに陥ったり挫折したりしたときにどうしたかは、よく話題に出るのですが、楽だったことがないです。苦労が標準装備のようなものです。韓国に

留学した時も、私は他の人よりも、できるようになるまで時間がかかりました。他の人が聞き取れるようになったり、級を上げたり、友達を作ったりする間も、私だけ全然分からない。同じ期間を過ごしているはずなのに。その時、あまりにも考え込みすぎて、知恵熱なのか熱が出て、頭痛が止まりませんでした。それが収まると大丈夫になることがありました。それが何に対する克服なのかは分からないのですが、前進あるのみだったのかなと思います。具体的にいい方法がなく申し訳ないのですが、諦めないことでしょうか。休んでもいいし忘れてもいい、それは思い出せばいいだけなので失敗ではない。ただ諦めないということが大きかったと思います。

二つ目の質問は研究内容でしたね。語学が専門分野で、韓国語の文法研究をしています。論文も準備しようと思っているものの、なかなか進まずじりじりしているという状態です。周りから「現場に出てしまえばいい」と言われることもあります。例えば教育や出版、通訳などの専門になったり、韓国語の学校を立ち上げたりしたらどうかと言われることもあるのですけれども、それでも研究をやっていたい気持ちがあるのは、研究の成果は常に更新されるからです。どの分野でも同じだと思いますが、語学の研究も教育も進化しています。昔アルクにお世話になっていた時に感じたのは、教育・研究の現場と、書籍出版の現場は全くつながっていないということでした。「いい先生がいる」「こういう記事が書ける人がいる」とつなげる人がいればいいのにと思いました。現在はそういう方も増えていると思いますが、当時は全くいなかったので、それをつなげるお手伝いができたらいいなと今でも思っています。まだかなってはいないのですけれども、少しずつでもできたらと思います。また、今後そういう方がたくさん出てきてくれるはずなので、私がいくつも失敗例を作っておけば、次の人はそれを乗り越えやすいだろうなと考えています。

金（司会）『キムチ』という教材は多くの大学で教科書として使われていますが、韓国語の教科書の世界では、「キムチ以前」「キムチ以後」と言われるほど画期的な本です。

山崎　それは知りませんでした。

質問者④　質問を二つしたいです。韓国語の勉強や仕事をするとき、周囲から反対されませんでしたか？　また、私は最近、自分の学びたいことを学び、自分のやりたい仕事に就くべきなのか、それとも安定した仕事に就くべきなのか迷っています。そのことについて先生はどう思われますか？

山崎　周囲の反対は大きかったです。韓国語の勉強を始めた頃は日韓ワールドカップの前だったので、韓国語の勉強自体を止められました。韓国語を仕事にするかしないかという以前に、韓国語を専攻してどうするの、という時代でした。中国語を勉強しても反対されないと思うのですが、なぜか韓国語は反対されました。あまり受けが良くないというか、周囲にとって聞き映えしなかったようですね。ですが、私は人の反対をわざわざ聞かない、意見はいただきますが、従う必要はないと思っているものですから。良くも悪くも、学費も生活費も留学費用も自分で稼ぎ、自らの責任においてやっていることなので、失敗しても成功しても誰にも文句を言わせないという気持ちがありました。誰かに費用を出してもらっているわけではないので、そこまで反対を言ってくる人もいませんでした。特に留学

後は、誰かに反対されたということはありません。留学中は留学生同士で、韓国に残るのか、日本に帰ったらどうするかを話し合い、みんなで迷って不安はありました。韓国に残った方もいれば、日本に帰国した方もいます。韓国語を趣味で続けている方もいれば、仕事で使っている人もいます。いろいろですね。

もう一つは、安定した仕事か、チャレンジする仕事か。これは常にある悩みだと思います。大事なのは、自分の優先順位が何なのか。「これがないと自分が自分ではいられなくなる」もの。経済力、住む場所の安定、衣食住、趣味、友人関係など、自分で具体的に書き出して、「絶対に外せない」「譲ってもいい」「どちらでもいい」で分けてみます。紙でもいいし、スマホのメモでもいいです。そうすると、どうしても譲れないラインが見えてくるのではないでしょうか。例えば、自分の時間が欲しいなら長時間拘束される企業にはいられない。経済的に安定することが譲れないなら安定した職業。自分の中の１位、２位、３位を決めていき、どちらでもいいゾーン、譲れるゾーンを作ってみます。付箋が楽ですよ。色や大きさを変えて付箋に書けば、位置を上下に動かすだけで書き直さなくていいからです。書き出してみると客観視できます。一回書いたらしばらく忘れておき、次の日にもう一度眺めると客観視しやすいです。自分で見ても分からなければ、友人や親など信頼できる人に見てもらって客観的な意見をもらうのもいいです。

たまに、学生から進路相談を受けることがありますが、「自分が何をしたいのか分かりません」と言うのです。とても悩んでいる様子なので、私の意見ですが、「自分が分からないならば、もう１本ポールを立ててみてほしい」と言ったりします。そのポールが何なのかは人によります。経済力、やりたいことなど。「それがないのならば、誰のために何をしたいのか決めてみてほしい」と。多くの人のためなのか、特定の誰かのためなのか。ポールを１本立てると、自分とポールの間に基準ができて、目標が定めやすくなることがあります。ポールは１本でなくてもいいのですよ。「それが“誰かのために”ということであれば、そういう仕事を探してみたらいいのではないでしょうか」や「そういう基準で動いてみたらどうでしょうか」という話をすることがあります。参考になれば幸いです。

質問者⑤　韓国語を学んでいる学生です。どうやって勉強したら語学力が伸びるのか、伸びに関しての悩みが大きいです。言語を勉強する上では、やはり、その国に行って勉強したほうがいいのでしょうか？

山崎　その言語を使う国に行ったほうが手っ取り早いのは事実です。ただ、韓国語に関していえば、そうとは限りません。家族にネイティブスピーカーがいたり、韓国で生活した経験がある方がその言語に強いのはもちろんですけれども、自分なりにやっていくならば、必ずしも留学が必要なわけではないと思います。もちろん、留学すれば、日本語と語順が似ている言語ですし、韓国語の伸びは早いだろうとは思います。ですが、それが自分のペースや目標などのさまざまな事情に合っているかどうかはまた別です。留学が必要かと問われたとき、必ずしも Yes ではないというのが私の考えです。

韓国語は日本語と類似する点も多いので、やればやっただけできるようになる言語です。集中した期間で勉強した場合、「できるようにならない」ということがありません。先ほど企業研修の話をしました。40 代の男性も多くいましたが、その人たちがカナダラを覚えるところから始め、最後は通

訳になるのです。200 ～ 300 人ほどいましたが、通訳できるレベルに達しなかった人はいませんでした。韓国語でバーッと話しても何を言っているか理解でき、会話をして意思疎通でき、仕事で使えるまでになりました。なので、年齢もあまり関係ないのかなと思います。できないときは休んでもいいので、できると信じて前に進むこと。そうやって進めていくのも“あり”ではないかと思います。

金（司会） 皆さん、ありがとうございました。玲美奈先生は学生時代からの付き合いですが、ドラマのような人生を生きていらっしゃるなと思います。諦めないこと、チャレンジすること、それから常に感謝の気持ちを忘れずに頑張ってこられたと思います。学生の方から学習面で伸び悩んだときの質問がありましたが、最後に、学習面だけでなく、生きていく上でさまざまな壁にぶつかったときに先生が大事にしてきた言葉や気持ちがありましたら、これから社会に出ていく学生へのエールとして教えてください。

山崎 学生の時から、そして今でも壁に貼っておくほどモットーとしている言葉は、「迷ったらやることにする」。そう決めていました。どうしようと迷ったら、もうやることにするのです。やらないと思ったらやりません。どうしようと思ったら、それはもうやるのです。そうやって自分で基準を決めておくと話が早いです。あとは行動に移すのみ、どうやればいいのか考えるのみです。本日は長い時間ありがとうございました。

金（司会） 先生、貴重なお話をありがとうございました。集まってくださった皆さんにも心から感謝申し上げます。最後に、玲美奈先生にもう一度大きな拍手をお願いします。これで講演会は終了とさせていただきます。

全学共通科目言語 B 連続企画
世界を知ろう！　2023 年度 講演会筆録

2024 年 3 月 22 日発行

発行人　浅妻 章如
発行所　立教大学 全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　ライオン企画株式会社

立教大学
全学共通カリキュラム運営センター